

平成 29 年度
神戸市埋蔵文化財年報



2020
神戸市教育委員会

平成 29 年度
神戸市埋蔵文化財年報

2020

神戸市教育委員会

巻頭写真1 住吉宮町遺跡第54次調査



I区拡張1区古墳検出状況
(南から)



墳頂部遺物出土状況
(南西から)

卷頭写真 2 保存科学調査・作業（旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道 平成 26 年度調査）



1. 煉瓦下水管検出状況（京町筋：平成 27 年 2 月）



2. 京町筋煉瓦下水管内状況 1（神戸市建設局提供）



3. 同上 2（同上）



4. 下水管に使用された煉瓦



5. 刻印「明石 増谷」



6. 展示状況（平成 29 年度埋蔵文化財センター秋季企画展）

序

神戸市域には古来より多くの人々が住み、その営みの痕跡である遺跡が約 900 カ所も存在しています。

遺跡の範囲内で開発事業が行われる場合、遺跡から知ることができるかけがえのない地域の歴史を後世の人々に伝えるため、発掘調査を行い、人々の営みの痕跡について記録を取り、残しています。また調査から得た成果を市民の皆様に還元し、活用するための事業にも取り組んでいます。

本書では、平成 29 年度に実施した 20 遺跡、27 件の発掘調査の成果と、7 件の遺物整理の内容を概要として収録いたしました。本書が神戸の歴史と文化を学ぶための資料として、また、埋蔵文化財へのご理解を深めていただける一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および本書を作成するにあたり、ご協力いただきました関係諸機関ならびに関係者各位に対し、厚くお礼申し上げます。

令和 2 年 3 月

神戸市教育委員会

例　　言

1. 本書は、神戸市教育委員会が平成29年度に実施した埋蔵文化財発掘調査事業の概要である。事業に関わる発掘調査は、下記の調査組織によって実施した。

調査関係者組織表

神戸市文化財保護審議会（考古学担当）

黒崎　直　　大阪府立弥生文化博物館館長
菱田　哲郎　　京都府立大学文学部教授

教育委員会事務局

教育長	雪村新之助		
社会教育部長	日下　優		
文化財課長	千種　浩		
埋蔵文化財センター担当課長	安田　滋		
埋蔵文化財係長	前田佳久		
文化財課担当係長	松林宏典		
〃　(保存科学担当)	中村大介		
事務担当学芸員	山口英正	井上麻子	山田侑生
調査担当学芸員	池田　毅	阿部敬生	浅谷誠吾　藤井太郎
	石島三和	阿部　功	綾瀬文佳　荒田敬介
	中井菜加		
埋蔵文化財センター担当学芸員	谷　正俊	内藤俊哉	佐伯二郎　井尻　格
	中谷　正		
震災復興派遣職員（福島県）	斎木　巖		

- 本書に記載した位置図は、神戸市発行5万分の1神戸市全図を、各遺跡の位置図は、神戸市発行2,500分の1都市計画図を使用した。
- 本書は、埋蔵文化財発掘調査一覧表に示した各調査担当学芸員が執筆し、I. 事業の概要のうち、1～4については東喜代秀が執筆し、5については中村が執筆した。III. 保存科学調査・作業の概要是千種・中村が執筆した。本書の編集は中村・山田・中井が行った。
- 調査現場の写真撮影、遺構・遺物図のトレイスなどについては、各調査担当者が行った。
- 表紙写真（住吉宮町遺跡第53次調査出土の土器群）・裏表紙写真（西岡本遺跡第12次調査出土の翡翠勾玉）は内田真紀子（写房楠華堂）が撮影を行った。

目 次

序 例言

I.	事業の概要	
1.	事業体制	2
2.	開発指導	2
3.	埋蔵文化財調査事業	2
4.	刊行物一覧	3
5.	埋蔵文化財の公開活用事業	3
II.	平成 29 年度の発掘調査	
1.	本庄町遺跡 第 10 次調査	15
2.	本山遺跡 第 42 次調査	19
3.	岡本北遺跡 第 12 次調査	23
4.	西岡本遺跡 第 12 次調査	27
5.	住吉宮町遺跡 第 53 次調査	33
6.	住吉宮町遺跡 第 54 次調査	43
7.	郡家遺跡 第 94 次調査	49
8.	都賀遺跡 第 21 次調査	53
9.	篠原遺跡 第 38 次調査	57
10.	篠原遺跡 第 39 次調査	61
11.	大石東遺跡 第 5 次調査	65
12.	日暮遺跡 第 46 次調査	67
13.	熊内遺跡 第 7 次調査	69
14.	旧ドレウェル邸（ラインの館）第 1 次調査	71
15.	上沢遺跡 第 61 ~ 64 次調査	79
16.	兵庫津遺跡 第 72 次調査	85
17.	兵庫津遺跡 第 73 次調査	87
18.	岡場遺跡 第 5 次調査	91
19.	大田町遺跡 第 20 次・21 次調査	93
20.	南別府遺跡 第 7 次調査	99
21.	出合遺跡（出合城跡）第 52 次調査	105
III.	保存科学調査・出土遺物の調査	
1.	保存科学調査・作業の概要	108

I. 事業の概要

1. 事業体制

神戸市教育委員会事務局文化財課は、埋蔵文化財係と文化財保護活用係の2係体制で文化財の保護と活用を担っている。埋蔵文化財係に関する業務のうち、文化財保護法に基づく届出などの窓口業務、試掘調査や本発掘調査の受託契約等の事務や補助金事務は市役所文化財課で行い、発掘調査終了後の出土品の復元や保存修復およびその後の管理と活用に関しては、神戸市埋蔵文化財センターで行っている。出土品や発掘調査で作成した写真や図面等は、記録保存のために空調管理した収蔵施設で保管し、さらにこれらを活用した企画展示、様々な体験学習、出張講座等は埋蔵文化財センターを中心として展開している。また、外部からの依頼による収蔵資料に対する資料調査や貸出にも対応している。

神戸市埋蔵文化財センターの収蔵庫は飽和状態にあったが、その収蔵機能を補完する施設として旧神戸市立北須磨教育相談所（旧竜が台幼稚園：須磨区竜が台6丁目）を、平成29年度に小改修を行ったうえで収蔵施設として新たに確保することができた。この結果、28リットル入りコンテナ換算で、6700箱程度が収蔵できた。

平成29年度についても、東日本大震災の復興調査支援のため、福島県教育庁文化財課（南相馬市駐在）に4月から学芸員1名を1年間派遣した。

2. 開発指導

周知の埋蔵文化財包蔵地内における土木工事等については、文化財保護法第93条・第94条に基づく届出・通知が必要であり、各事業者に対して必要とされる保護措置を示している。また、建築確認申請に伴う事前届出書の閲覧を実施し、周知の埋蔵文化財包蔵地内における建築行為については埋蔵文化財発掘届出書の提出を促している。

平成29年度の文化財保護法に基づく届出・通知件数は792件（前年度728件）であり、このうち、民間事業者・個人による第93条の届出が721件（前年度664件）であった。また、開発行為事前審査117件（前年度124件）、試掘調査依頼は138件（前年度104件）であった。以上のように届出の件数は、平成29年度は前年度比1割程度の増加が認められた。試掘調査については、近隣データの活用や、建物の解体に伴う届出に関しては基礎解体時の立会を行うことで試掘調査を兼ねるようにしているにもかかわらず、平成29年度は前年度より3割程度の増加となっている。窓口やファクス等による埋蔵文化財包蔵地の確認、問い合わせは年間で約5,000件であった。

これらの届出や問い合わせに対して、試掘調査によって得られた情報や既存情報をGISデータに集積し、それを基に可能な限り建物の基礎が遺跡に影響を与えないように、設計変更を求めている。そのことによって、発掘調査を回避し、新たな建物等の下に遺跡の一部を保護している件数も多い。

3. 埋蔵文化財調査事業

平成29年度に実施した埋蔵文化財調査事業は、調査事業27件、整理事業7件で、それに要した経費の総額は、83,913千円であった。

国庫補助事業 発掘調査事業のうち、その原因が個人住宅や個人事業者、零細事業者による場合は国庫補助事業として、規定と基準により公費を充当している。平成29年度の緊急発掘調査事業費は35,180千円であった。

市内発掘調査 発掘調査件数は、平成 28 年度に比べ 7 件増加した。

発掘調査面積は 3,641m²（延べ 4,625m²）で、このうち民間関連事業によるものが 3,523m²（延べ 4,507m²）と 97%近くを占めている。平成 28 年度に比して、公共事業が大幅減少の状況にある。

面積別でみると、調査事業 27 件のうち 100m²以下の調査が 21 件を占め、個人住宅などを中心にした小規模開発事業が多いことを示している。この要因の一つとしては、地震に対応できる建物基礎構造を確保するために、個人住宅においても地盤改良工事などで基礎が深くなり、埋蔵文化財に影響することが要因の 1 つであると考えられる。

また、平成 29 年度は埋蔵文化財調査の公開事業は実施しなかった。

これまで刊行した発掘調査報告書については、準備の整ったものから奈良文化財研究所の「全国遺跡総覧」において公開を進めている。

表 1 文化財保護法に基づく届出・通知等件数一覧

No.	内 容	件数
1	発見・発掘届（保護法 93・94 条関係）	792 件
i	民間の事業に伴う発掘届（93 条）	
ii	公共の事業に伴う発掘通知（94 条）	
iii	発掘届・発見通知（92・96・97 条）	
2	開発行為事前審査等各種申請	117 件
3	試掘調査（依頼件数）	138 件
4	発掘調査	27 件
i	民間事業に伴う発掘調査	
ii	公共事業に伴う発掘調査	
5	工事立会	78 件
6	整理作業（復興調査整理作業を含む）	7 件

表 2 発掘調査面積（単位：m²）

	民間関連事業	公共関連事業	合 計
調査面積	3,523	118	3,641
延べ調査面積	4,507	118	4,625

表 3 発掘調査面積別件数（試掘および確認調査を除く）

調査面積	件 数	%
~ 100m ²	21 件	78
101 ~ 300m ²	4 件	14
301 ~ 500m ²	1 件	4
501 ~ 1,000m ²	0 件	0
1,001 ~ 2,000m ²	1 件	4
2,001 ~ 5,000m ²	0 件	0
5,001m ² 以上	0 件	0
合 計	27 件	100

4. 刊行物一覧

平成 29 年度に刊行した発掘調査報告書等は、下記のとおりである。

『兵庫津遺跡第 69 次調査発掘調査報告書』額価 2,000 円、『神出窯跡群発掘調査報告書』額価 3,000 円、『北青木遺跡第 8 次発掘調査報告書』額価 1,500 円、『深江北町遺跡第 17 次調査埋蔵文化財発掘調査報告書』額価 2,000 円、『平成 27 年度神戸市埋蔵文化財年報』額価 1,000 円、『神戸市埋蔵文化財分布図（平成 30 年度版）』額価 500 円、『神戸の遺跡シリーズIV 神戸の古墳 I』（第 2 版）額価 200 円。

5. 埋蔵文化財の公開活用事業

考古資料の調査・整理・保管および特別利用等

埋蔵文化財センターでは発掘調査の一環として出土遺物の復元・修復作業および金属製品・木製品等の保存科学的処置ならびに、発掘調査報告書の作成を行っている。修復・調査作業の終了した遺物および写真・図面等の記録類は主として埋蔵文化財センターにおいて保管され、公開活用事業や調査研究等の利用に供している。平成 29 年度における資料の特別利用は表 4 ~ 7 のとおりである。

埋蔵文化財センターにおける公開活用事業

埋蔵文化財センターでは展示や体験講座等、埋蔵文化財の公開活用事業を行っている。平成

表4 考古資料の館外貸出

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	兵庫県立考古博物館	特別展「兵庫の古鏡」で展示	西宮女塚古墳第5次調査出土 三角縁鉢鏡（9号） “ ” 両文帶神獸鏡（11号） “ ” 銅鏡表面装飾レプリカ（3・8号） 酒呑童子鏡レプリカ（6号） 森北町道跡第2次調査出土 鎧鏡文鏡 写真 西宮女塚古墳第5次調査出土青銅鏡 7点	6
2	兵庫県立歴史博物館	特別展「ひょうごと秀吉」で展示	兵庫津遺跡第37次調査出土 一石五銭唐 第62次調査出土 土師器類、漆器地すり鉢、備前焼地利、明青花皿、白磁、瓶、天日加纏、哥窯盤青花盤、土師器鍋、束縛系組合鉢 堺町道跡第3次調査出土 鋼丸	12
3	兵庫県立考古博物館	特別展「青銅の器と武器」で展示	北青木道跡第5次調査出土 純銀 “ ” 第2次調査出土 純銀伏狹鏡 西神ユータクン第65地点道跡出土 銅鏡輪型木製品 喜井道跡第28次調査出土 武器形青銅鏡詩毫 写真 同上 角 10点	5
4	尼崎市教育委員会	尼崎市立附属資料館特別展「みんなのまわりの道路をさがそう～学校の下の道路～」で展示	人間道跡第1次調査出土 沈文土器、弥生土器、青石 人間道跡鉄鋤中野地区第3次調査出土 土師器、弥生土器、石器 写真 同上 5点	11
5	鳥取県立古代出雲歴史博物館	特別展「陰城の黒曜石」で展示	新方道跡手西方地区第5次調査出土 人骨（3号） 写真 同上 1点	1
6	たつの市教育委員会	たつの市立埋蔵文化財センター特別展「古代のマツリと新宮河内道跡」で展示	本山道跡第12次調査出土 石斧丁、石斧、砾石 写真 本山道跡出土石器集合写真、出土状況 3点	6
7	九州歴史資料館	特別展「大宰府への道・古代都市と交通」で展示	深江北町道跡第9・14次調査出土 墓書き土器、木物、硯、木製品、ウマ面 古田南道跡出土 木製市場 写真 深江北町道跡出土 墓書き土器 他 16点	15

29年度の入館者数は32,349人であり、その内、市内小学校団体の入館が91校5,735名で全体の約1/5を占めている。4・5月は6年生の歴史学習が始まる時期であり、「弥生時代」や「古墳時代」等の学習のために、また1・2月には「人びとのくらしのうつりかわり」として“ちょっと”昔のくらしを学習する3年生が、冬季企画展『昭和のくらし・昔のくらし』展を見学するために来館している。この時期には市内のみならず、近隣市町からの小学校団体も来館している。

企画展の開催 埋蔵文化財センターでは平成3年の開館以来、毎年数回の企画展を開催しており、平成17年度より年4回以上の企画展を開催している。平成29年度は表8のとおり4回の企画展を開催した。

春季企画展は先述したとおり、小学校6年生の歴史学習導入に際し、歴史に興味が持てるようなわかりやすい展示を心掛けている。当年度は『発見！遺跡のどうぶつたち』と題し、有史以前からの動物と人の関わりについて「動物を食べる」「動物を描く」「動物と働く」という3つの観点から探る展覧会であった。展示には市内外遺跡から出土した動物遺体をはじめ、各地で出土した絵画土器や馬具などを展示した。会期中、展示関連をテーマとした講演会および展示解説とバックヤード見学会を実施した。

夏季企画展は、遺跡出土資料の中に見出せる、修理しながら何度も使用したものや、本来の用途を終え、再び別の用途に利用されたものなどに着目した“もったいない”文化～リサイクル・リユースの考古学～を開催した。展示資料は、建物の建て替え時に再利用された祇園遺跡出土の瓦や兵庫津遺跡で出土した補修痕の残る陶磁器類、船材を井戸側に転用した二葉町遺跡出土の木材などである。また展示の最後では神戸市における環境行政の取り組みに触れ、現代にも“もったいない”文化が受け継がれていることを紹介した。なお会期中には展示関連講演会と展示解説およびバックヤードの見学会を開催した。

表5 特別利用

順	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	個人	論文執筆	西岡本遺跡（野寄群集遺3号墳）出土 瓶、須恵器	4
2	個人	学士論文執筆	北青木洞跡、本山洞跡、 西神ニユータンNo.65 地点遺跡出土 銅鐸陶型木製品	3
3	個人	論文執筆	住吉宮町第52次調査出土 方格T字鏡	1
4	個人	博士論文執筆	西神ニユータンNo.55 地点遺跡出土 鉄劍 堅田城社1号墳出土 鋼劍	2
5	兵庫県立歴史博物館	特別展「じょうごと秀吉」出品予定資料の事前調査	兵庫津遺跡第57次調査出土 陶磁器、五輪塔 端谷遺跡第5次調査出土 瓢箪	10
6	歴文化財サービス	3Dイメージングによるレプリカ製作技術の開発	神出窯跡群出土 鬼瓦	1
7	古代寺院史研究会	科研費基盤研究に係る検討会の実施	上沢遺跡、兵庫津遺跡、大田町遺跡、天神町遺跡、 御城跡出土 瓦	7
8	個人	学術研究	神出窯跡群出土 須恵器 神楽遺跡第1次調査出土 須恵器、土師器、黑色土器	225
9	個人	学術研究	端谷遺跡第1次～第5次調査出土 瓦	-
10	㈱メディア・バスターズ	NHK制作「発掘！お宝ガレリア」に使用	西永女塚古墳出土 革帶環（1号）、革帶環碎片	2
11	弘前大学人文社会学科	学術研究	雪井遺跡第1次調査、大間道跡第1次調査出土 イヌチ種子	-
12	㈱GEOソリューションズ	写真から3Dデータを合成する技術の紹介	住吉宮町第52次調査 埋蔵地図データ	1
13	個人	学術研究	須高山遺跡、西神ニユータンNo.65 地点遺跡、新方遺跡北方地点、西神ニユータンNo.50 地点遺跡出土 石瓶	197
14	個人	学士論文執筆	舞子古墳群ノ谷支群5号墳出土 瓶	1
15	個人	学術研究	住吉宮町遺跡第53次調査出土 上輪器、須恵器 那家遺跡下山田地区第4次調査出土 移式系竪 上沢遺跡第27次、第28次調査出土 銅式系竪	15
16	鳥取県立古代出雲歴史博物館	企画展「駿岐の黒曜石」出品予定資料の事前調査	新方遺跡野手下方地区第5次調査出土 人骨（3号）、石器（18点）、『ニチアニア』上巻（1点）	20
17	個人	学術研究	白水遺跡第3次調査出土 鉄製品（51点）、滑石製模造品（7点）、白玉（717点）	776
18	個人	科研費基盤研究に係る調査	白水遺跡第6次調査出土 木製品	50
19	姫路市埋蔵文化財センター	発掘調査報告書執筆に係る類例調査	上池遺跡、今池尻遺跡、白水遺跡出土 土器	149
20	個人	学術研究	上沢遺跡第27次、第28次調査出土 上輪式系土器 出合山遺跡第32次調査出土 須恵器、上輪器 小路大町遺跡第4次調査出土 土器器、韓式系土器	50
21	熊本県立民族考古館	同組発行「研究紀要」への掲載および「民族考古学データベース」の作成	高峰山古墳群2号墳、9号墳出土 石室石材（鏡張壁面）	2
22	九州歴史資料館	特別展「大宰府への道」出品予定資料の事前調査	深江北山遺跡第9次調査出土 黒土器、瓶、木筒、ウマ糞 吉田山遺跡出土 木製容器	17
23	㈱ドキュメンタリー・ジャパン	広島テレビ制作「世界を変える清盛朝」に使用	祇園遺跡出土 貨幣陶器、銅錢 二葉山遺跡出土 青磁、白磁 丸ノ内遺跡、横・虎尾山遺跡出土 銅錢	46
24	個人	学術研究	住吉宮町遺跡第24次・4号墳出土 石杵	1
25	姫路市埋蔵文化財センター	発掘調査報告書執筆に係る類例調査	上池遺跡出土 土器	49
26	個人	学術研究	大間道跡第1次調査出土 陶生土器（168点） 戎町遺跡第1次調査出土 陶生土器（30点） 本山遺跡第17次調査出土 陶生土器（50点）	248
27	個人	発掘調査報告書執筆に係る類例調査	植木町遺跡第3次調査、若井遺跡第1次調査、戎町遺跡第35・9次・50・6次調査、北青木遺跡第7次調査出土 陶生土器	24

表6 資料調査成果の公表

順	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	個人	「古代学研究」214号に掲載	西岡本遺跡（野寄群集遺3号墳）出土 瓶	2
2	個人	科研費成果報告書「後期和銅の研究」に掲載	鬼室山古墳出土 青銅鏡	1
3	姫路市埋蔵文化財センター	「村東遺跡-姫路市英賀保原周辺地区埋蔵文化財に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」に掲載	上池遺跡出土 土器	4

表7 画像データなどの貸出

No.	申請者	利用目的・内容	資料名	資料点数
1	御ティライフ NEW	同社発行「シティライフ」に掲載	佐古宮町道路第52次調査古墳全景 写真	1
2	御イディー	山陽電気鉄道㈱発行「E S C O R T」に掲載	五色原古墳、五色原古墳まつり 写真	3
3	御フジコミュニケーション	西区役場発行「来て見て楽しいまち西区」	埋蔵文化財センター外観、展示施設 写真	2
4	御山陽アド	山陽電気鉄道㈱発行「行業ごよみスター」	五色原古墳、五色原古墳まつり 写真	3
5	御山田出版社	同社発行「もういちど読む山田日本史」に掲載	五色原古墳、航空写真	1
6	明治図書出版社	同社発行「整理と対策 社会」に掲載	五色原古墳 写真	1
7	御ザ・ワーフス	テレビ朝日「スーパーチャンネル」に使用	新方庭跡出土船形 墓 玄室 写真	1
8	御浜島酒店	同社発行「新津 日本史」に掲載	森北古跡出土青銅鏡、五色原古墳	2
9	御朝日旅行	パンフレット、機内誌「旅なつかし」に掲載	五色原古墳 写真	1
10	兵庫県立歴史博物館	特別展「ひまごと秀吉」展示回路等に掲載	瑞谷城跡出土銅瓦 写真	1
11	御メディア・パステー	NHK制作「発掘!お宝ガレリア」に使用	西永塚古墳出土青銅鏡、埋蔵施設等 写真・復元図データ	12
12	垂木区五色山健寿会	同会発行「歴く30周年記念誌」に掲載	五色原古墳 航空写真	4
13	神戸大大学	同大学発行「平成29年度 神戸駒入入学卒業記念誌」に掲載	新方庭跡出土第13号人骨 写真	1
14	明石市文化・スポーツ課	明石市立文化博物館企画展「明石灘の世界V」の展示回路等に掲載	舞子砲台跡 写真	4
15	御伊水社	ハイバーコラボレーションジャパン発行「戦国王67」に掲載	兵庫津道路第62次調査 写真	2
16	御ミルヴァ書房	同社発行「伝説と呼ばれた人々」に掲載	橋・荒田町道路周辺 航空写真	1
17	大阪商工会議所	同所発行「大阪税定 試験回顧」に掲載	五色原古墳 航空写真	1
18	御天夢人	御ユーキャン発行「大人の学び直し 日本史講座キリスト」に掲載	五色原古墳 航空写真・出土埴輪 写真	3
19	御イディー	J A S T 兵庫六甲号報誌「Way e Rakkō」10月号に掲載	玉塚古墳 航空写真	1
20	御大林組 設計本部	イオシモール兵庫府南端式のバベル展示に使用	兵庫津道路第62次調査 写真	2
21	個人	御ワニブックス「美しい古墳」に掲載	五色原古墳 航空写真	1
22	大阪府立共生文化博物館	秋季特別展「海に生きた人びと」の展示回路等に掲載	西永塚古墳周辺 航空写真	1
23	御ウォーカン	㈱開拓テレビ制作「ちゃちゃ入れマンデー」に使用	五色原古墳 写真	3
24	兵庫県立考古博物館	秋季特別展「青銅の器と武器」の展示解説パネルに使用	吉井遺跡第28次調査 写真 神戸市周辺 航空写真	2
25	高槻市教育委員会	同教委発行「高槻城から日本の城を読み解く」に掲載	兵庫津道路第62次調査出土石垣 写真	2
26	熊本県立考古博物館	同館発行「平成29年度 熊本県立考古博物館研究会要」第13集に掲載	北神N T第3地点古墳 高輝山古墳群2、3号墳 写真	6
27	尼崎市教育委員会	尼崎市立史料館企画展「アセサリー・Ⅱ」のパンフレット等に掲載	新方庭跡野千西方地区第5次調査 写真	6
28	国立歴史民俗博物館	同館企画展「日本の後円墳と東アジア」の展示パネルに使用	五色原古墳出土削身円筒輪 写真	1
29	国立歴史民俗博物館	同館企画展「世界の眼で見る古墳文化」の展示回路等に掲載	五色原古墳 航空写真	1
30	村上市教育委員会	同教委発行「シングルジム 山元道路は何を語るのか」記録集に掲載	北齊木綿跡出土状况 写真	1
31	朝日新聞出版	同社発行「街時代×タイムワープ」に掲載	北齊木綿跡、新方庭跡出土磨刀削輪 写真	2
32	神戸市立西郷小学校育友会	同会発行「西郷だより」第82号に掲載	西永塚古墳出土青銅鏡 写真	1
33	兵庫県立考古博物館	ひょうご歴史研究室企画展「ソシエタリーム「湊路」古代の魅力を探る」の展示パネルに使用	五色原古墳 航空写真	1
34	六甲山を活用する会	同会発行「六甲山物語」に掲載	五色原古墳 航空写真 神戸市埋蔵文化財センター遺物整理風景 写真	2
35	戎光洋出版社	同社発行「幕末の大阪門と台場」に掲載	舞子砲台跡第4次調査出土石垣 写真	1
36	兵庫県立農民センター	「兵庫県立農業の地記念事業検討委員会」の配布資料に掲載	兵庫津道路第57次調査 写真	2
37	御洋菓社	同社発行「歴史E&L 最新日本史講座 畠田正氏」に掲載	兵庫津道路第62次調査出土石垣 写真	1
38	御洋大学出版部	同出版部発行「海洋考古学入門」に掲載	兵庫津道路第14次調査出土油井口・魚貝類遺存体 写真	1

秋季企画展では神戸開港 150 年を記念し、『“大輪田”“兵庫”そして“神戸”～ミナトコウベの 1300 年～』を開催した。神戸の港の先駆けとなった奈良・平安時代の敏馬崎を端緒に、平清盛が日宋貿易のために整備した大輪田泊、室町幕府による日明貿易や江戸時代に北前船の寄港地として隆盛を見た兵庫津、さらには幕末の兵庫開港から現在の神戸港に至るまでを、兵庫津遺跡や祇園遺跡など市内の遺跡から出土した貿易陶磁や旧神戸外国人居留地煉瓦造下水道遺跡周辺で出土した煉瓦で紹介した。また市外においても魚住泊や川尻泊など古代の港湾に関連する遺跡で出土した施設材や貿易陶磁も併せて展示した。

企画展開催に際して記念講演会を以下の通り 3 回実施した。11 月 23 日には上海師範大学の森村健一特約研究員を招き「出土遺物から見た近世茶道文化」というテーマで、11 月 26 日には神戸大学大学院の藤田裕嗣教授を招き「1445 年「兵庫北関入船納帳」からみた兵庫津の姿」と題して、さらに 12 月 2 日には奈良県立大学の戸田清子教授により「神戸外国人居留地の成立と活躍した外国人」と題した講演会を実施した。

冬季企画展は毎年『昭和のくらし・昔のくらし』と題して展覧会を開催し、今回で 12 回目となり、昭和のくらしを身近に体験できる展示を行っている。この企画展は先述のとおり小学校 3 年生の学習課程に即した展示でもあるため、小学校団体の見学者が多い。一方で、展示された電化製品や玩具などに実体験をもつ世代の方々からも、懐かしさをもって好評を得ている。今回は昭和 30 ～ 40 年代の夏の茶の間と台所を実物大で再現したジオラマを展示了が、来館者においては親から子、子から孫への語らいの場として好評であった。

企画展に関連したイベントとしては、当館ボランティアスタッフの協力を得、「昭和のあそび・昔のあそび」を実施した。参加者には割りばし鉄砲づくり・こま回し・竹馬・糸巻き戦車など昔ながらの遊びの体験や、神戸市立西図書館の協力による紙芝居を観覧していただいた。また「昭和の車大集合」として、昭和時代のレトロな車のパレードや乗車体験などを旧車運転同好会の協力のもとに実施した。

体験考古学講座 夏休みの期間を中心に、「体験！考古学講座」を実施した。土器や勾玉・銅鐸などの発掘調査で出土する遺物の製作技法を学び、それに近い方法で古代の物づくりを体験する講座で、参加は小学校 4 年生以上を対象としたものである。全 10 種の講座で、のべ 618 名が受講した。

歴史講演会 各企画展のテーマにあわせた、展示をより深く理解できるような内容で、秋季企画展に際しては外部講師による記念講演会を 3 回、また春季・夏季の両企画展では当教育委員会文化財課学芸員による 2 回の、計 5 回開催した。のべ 200 名が聴講した。

連続講座「こうべ考古学」 平成 28 年度に始まった全 7 回の連続講座で、今回は遺跡出土の土器に注目した入門編として、縄文時代から江戸時代までを 6 つの時代に分け、各時代の土器の見かたとその文化的背景について解説した。最終回には最近の調査成果として、当該年度に実施した神出窯跡群の資料整理の成果報告と、東日本大震災の被災地支援として東北に職員を派遣して実施した発掘調査について報告を行った。のべ 419 名の参加があった。

出張考古学講座・出張授業・出張講義 埋蔵文化財センターで実施する体験考古学講座以外に、市内小学校や公民館からの依頼に基づいて学芸員が赴き、勾玉づくりや土器づくりの体験講座や学校での地域の歴史についての授業や講義を行っている。当年度は 11 団体、913 名の参加があった。

学校等との連携授業 連携協定を結んでいる神戸学院大学の博物館学芸員課程の実習とし

て、学生の企画した展示に関する展示実習指導を行った。その実習成果は、平成 29 年 11 月 11 日～12 月 9 日に同大学図書館において「大学周辺の古人（いにしえひと）の暮らし（台所編）」「兵庫津遺跡から見る江戸時代の人々の暮らし」の 2 テーマで展示が行われた。

また、夏季には各大学より博物館実習生を受け入れており、当年度は 8 月 7 日～11 日の 5 日間、神戸学院大学、神戸芸術工科大学、神戸女子大学からそれぞれ 2 名、計 6 名の実習生を受け入れ、考古資料の取り扱いや展示保管環境の測定、資料の写真撮影、保存科学、展示企画立案などの実習を行った。

5 月 29 日～6 月 2 日および 11 月 6 日～10 日の 2 回、兵庫県下の中学校 2 年生の職業体験プログラムである「トライやるウィーク」に協力し、市内 15 校から計 33 名の生徒を受け入れ、出土土器の洗浄など埋蔵文化財センターでの仕事を体験してもらった。

また毎年、神戸市小学校教育研究会社会科部と連携し、神戸市生涯学習支援センターコミステカコウベにおいて 9 月に開催される小学生の夏休み自由研究作品展である『神戸市小学校社会科作品展』において、考古学的な遺物や遺跡に関する優秀な研究作品を 34 点選定し、『埋蔵文化財センター賞』を授与した。

地域連携事業

各地域におけるイベントや各区役所・西図書館等と連携して埋蔵文化財の公開活用事業を実施した。

地域事業への参加協力 西区においては、「西神中央公園桜まつり」（4 月 8 日）、「西神工業団地 IP フェア」（8 月 25 日）、「櫛谷川まつり」（9 月 2 日）等の地域におけるイベントに参加・協力し、埋蔵文化財センターや地域の遺跡をパネルなどで紹介し、現地での遺跡説明などを行った。また西図書館とは「2017 西図書館自由研究相談室」において学芸員が「神戸の遺跡相談室」と題して講演し、また夏休みの期間中両館を回るクイズスタンプラリー「お宝だいぼうけん！7」を実施した。

北区では、毎年 11 月 2・3 日に北区道場町の農村環境改善センターにて開催される「道場町文化祭」において、「道場町の埋蔵文化財展」に参加協力している。当年度は「古墳時代前期における人々の生活と交流—塙田北山東古墳の造られた時代—」展を行った。また、引き続き 11 月 6 日～17 日には道場小学校において同テーマでの展示を実施した。その他、12 月 16 日には北神地区 9 中学校の合同生徒会会議の一環として、63 名の生徒会役員が参加し「道場フィールドワーク」が行われた。当日は道場町内の史跡を巡った後、道場ふれあいセンターにおいて、当課学芸員が町内の遺跡についての講演を行った。

「五色塚古墳まつり」の開催 垂水区に所在する国史跡五色塚古墳の活用を促進する目的として、平成 26 年度より垂水区役所と連携し『五色塚古墳まつり』を行っている。当年度は 6 月 10 日に開催した。これに先立つ 5 月 23 日には、地元霞ヶ丘小学校の 6 年生に授業の一環として小型の円筒埴輪を作ってもらった。まつり当日には韓国打楽器グループ「コルモッキル」の打ち鳴らす音楽の中、各々が古代衣装をまとい、自分の作った埴輪を携えて古墳の周囲を練り歩き、墳頂にその埴輪を並べて古墳のマツリを疑似体験した。午後には一般の方も参加できる「勾玉作り」「鏡づくり」「土器・埴輪づくり」などの古代体験メニューを実施した。午前・午後合せて 822 名の参加者があった。

「おおとし山まつり」の開催 例年、文化財保護強調週間（11 月 1～7 日）の期間中、垂水区にある市史跡大歳山遺跡（舞子細道公園）において、垂水区役所との連携事業として「おお

とし山まつり」を開催している。当年度は 11 月 4 日に実施し、遺跡公園内に復元している弥生時代の竪穴建物の公開と、「勾玉づくり」「土器づくり」「塩づくり」「赤米試食」などいろいろな古代体験イベントを開催した。当日は 510 名の参加があった。

「西区地域学」の開催 西区役所・西図書館と連携し、年 1 回、西区とその周辺地域に所在する文化財を巡るバス見学会を開催している。12 回目となる当年度は、西神戸「三谷三山古寺巡礼」と題し、11 月 19 日、三身山太山寺（伊川谷）、比金山如意寺（櫛谷）、高和山性海寺（押部谷）をマイクロバスで移動して見学した。30 名の参加があった。

史跡五色塚古墳の公開

垂水区所在の史跡五色塚古墳は、日本で初めて築造当時の姿に復元された、実際に墳丘上に立つことのできる巨大前方後円墳として全国的に有名であり、歴史学習の場として学校教育・社会教育に活用されている。また明石海峡を望む絶好のビューポイントとして多くの見学者がある。平成 29 年度の入場者は 36,467 人であった。見学に訪れた小学校団体および希望のあった団体に対しては、学芸員が現地において解説を行った。

表 8 企画展

展 覧 会 名	開 催 期 間	日 数	入館者数
発見！遺跡のどうぶつたち	4/15 (土) ~ 5/28 (日)	44	7,219
“もったいない”の文化 リサイクル・リユースの考古学	7/15 (土) ~ 9/ 3 (日)	43	3,986
“大輪田” “兵庫”そして “神戸” ~ミナトコウベの 1300 年~	10/14 (土) ~ 12/ 3 (日)	42	3,596
昭和のくらし・昔のくらし 12	1/20 (土) ~ 3/ 4 (日)	38	7,664

表 9 歴史講演会

月 日	講 演 名	講 師	参 加 者 数
5 月 13 日	古代人とどうぶつたち	神戸市教育委員会学芸員 西岡・中村	43
8 月 5 日	遺跡から見た “もったいない” の文化	神戸市教育委員会学芸員 佐伯二郎	11
11 月 23 日	出土遺物から見た近世茶道文化	上海師範大学特約研究員 森村健一 氏	48
11 月 26 日	1445 年『兵庫北関入船納帳』からみた兵庫津の姿	神戸大学大学院教授 藤田祐嗣 氏	37
12 月 2 日	神戸外国人居留地の成立と活躍した外国人	奈良県立大学教授 戸田清子 氏	61

表 10 こうべ考古学入門

月 日	講 演 名	講 師	参 加 者 数
6 月 17 日	考古資料の基本 “土器” のミカタ・魂の欄文土器	神戸市教育委員会学芸員 佐伯二郎	65
8 月 26 日	繊細優美な弥生土器	神戸市教育委員会学芸員 前田佳久	78
9 月 23 日	伝統の “土師器” と新型土器 “須恵器”	神戸市教育委員会学芸員 安田 滋	65
10 月 28 日	縄の土器・縄の土器 須恵器・土師器と・・・	神戸市教育委員会学芸員 井上麻子	60
11 月 18 日	中世土器の拓がり 束縛系須恵器と中世陶磁器たち	神戸市教育委員会学芸員 繁縄文佳	44
12 月 23 日	近世江戸文化 様々な近世陶磁の世界	神戸市教育委員会学芸員 中谷 正	50
3 月 3 日	神出窯跡群の整理報告	神戸市教育委員会学芸員 繁縄文佳	57
	神戸市の東日本大震災復興関連埋蔵文化財調査支援について	神戸市教育委員会学芸員 安田 滋	
	福島県派遣報告	神戸市教育委員会学芸員 山田侑生	



fig.1 春季企画展「発見！遺跡のどうぶつたち」



fig.2 パックヤードツアー



fig.3 出張考古学講座「埴輪づくり」



fig.4 体験考古学講座「ガラス玉を作ろう」



fig.5 五色塚古墳まつり



fig.6 おおとし山まつり



fig.7 体験考古学講座「竪穴住居を建てよう」

事業の概要

表 11 埋蔵文化財発掘調査一覧

遺跡名	所在地	調査担当者	調査面積 (m ²) 延調査面積 (m ²)	調査期間	調査内容	調査原因
1 本庄遺跡 第 10 次調査	東灘区深江北町 2 丁目 10-12	池田 篤 中井栄加	1,700 2,000	29.11.7 ~ 30.3.29	平安時代前頭のビット・土坑を検出。木製品・施物陶器・墨書き土器が出土。	社員寮建設
2 本山遺跡 第 12 次調査	東灘区本山町 4 丁目 79-1 他 10 番	浅谷誠吾 阿部 功	167 167	29.8.21 ~ 29.9.~	弥生時代の溝、落ち込み、ビットおよびこれらの遺構を覆う様に弥生時代中期の土器を含む層を検出。	共同住宅建設
3 四本木遺跡 第 12 次調査	東灘区西岡本 5 丁目 60-3	阿部 功	25 25	26.2.13 ~ 30.2.28	弥生時代後半期から切妻の溝、ビット・堅六建物を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
4 西岡本遺跡 第 12 次調査	東灘区西岡本 5 丁目 66-1	荒田敬介	386 772 30.1.23	29.12.4 ~ 29.12.4 ~ 29.12.4 ~	第 1 遺構面では奈良～鎌倉時代のビット、溝などが検出。小泊時代前のものと考えられる骨器や貝玉が出土。第 2 遺構面では、奈良～平安時代のビット・土坑が検出。	共同住宅建設
5 住吉町遺跡 第 53 次・B 調査	東灘区住吉町 3 丁目 95 番	荒田敬介	140 140	29.4.1 ~ 29.5.9	古墳時代後期前頭の大型建物、柱立柱建物、柱穴、土坑、溝が検出。式土器が出土。	大学施設建設
6 住吉町遺跡 第 54 次調査	東灘区住吉町 7 丁目 48-3 49	藤井太郎	80 80	29.8.21 ~ 29.9.22	5 世紀後半の遺構と考えられる骨石が 1 基検出。	共同住宅建設
7 郡家遺跡 第 94 次調査	東灘区御影郡家 1 丁目 31-3, 3, 314-1	阿部 功	80 80	29.6.12 ~ 29.6.28	飛鳥時代～平安時代の土器、溝、ビットを検出。	店舗建設
8 那賀遺跡 第 21 次調査	灘区神明町 4 丁目	藤井太郎	40 40	30.3.20 ~ 30.3.26	弥生時代中期～後期の土器が出土。	山手軒築造工事
9 離原遺跡 第 38 次調査	灘区離原中町 3 丁目 39-1	荒田敬介	55 55	29.6.27 ~ 29.7.11	弥生時代終末期の堅穴建物を検出。	共同住宅建設
10 稲原遺跡 第 29 次調査	灘区稻原北町 2 丁目 17-1, 18-1	荒田敬介	95 190	30.2.19 ~ 30.3.9	弥生時代中期後半の堅穴建物、柱立柱建物を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
11 大石東遺跡 第 5 次調査	灘区大石東町 6 丁目 67-1, 68	石島三和	24 24	29.9.25 ~ 29.10.16	10 世紀から 11 世紀前半期の溝を検出。	エレベーター棟 事務所建設
12 日暮遺跡 第 46-1 次調査	中央区日暮通 2 丁目 37-9, 407	池田 篤	23 50	29.6.12 ~ 29.6.20	平安時代前頭と考えられる土坑と、古墳時代以前と考えられる溝、土坑、ビットを検出。	共同住宅建設 (国庫補助事業)
12 日暮遺跡 第 46-2 次調査	中央区日暮通 2 丁目 37-9, 407	池田 篤	12 24	29.6.12 ~ 29.6.20	平安時代前頭、古墳時代以前の遺構を検出。	確認調査 (国庫補助事業)
13 熊内遺跡 第 7 次調査	中央区熊内桃通 5 丁目 306-2	山田伸生	28 28	29.4.17 ~ 29.4.18	弥生時代後期の遺物包含層と落ち込みを検出。	共同住宅建設
14 旧ドレウェル邸 (ライクン邸)	中央区北野 2 丁目 10-24	藤井太郎	54 54	29.10.16 ~ 29.10.31	板石、無瓦敷き遺構を検出。建築当初の主屋と付属屋が別々であったことが判明。	解体修理
15 上沢遺跡 第 61 次調査	兵庫区松本通 8 丁目 6-17, 6-23	阿部敬生 藤井太郎	16 16	29.4.17 ~ 29.4.19	中世の漆器類、土師器が出土。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
16 上沢遺跡 第 62 次調査	兵庫区松本通 8 丁目 6-18	阿部敬生 藤井太郎	19 19	29.4.18 ~ 29.4.19	中世の漆器、土器を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
17 上沢遺跡 第 63 次調査	兵庫区松本通 8 丁目 6-19	阿部敬生 藤井太郎	7 7	29.4.19 ~ 29.4.20	14 ~ 15 世紀のものと考えられる土師器片。丹波焼片などが出土。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
18 上沢遺跡 第 64 次調査	兵庫区松本通 8 丁目 6-16, 6-22	藤井太郎	16 16	29.4.24 ~ 29.4.28	中世の柱穴と考えられるビット、土坑状の落ち込みが検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
19 兵庫城遺跡 第 72 次調査	兵庫区三川口町 1 丁目 2-30	山田伸生	10 30	29.12.11 ~ 29.12.14	中世末～近世にかけての 3 面の遺構面を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
20 兵庫城遺跡 第 73 次調査	兵庫区城之町 1 丁目 1-5	阿部 功	78 142	30.1.10 ~ 30.1.31	3 面の遺構面を確認。18 世紀後半～19 世紀初期のビット、土坑、雜器が検出。	事務所建設工事
21 国場遺跡 第 5 次調査	北区有野中町 3 丁目 24-10	浅谷誠吾	45 45	30.2.5 ~ 30.2.16	平安時代中期から中世の土器、ビットを検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
22 大田遺跡 第 20 次調査	須磨区大田町 7 丁目 30-1	石島三和	31 31	29.7.31 ~ 29.8.9	奈良時代～平安時代のビット。講、柱立柱建物 1 基を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
23 大田遺跡 第 21 次調査	須磨区大田町 7 丁目 30-1	石島三和	28 28	29.8.10 ~ 29.8.28	奈良時代～平安時代のビット、講、柱立柱建物 1 基を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
24 南側田遺跡 第 7 次調査	西区南側田 3 丁目 9-1-2	石島三和	88 170	29.12.12 ~ 30.2.1	弥生時代末期から古墳時代初頭と弥生時代中期の堅穴建物を検出。	個人住宅建設 (国庫補助事業)
25 出合遺跡 第 52 次調査	西区出合町字長岡ヶ坪 253 番	阿部 功	57 57	29.10.30 ~ 29.11.13	近世の落ち込みを検出。	宅地造成
26 本丸遺跡 第 1 次 A 調査	灘区本丸通 3 丁目 5-4, 5-5	黒瀬文佳	111 111	30.1.27 ~ 30.3.31	平成 30 年度に継続調査	共同住宅建設 (国庫補助事業)
27 奥井遺跡 第 49 次 A 調査	中央区奥井通 5 丁目 325番-1, 325 番-2, 331 番, 332 畷	阿部 功	233 233	30.3.8 ~ 30.3.30	中世のビットを検出した。H30 年度継続事業。	ビジネスホテル建設
調査面積合計			3,641 m ²			
延調査面積合計			4,625 m ²			

表 12 出土遺物整理事業一覧

遺跡名	担当者	実施期間	事業内容	調査原因
1 深江北町遺跡 第 17 次調査	谷 正俊 荒田敬介 中井栄加	29.4.1 ~ 30.3.30	出土遺物整理・記録整理・報告書作成（平成 30 年 3 月刊行）	鉄道立体交差
2 北舟木遺跡 第 8 次調査	藤井太郎 阿部功 中村大介 谷 正俊	29.4.1 ~ 30.3.30	出土遺物整理・記録整理・報告書作成（平成 30 年 3 月刊行）	鉄道立体交差
3 住吉町遺跡 第 52 次調査	石島三和 谷 正俊	29.4.1 ~ 30.3.30	出土遺物整理・記録整理	共同住宅建設 (国庫補助金)
4 兵庫城遺跡 第 69 次調査	内藤俊哉 阿部敬生 谷 正俊	29.4.1 ~ 30.3.30	出土遺物整理・記録整理・報告書作成（平成 30 年 3 月刊行）	街路整備工事
5 上沢遺跡	谷 正俊	29.4.1 ~	平成 7 年度～平成 21 年度出土遺物整理・記録整理	個人住宅建設 (国庫補助金)
6 五色塚古墳	谷 正俊	29.4.1 ~	五色塚古墳上土輪廻復元作業	復元整備事業
7 神山窪跡群	黒瀬文佳 谷 正俊	29.4.1 ~ 30.3.30	昭和 56 年度～昭和 59 年度に実施した神出堂群跡の遺物整理・記録整理・報告書作成（平成 30 年 3 月刊行）	調査整備

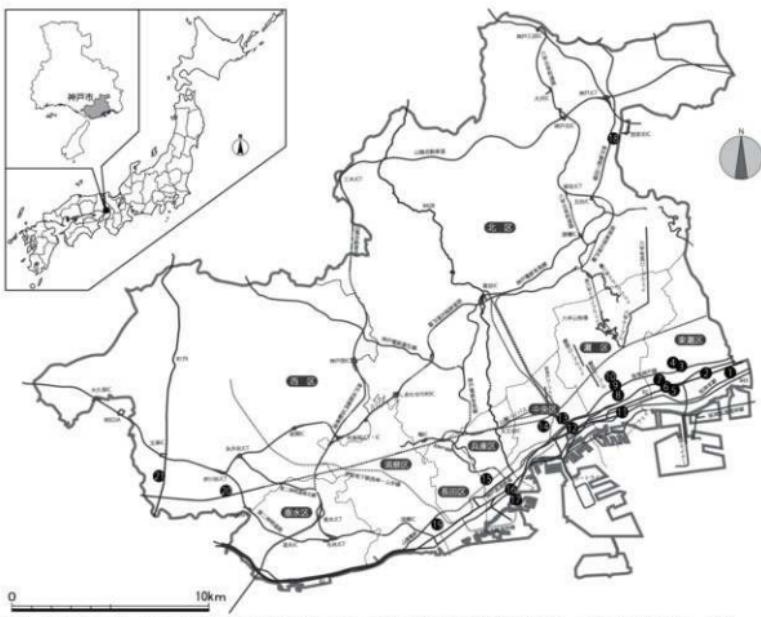


fig.8 平成 29 年度 埋蔵文化財年報掲載遺跡位置図 1:250,000（各遺跡の番号は、本文掲載番号と一致）

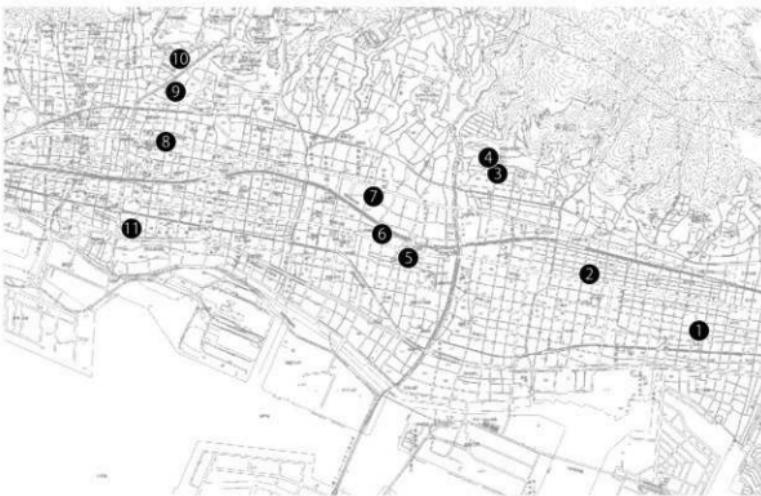


fig.9 調査地点位置図（1） 1:50,000

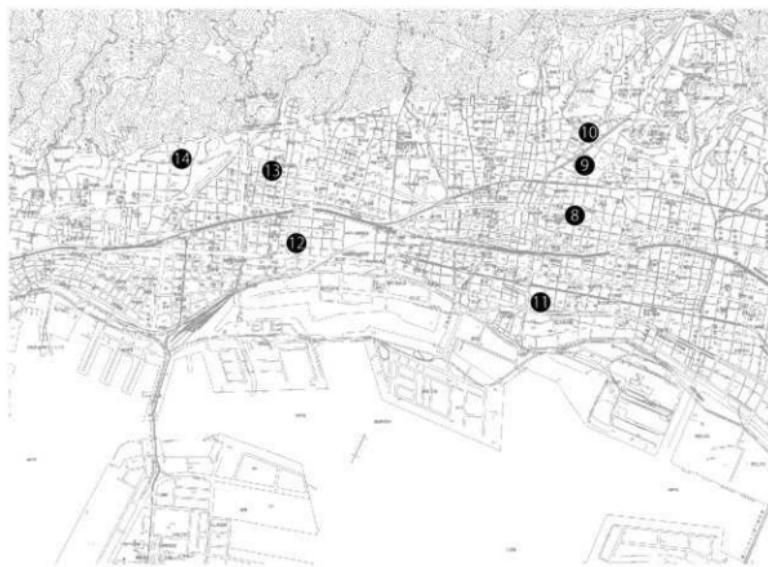


fig.10 調査地点位置図（2）1:50,000

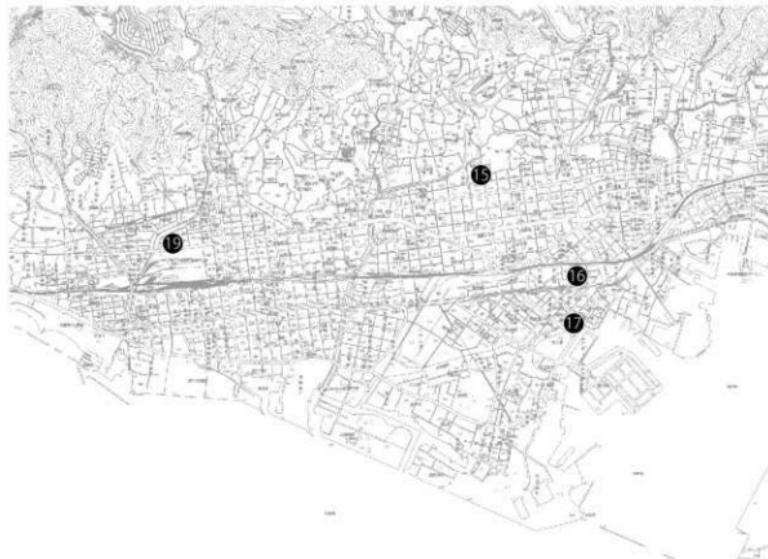


fig.11 調査地点位置図（3）1:50,000

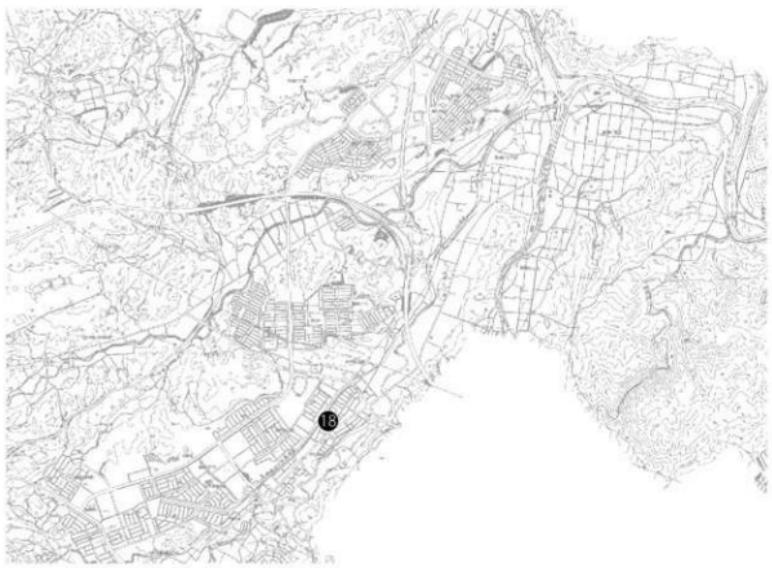


fig.12 調査地点位置図（4）1:50,000



fig.13 調査地点位置図（5）1:50,000

II. 平成29年度の発掘調査

1. 本庄町遺跡 第10次調査

1. はじめに

六甲山系南麓の扇状地末端部に位置する本庄町遺跡は、昭和59年度の第1次調査以降、数次にわたる調査が実施され、縄文時代から中世にかけての集落遺跡として周知されている。

今回の調査は社屋（社員寮）建設に伴うもので、調査範囲内を1~5区として設定し、作業を行なった。なお、平成30年度に『本庄町遺跡 第10次調査 埋蔵文化財発掘調査報告書』を刊行しており、詳細については参照されたい。

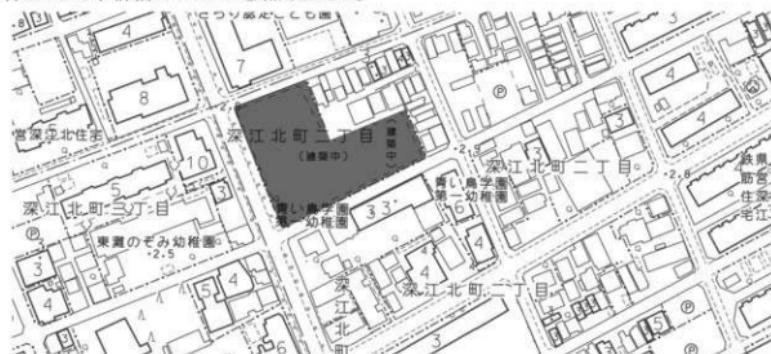


fig.14 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

調査においては、2面の遺構面（中世の遺構面〔第1遺構面〕と平安時代前期の遺構面〔第2遺構面〕、ただし中世面は一部のみ）、平安時代前期～鎌倉時代の遺構、縄文時代～中世の遺物を確認した。

基本層序

既存建物建設以前は当該地の大半が耕作地であったことから、攢乱箇所以外については盛土直下に現代耕土が遺存する。

場所によって差異があるが、近現代耕土以下、洪水砂層、近世耕土層、中世耕土、中世遺物包含層（褐灰色砂質シルトほか）、平安時代前期遺物包含層（暗灰色シルト・黒灰色シルトほか）、遺構面基盤層の層順で、平安時代前期遺物包含層上層上面が第1遺構面、平安時代前期遺物包含層下層上面が第2遺構面となる。

第1遺構面に伴う遺構が存在する範囲は2区の北半部のみで、それ以外の範囲では第2遺構面（平安時代前期遺構面）に伴う遺構のみを確認した。

第1遺構面 平安時代前期遺物包含層上層上面の遺構面で、中世遺物包含層は調査地のほぼ全域で確認できたが、遺構が確認できたのは2区の北半部である。

遺構としては、溝、ピット、落ち込み状遺構等を確認したが、埋土内からの遺物の出土はなく、詳細は不明である。中世遺物包含層等の状況から、中世のものであると考えられる。

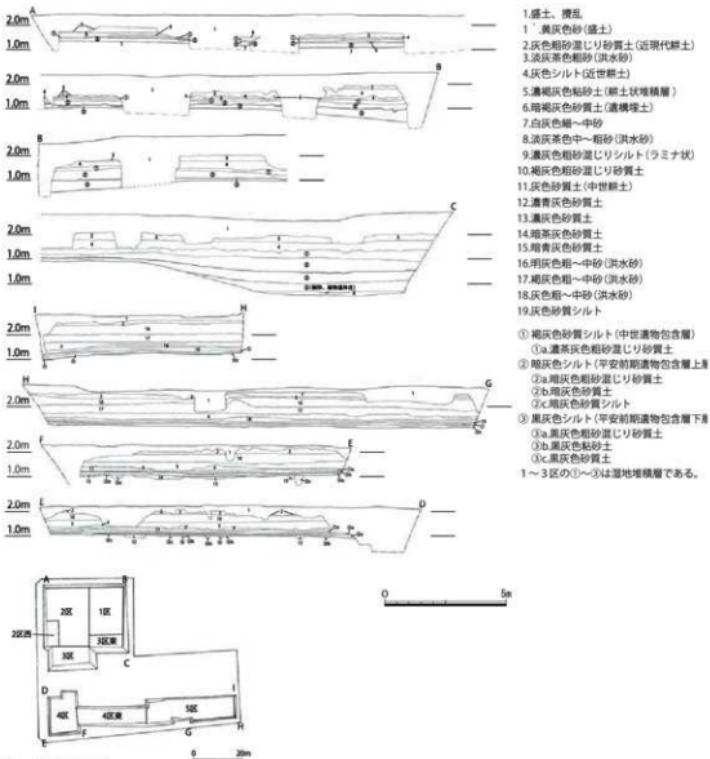


fig.15 土層断面図

第2遺構面 1区、2区、2区西、3区、3区東については、大部分が湿地状地形の中に位置するが、調査地の東側中央部から西側北半部にかけては、浜堤状の微高地にあたり、北西端あたりが最も高くなっている。一方、南半部は深い湿地状の落ち込みとなっており、南東端付近が最も深い。

浜堤状の微高地のやや高い区域（西半部）において、小規模な溝、ピット、落ち込み状遺構等を確認した。遺構埋土内からの遺物の出土はなく、詳細は不明であるが、直上の遺物包含層の状況から、平安時代前期頃のものである可能性が高い。

4区、4区東、5区については、1～3区と比較して、やや標高も高く、安定した層（浜堤面）がひろがり、多くの遺構を確認した。

遺構は、溝、ピット、土坑、落ち込み等で、比較的大規模なもの（SX401、SD402など）も存在するが、遺構埋土からの出土遺物は少なく、時期の詳細は判別しにくいものの、直上の遺物包含層の状況から、概ね平安時代前期頃のものと推察される。

遺構面にあたるベース層は、5区の中央部がやや低く、全体的に南から北へ若干の傾斜がみられ、3区において確認した深い湿地状の落ち込みに連続するものと考えられる。

下層確認トレンチ 1区、2区、4区、4区東については、比較的様相が似ており、浜堤を形成

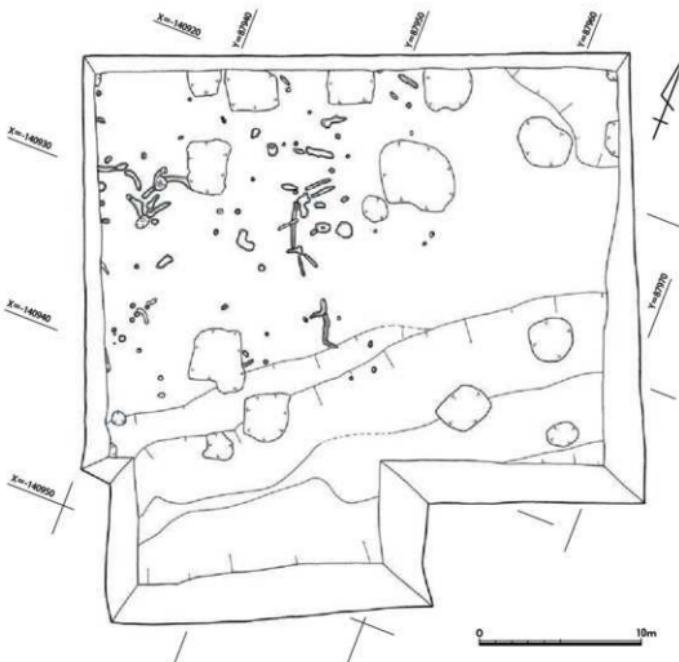


fig.16 1～3区第2遺構面図

する砂層を数層確認したが、遺構面 -30～40cm 程度で湧水が多くなる。

5区については、3区周辺で確認した湿地堆積層の下層にあたる堆積層（湿地状・シルト系・一部有機物含む）を確認した。5区の西側の同堆積層より縄文時代晩期の土器片が出土した。

出土遺物 遺物の大半が、遺物包含層もしくは湿地堆積層からの出土である。中世の遺物は土器類が大半で、土師器、須恵器、瓦器が多く、白磁、青磁など輸入陶磁器もみられる。

平安時代前期の遺物は、土器類、木製品類が多く、土器類は土師器、須恵器、黒色土器が主で、緑釉陶器、灰釉陶器など施釉陶器や、墨書き土器が出土した。また、瓦（平瓦のみ）、土鍤類も數点出土した。その他、古墳時代（主に中期・後期）、弥生時代（主に前期）に属する土器類、石器（石庖丁、石鎌など）なども出土している。また木製品は、農耕土木具（田下駄など）、施設材、祭祀具なども出土した。

3.まとめ

今回の調査地は、既調査における本庄村遺跡の様相と若干異なり、南側に隣接する深江北町遺跡（古代山陽道「葦屋駅家」推定地）の様相に近い平安時代前期（9世紀代中心）の遺構、遺物を確認した。土器類に関しては、日常雑器のみならず、緑釉陶器、灰釉陶器などの施釉陶器や墨書き土器などもみられ、一般的な集落遺跡とは様相が異なり、「葦屋駅家」との関連が考えられる。

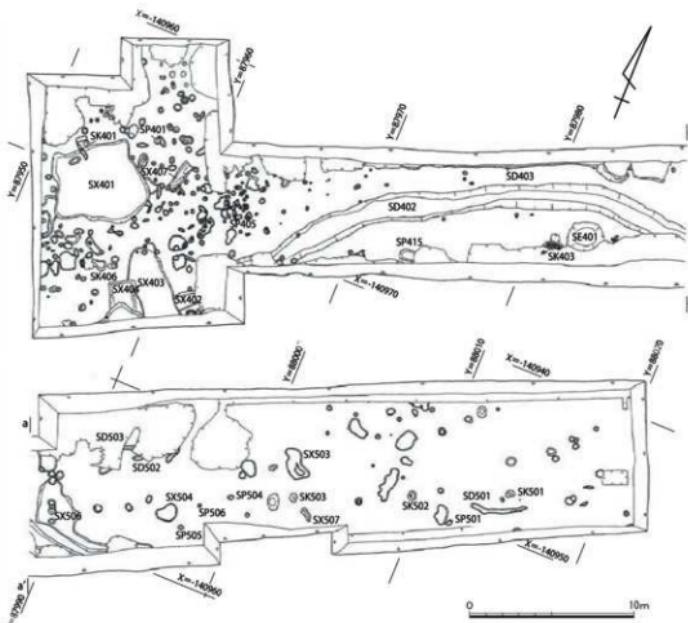


fig.17 4、5区第2遺構面平面図



fig.18 4、5区第2遺構面空中写真（北から）

2. 本山遺跡 第42次調査

1. はじめに

本山遺跡は、六甲山系より大阪湾へと流れる要玄寺川や天井川などにより形成された、扇状地の標高約9～24mの扇尖部～扇端部に立地する、縄文時代～古墳時代・平安時代・中世の遺跡である。昭和58年度の第1次調査以来、これまでに40次以上の発掘調査が実施されている。

現在の国道2号南側には、縄文海進時の海食崖と推定される段差が存在し、現況でも2m前後の比高差となっている。これを境にして旧地形は南北でその様相を異にしている。

国道2号南側では、土坑に埋納された銅鐸（四区製装櫛文銅鐸）が出土した第11次調査や、弥生時代前期初頭頃の木製品が多量に出土した第16・33次調査などで、弥生時代前期～中期の遺物が出土している。しかし、これまでに確認された遺構は、流路などが主であり、多くは低湿地状の様相を呈している。一方、国道2号の北側は扇状地末端に位置し、第18次調査で弥生時代中期～後期の掘立柱建物や土坑などが確認され、第19次調査では前期の貯蔵穴、流路、中期の掘立柱建物、土器棺墓、土坑などが検出された。また、第21次調査では、中期の竪穴建物2棟が検出されており、国道2号沿い北側には、弥生時代の集落域の存在が推定されている。また、JR揖津本山駅南東の第4次調査では、弥生時代後期末頃の土坑が確認され、第33次や第41次調査では、流路から中期後半～古墳時代初頭の遺物が出土するなど、本山遺跡は弥生時代前期初頭～古墳時代初頭まで継続する、大阪湾北岸地域を代表する弥生時代集落遺跡のひとつとして知られている。

2. 調査の概要

今回の調査は、共同住宅建設に伴うものである。調査地は平成8年度に実施した第25次調査地の西側、平成22年度の第38次調査地の南東に隣接する。また、調査地の南東には、平成7年度第18次、平成8年度第21次調査地が近接する。工事計画により建物基礎の掘削が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。



fig.19 調査地位置図 1:2,500

1. 盛土・複疊
 2. 灰色砂質シルト (旧耕土)
 3. 茶褐色細砂 (近世)
 4. 暗褐色粘質土 (近世)
 5. 近世暗葉
 6. 茶褐色泥炭シルト
 7. 茶褐色粘質土 (遺物包含層)
 8. 黒褐色シルト粘質土
(泥炭、弥生時代の遺物を含む)
 9. 暗褐色細砂
(泥炭、弥生時代の遺物を多く含む)
 10. 黑褐色粘質土
(泥炭、弥生時代の遺物を含む)
 11. 暗褐色粘質土 (泥炭)
 12. 青灰褐色シルト質細砂
 13. 青灰褐色砂質シルト
 14. 黑褐色粘質土
 15. 暗黑褐色粘質土
 16. 暗黑褐色粘質土
 17. 黑褐色細砂
 18. 暗黑褐色粘質土
 19. 暗黑褐色粘質土 (SK02 埋土)
 20. 暗黑褐色粘質土 (泥炭、SK01 埋土)
 21. 黑褐色粘質土 (SP02 埋土)
 22. 淡褐色シルト
- ※11～13 : SD02 埋土
※14～17 : SD01 埋土

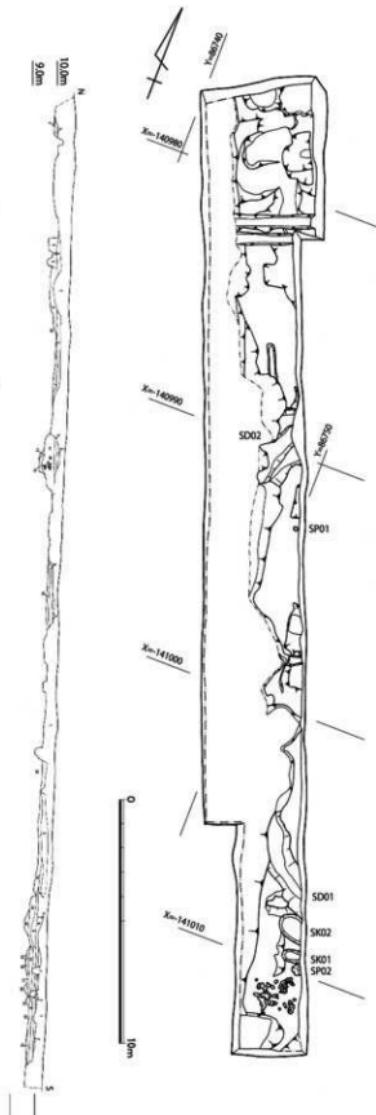


fig.20 調査区平・断面図

基本層序

調査地は、現況で北から南へと下がる緩斜面地である。

基本土層は、盛土層下に旧耕土層が存在し、その下層に遺物包含層である茶褐色粘質土（7層）が部分的に遺存していた。その下層の淡黄褐色シルト（22層）の上面で遺構面を検出した。

調査区北半は盛土・旧耕土層直下が淡黄褐色粘質土であり、南端は黒灰色粘質土などの湿地状堆積が認められた。現地表面から遺構面までの深さは、北側で0.45m前後、南側が0.75mである。

検出遺構

溝2条、土坑状の落ち込み2基、ピット2基を検出した。

調査区南半で検出した北西～南東方向の溝（SD01）は、幅1.5m前後、検出面からの深さは0.35～0.4m前後を測る。また、調査区北半で検出した北東～南西方向の溝（SD02）は、幅2.3m前後、検出面からの深さ0.45～0.5mである。共に西側を攪乱により大きく削平を受けているが、同一の流路である可能性がある。埋土中からは弥生土器片が比較的まとまって出土した。

調査区南半で検出した、土坑状の落ち込み2基（SK01・02）は、SK01が長さ0.75m以上、幅0.5m、検出面からの深さ0.15m前後、SK02が長さ1.25m以上、幅1.0m前後、検出面からの深さ0.15mで共にSD01に切られていると考えられる。調査区外へ続いているため、全体の規模は不明である。SK01とSK02からの出土遺物はなかった。

ピットは、調査区の北半で1基（SP01）、調査区の南半で1基（SP02）の計2基を検出した。SP01は直径0.15m前後、検出面からの深さ0.09mで、SP02は直径0.45m前後、検出面からの深さ0.15mである。共に建物を構成するものであるかは不明で、出土遺物はなかった。

この他、調査区南端の淡黄褐色シルト（22層）上面に、落ち込みやくぼみがいくつか検出された。形状はヒトの足跡の様に見受けられるものもあるが、多くは不明瞭であり、動物の足跡としての特定までに至らなかった。

湿地状堆積

SD01以南の調査区の南側では、上記の遺構の埋没後に上部を覆う様に、黒褐色シルト粘質土（8層）や暗褐灰色細砂（9層）が堆積していた。両者には多くの弥生時代中期の土器片が含まれていたが、特に暗褐灰色細砂からは多くの弥生土器片と共に、石器（石鎌、磨製石庖丁、磨石）やサスカイト剥片が出土した。堆積状況から湿地状の低地へ、遺物を含む土砂が流入したものと考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、ピット、土坑の他、埋土に多量の弥生時代の遺物を含む流路状の溝と湿地状堆積を検出した。多くの遺物が出土したが、整理作業が完了していないため、詳細な時期および調査地の性格の検討はこれを待ちたい。

SD01およびSD02の溝と、SD01以南で確認された、これらの埋没後に湿地状を呈する状況で堆積したと見られる、黒褐色シルト粘質土（8層）や暗褐灰色細砂（9層）から多くの遺物が出土した。出土遺物は弥生時代中期（III・IV様式）の時期が中心と見られる。今回の調査地の南東に接する、第18次、第19次、第21次調査では、弥生時代前期の掘立柱建物、流路、中期（II様式を含む）の掘立柱建物や竪穴建物、土坑、土器棺が確認されており、今回の調査地東側には、弥生時代前期～中期の集落域が想定されている。今回の出土遺物は、距離的にはこの集落域から流入したものと見ることもできる。

今回の調査地から約230m西側に位置する、昨年度調査の第41次調査でも谷状地形へ流入した、湿地状堆積の埋土から弥生時代中期（Ⅲ・Ⅳ様式）～後期（V様式）の遺物が多量に出土している。第41次調査の出土遺物は破片が大きく、ほとんどローリングを受けていないことと、第41次調査地周辺における、第33次・第40次調査地などからも当該期の遺物が多く出土していることを含めて、JR 沼津本山駅東側付近に弥生時代中期～後期頃の集落域が存在する可能性が想定される。今回の調査では出土遺物は細かな破片となっており、やや遠方から流入した印象も受けるものの、出土遺物の時期や、遺物を多く含む黒褐色粘質土や暗褐色灰色細砂などの湿地状堆積の状況には、第41次調査の谷状地形に共通点が認められる。



fig.21 調査区全景（南から）



fig.22 調査区北半全景（南西から）

3. 岡本北遺跡 第12次調査

1. はじめに

岡本北遺跡は、六甲山系より大阪湾へと流出する住吉川により形成された、扇状地の標高約57～40mの扇頂部～扇央部に立地する、弥生時代と中世の遺跡である。平成元年度の第1次調査以来、これまでに10回以上の発掘調査が実施されている。

平成7年度に西岡本5丁目で実施された第2次調査では、弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴建物11棟や鎌倉時代の掘立柱建物3棟などの多くの遺構や弥生時代末～古墳時代初頭頃の多数の遺物が出土している。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うものである。調査地は第2次調査地の北東側に近接する。

基本層序

調査地は、現況では北西から南東へと下がる緩斜面地である。基本層序は盛土層および整地層下に、複数の耕土・床土層が存在し、その下層で弥生時代の遺物を含む遺物包含層である、灰褐色砂質シルト質細砂を検出した。遺物包含層は、1区の北半にのみ遺存しており、0.15m前後の厚さであるが、1区南半および2区では後世の耕作の影響により失われていた。この下層の茶褐色粘質土や黃灰色砂質シルト、茶灰色粘質土などの上面に遺構面を検出した。現地表面から遺物包含層上面までの深さは、1区北側で0.65m前後、同じく遺構面までの深さは1区北側では0.75m前後であり、2区北側で1.1m、南側で0.55m前後である。遺物包含層・遺構面は、現況と同じく北西から南東へと下がる状況であることが確認された。

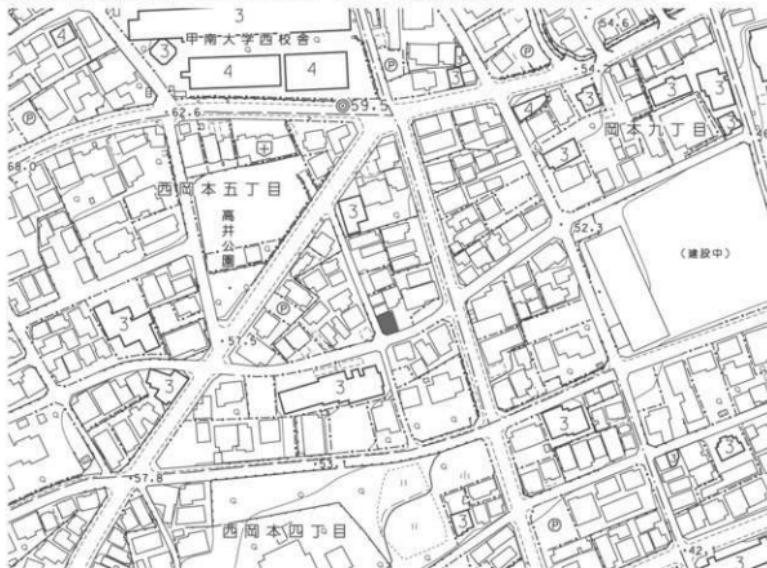


fig.23 調査地位置図 1:2,500

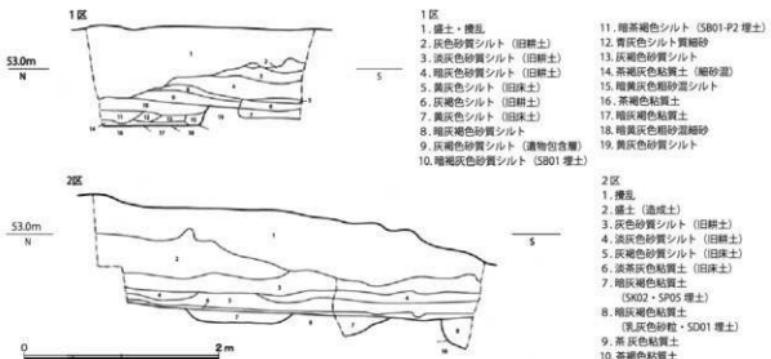


fig.24 土層断面図

1区

調査地の北半部に位置する調査区である。

1区では、方形プランの竪穴建物と考えられる落ち込み2ヶ所、ピット4基を検出した。

SB01 調査区の北東側へ拡がる、方形プランの竪穴建物と考えられる。東西の長さ1.95m、南北の長さ0.4mを検出したが、全体の規模は不明である。深さは検出面から0.2~0.25mで、底には0.1m前後の厚さで暗灰褐色シルト・灰褐色砂質シルトを敷いており、貼床状の性格が考えられる。これを切る様に直径0.45m前後、深さ0.13mのピット(P1)と深さ0.28mのピット(P2)を検出した。P1は検出位置から主柱穴の可能性がある。

SB01からの出土遺物には弥生時代後期後半(VI様式)の弥生土器甕などが含まれており、SB01は概ね弥生時代後期後半~末頃の時期が考えられる。

SB02 調査区の南西側へ拡がる、方形プランの竪穴建物と考えられる。東西の長さ0.9m、南北の長さ1.25mを検出したが、全体の規模は不明である。深さは検出面から0.1~0.15mで、底には幅0.15m前後、深さ0.05m前後の溝が巡り、周壁溝の可能性がある。出土遺物は確認されなかった。

ピット 調査区南西側で、SB02の上面から切り込むピット4基を検出した。

ピットは直径0.3~0.5m、検出面からの深さは0.13~0.35mである。出土遺物はなかった。建物を構成するものであるかは不明である。

2区

調査地南側に位置する調査区である。溝1条、土坑6基、ピット1基、落ち込み2ヶ所を検出した。

溝 調査区東半で北西~南東方向の溝(SD01)を検出した。幅0.65m前後、検出面からの深さは北側で0.2m前後、南側で同じく0.45m前後である。弥生土器と考えられる土器片1点が出土したが、埋土の堆積状況から溝状の窪みに土砂が流入した、自然地形の可能性がある。

土坑 検出した土坑は、直径0.45~1m前後、検出面からの深さ0.1~0.3m前後の規模である。遺物が出土したのはいずれも調査区西半で検出したもの(SK01・05・06)で、SK01は掘形内での焼成の可能性がある。

SK01 長径0.52m、短径0.45mの楕円形の土坑である。深さは検出面から0.45mで、土坑

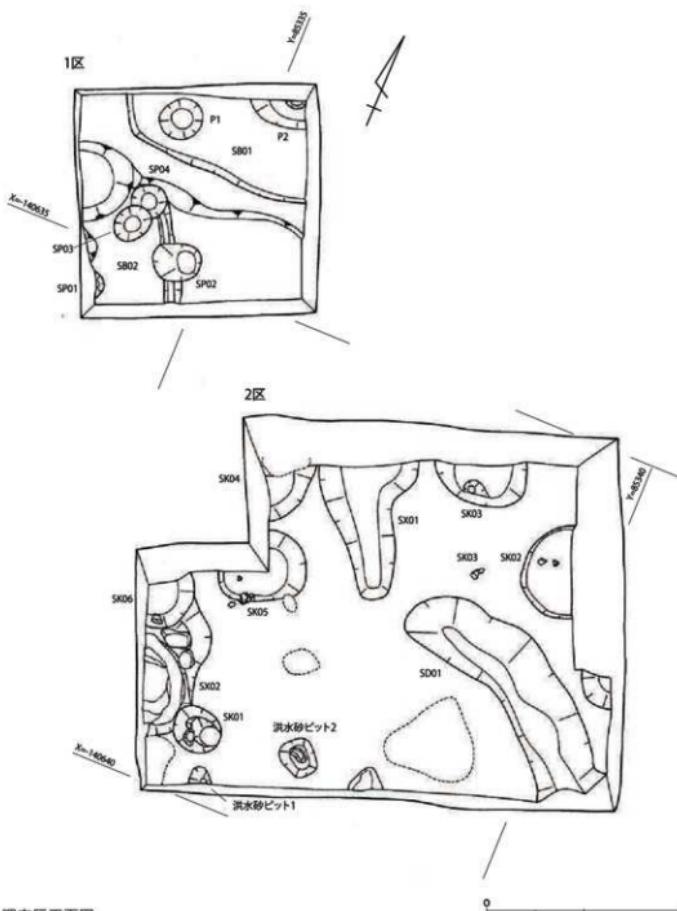


fig.25 調査区平面図

内の長径 0.4 m、短径 0.3 mの範囲が火を受けて赤変し硬化していた。炭も検出されたが量は多くはない。何らかの焼成を行ったものと推定されるが、わずかに弥生土器と考えられる土器片が出土したが、埋土の状況から後の流入によるもの可能性がある。性格については不明である。

SK05 長径 0.9 m、短径 0.75 m、検出面からの深さ 0.1 m前後の楕円形の土坑である。弥生土器と考えられる土器片が出土した。

SK06 直径 0.7 m前後、検出面からの深さ 0.2 mの土坑と考えられる。弥生土器と考えられる土器片が出土した。

ピット 調査区南東部で直径 0.5 m、検出面からの深さ 0.2 mのピット 1基を検出したが、出

土遺物はなかった。なお、人為的なものではないが、調査区南西部で洪水砂が堆積したと考えられるピット状の落ち込み2基（洪水砂ピット1・2）を検出した。この内1基（洪水砂ピット2）からはローリングを受けて磨滅した、弥生土器片と考えられる土器片数点が出土した。

落ち込み 調査区中央北側で検出した落ち込み（SX01）は幅0.3～1m、検出面からの深さ0.15m前後の舌状の落ち込みで出土遺物はなかった。

調査区南西部の西壁沿いでは、直径0.9m前後の花崗岩の周囲に検出面からの深さ0.3mの落ち込みが検出され、埋土からは弥生土器と考えられる土器片が出土した。埋土の堆積状況から自然堆積である可能性がある。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代後期後半頃の遺物を含む遺物包含層と遺構面を検出した。

1区では、弥生時代後期後半頃の竪穴建物と考えられる遺構も確認され、2区でも西半の遺構から比較的多くの遺物が出土したことから、調査地は第2次調査で確認された弥生時代後期後半～古墳時代初頭の集落の範囲の縁辺部であると考えられる。



fig.26 1区全景（東から）



fig.27 2区全景（北東から）

4. 西岡本遺跡 第12次調査

1. はじめに

当遺跡は、住吉川によって形成された扇状地と他の河川から流入した土砂や旧河道が複雑に入り組んだ地形上に位置する旧石器時代から安土・桃山時代までの複合遺跡である。標高約56～103mにわたる傾斜地に所在し、今回の調査地点は、標高約60mの地点にあたる。遺跡の範囲は、西岡本5・6丁目のほぼ全域で、東西約400m、南北約200mである。

今回の調査は、西岡本5丁目内で計画された共同住宅建設に伴う発掘調査である。

既存の調査

当遺跡では、旧石器時代のナイフ形石器が出土しており、集落も縄文時代早期後半に形成されていることから、神戸市内でも早い段階に人間が活動していたエリアとして位置づけられる。その後は、弥生時代中期まで人間の活動がみられなくなるが、後期後半に入ると再び集落が形成され、古墳時代前期前半まで継続する。古墳時代中期には、「陶邑系」把手付塊や愛媛県を中心に生産されたといわれる「非陶邑系須恵器」などが出土するとともに、前方後円墳の可能性がある古墳や円筒埴輪も出土している。後期になると、岡本梅林古墳群から野寄古墳群まで、この地域一帯に群集墳が築造されるようになり、住吉宮町古墳群から続く首長系譜が住吉川上流域に移動した可能性がある。奈良時代後半には、掘立柱建物や庇付建物、平安時代後期の苑池状遺構や掘立柱建物などがこの地域に建立されていき、以後、連縫と集落が継続していく。

今回の調査地点に近接する第7・9次調査では、弥生時代後期後半～古墳時代前期前半の土坑と奈良時代～平安時代のビット、土坑が検出されている。また、当調査地の南側に所在する岡本北遺跡第2次調査では、弥生時代終末期～古墳時代初頭の竪穴建物11棟、鎌倉時代の掘立柱建物3棟などが検出されており、調査地を含む一帯に遺構面の拡がりが把握されてきた。



fig.28 調査地位置図 1:2,500

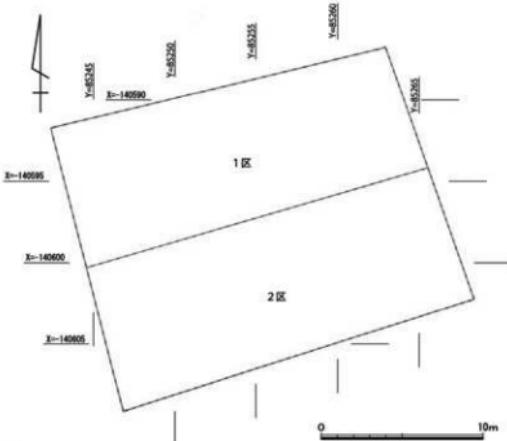


fig.29 調査区配置図

2. 調査の概要

発掘調査は、調査範囲を2分割して実施した。

基本層序

調査地は、テニスコートとして利用されていたため、標高約60m前後とほぼ平坦な現況となっていた。層序は、現地表面から約0.3~1.1mまでが造成土・盛土などを含む土層であり、その下位に江戸時代~昭和時代までの洪水・土石流を含む土層がある。第1遺構面は、標高58.2~59.0mで検出した薄茶褐色粘質土(第8層)上面であり、奈良~鎌倉時代の遺構面である。第2遺構面は、標高57.3~58.0mの茶褐色粘質土(第10層)上面で検出したが、本来の遺構面は、黒色粘質土・薄灰色粗砂土(第9a~d層)にあたると考えられる。奈良~平安時代に比定できる。茶褐色粘質土は、弥生時代後期~奈良時代に比定することができる。

第1遺構面

1区の大部分に近現代の庭石が敷設されており、その庭石を除いた下位からも遺構は検出されなかった。当遺構面からは、ピット16基、溝3条、性格不明遺構1基を検出した。

ピット 直径0.4~1.0m前後の円形もしくは橢円形を呈する。SD 102の東側から調査区南壁のエリアに集中しており、溝際に柵列もしくは掘立柱建物が存在した可能性がある。遺物は、SP101~103・107~109・111・115・116から土師器、黒色土器、瓦、須恵器などが出土している。このうち、SP101から黒色土器、SP107から奈良時代の須恵器片が出土していることから、これらのピットは、奈良時代~鎌倉時代のものとみられる。

溝 SD 101・102が幅0.5m、長さ7.0m以上である。SD 101の調査区南壁際からは、土師器、須恵器とともに完形の翡翠製勾玉が1点出土している。勾玉の法量は、全長16mm、最大幅8mm、最大厚6.6mm、重量1.7g、比重3.09g、孔的最大径1mmである。孔は、片面から穿孔されている。形態的特徴から古墳時代前期のものと考えられるが、溝の時期と符合しないため、他所から流入したものと考えられる。SD 103は、幅0.2m、長さ3.2mである。いずれも奈良~鎌倉時代のものと考えられる。

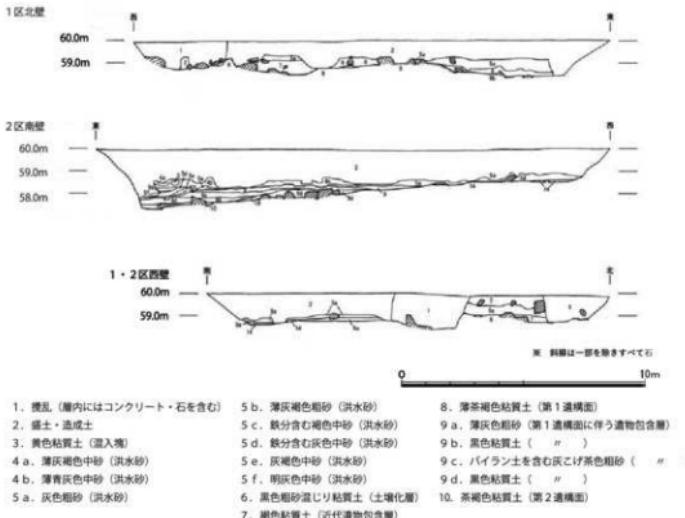


fig.30 土層断面図

性格不明遺構 (SX101) 2区の南東隅で検出した深さ約0.2mほどの遺構である。遺構の大部分が調査区外に続き、東隣の撥乱によって削平を受けているため全容は不明である。土師器、須恵器、黒色土器が出土している。平安時代後期～鎌倉時代のものとみられる。

第2遺構面

当遺構面で、掘立柱建物1棟、ピット6基、土坑2基、性格不明遺構10基を検出した。茶褐色粘質土上で検出した遺構面だが、本来は、上層の黒色粘質土・薄灰色粗砂上から掘り込まれた遺構とみられる。

掘立柱建物 桁行4間、梁行2間の建物になる可能性がある。南側は、削平を受けているとみられるため、柱穴を検出することはできなかったが、SP201からSP204までが1間あたり約2.4m間隔(7尺)で並び、SP201とSP205が約4.0mの間隔であることから、2間分(6尺)の梁行があったと考えられる。遺物は、SP201・202から土師器と須恵器が出土している。奈良～平安時代のものとみられる。

ピット 直径0.2～0.5m前後の円形もしくは梢円形を呈する。

土坑 直径1.1～1.3m前後の円形もしくは梢円形を呈する。SK202から土師器が出土している。遺構の切り合い関係から掘立柱建物に先行する時期のものと考えられる。

溝 SD 201は、幅0.2m、長さ1.1mである。SD 202は、幅0.2mで調査区東壁側へ伸びる東西溝とみられる。いずれも奈良～平安時代のものと考えられる。

性格不明落ち込み 打越山方向からの土石流による転石が茶褐色粘質土内へ埋没した際に、その隙間部分や窪地に第1遺構面遺物包含層である黒色粘質土が流入したものと考えられる。SX201・208からは、弥生土器とともに須恵器も出土している。このような状況から、その埋没時期は、弥生時代後期～奈良時代までの期間にわたると考えられる。

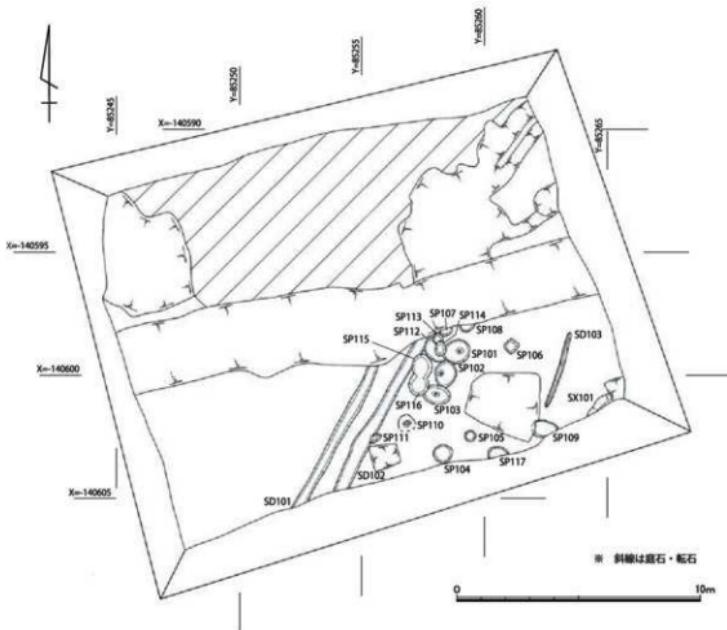


fig.31 第1遺構面平面図

3.まとめ

第1遺構面は、奈良～鎌倉時代の遺構を検出したが、中心となる時期は、平安時代後期～鎌倉時代にあたると考えられる。また、茶褐色粘質土上面で検出した第2遺構面は本来、第9層上に形成されたものとみられ、その時期は、奈良～平安時代に比定できる。第1・第2遺構面で検出した掘立柱建物を含む遺構は、住吉川東岸際から東へ向かって続く集落域に含まれるものと考えられ、第4・8次調査地点で検出した平安時代後期の苑池状遺構や掘立柱建物や柵列などとの関連が想定できる。つまり、今回の調査地点まで奈良～鎌倉時代の集落が展開していく様相をうかがうことができた。

茶褐色粘質土は、打越山方向からの土石流に伴う転石を覆う形で堆積した土層であり、この転石の隙間に第1遺構面の包含層が埋土として入り込む。このような状況から、茶褐色粘質土上で検出した性格不明落ち込みは、人為的な掘削によるものが少ないと考えられる。第1遺構面に伴う遺物包含層は、弥生時代後期から奈良時代のものであり、この土層を除去すると、西から東へ向けて緩やかに傾斜する地形となっていた。西岡本遺跡・岡本北遺跡では、弥生時代後期～古墳時代前期前半の集落が検出されているが、いずれも住吉川から東へ続く自然堤防上か河岸段丘上といった安定した場所に居住地を形成している。今回の調査地点は、東側の谷筋へ向かう傾斜地にあたり、弥生時代後期から古墳時代前期の集落は、この地点まで居住域を展開せず、住吉川東岸から三日月状に拡がる緩傾斜地を選地して集落を形成していたものと考えられる。

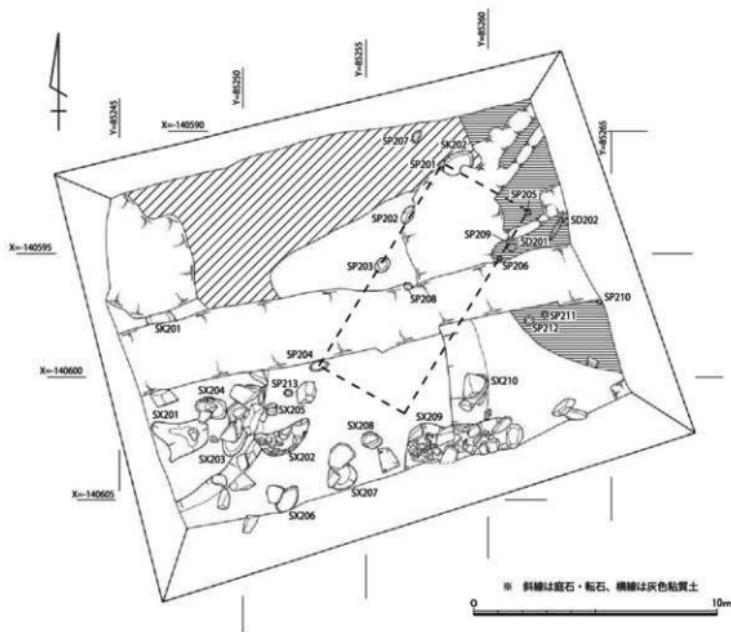


fig.32 第2遺構面平面図

なお、第1遺構面に伴う遺物包含層下位から銅鏡の茎とみられる銅製品、茶褐色粘質土直上から有茎式打製石鎌と磨製石剣の破片がそれぞれ1点ずつ出土している。3点とも2区東壁際からの出土である。銅製品は、現存長11.5mm、最大幅5mm、厚さ1.5mmで、断面が扁平形であることから、銅鏡の茎の一部と考えられる。第1遺構面に伴う遺物包含層の時期は、弥生時代後期～奈良時代と幅が広いものの、この銅鏡は、遺物包含層下位から出土しているため、弥生時代後期に近い時期のものと考えられる。打製石鎌は、鋒と茎尻が欠けている。現存長44.5mm、闊幅27mm、茎長11mm、最大厚6mmの大型品である。弥生時代における打製石鎌の大形化は、地域によって異なるため、一概には言えないが、河内平野では、前期中葉～後葉と中期後半の2時期に大型化現象が認められ、とくに中期後半の大型化は、外的影響を受けない自発的なものであることが指摘されている。茶褐色粘質土は、弥生時代中期～後期を中心とする時期に比定できるため、この石鎌は、2回目の大型化を果たす時期のものと考えられる。磨製石剣は、鉄剣型のもので、鋒側の破片にあたる。断面は扁平形で、鎬ではなく、刃部のみを研ぎ出している。現存長28mm、最大幅49mm、最大厚11.5mmで、二上山産サスカイト製である。打製石鎌と同時期のものとみられる。



fig.33 1区第2遺構面全景（南東から）



fig.34 1区北壁断面（南東から）



fig.35 2区第2遺構面全景（南西から）

5. 住吉宮町遺跡 第53次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡は、住吉川西岸の扇状地に立地する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。標高 14.5 ~ 33.0 m の地点にあり、住吉川と石屋川によって形成された複合扇状地の緩傾斜地に立地する。

当遺跡では、弥生時代中期前半に集落の形成がはじまり、後期後半～古墳時代初頭に居住域が拡大する。古墳時代前期の集落は、現在まで確認されていないが、中期に入ると、再び集落が形成されるとともに、このエリアの盟主墳と考えられる坊ヶ塚古墳（前方後円墳）と住吉東古墳（帆立貝形古墳）、そして小規模低墳丘の方墳を主体とする墓域が形成されるようになる。飛鳥・奈良時代は、JR 東海道本線以南に居住域が集中し、墨書き土器や円面鏡、瓦、土馬などがこれまでに出土しているため、隣接する郡家遺跡と一連の官衙関連の建物がこの地域にも展開していたとみられる。平安時代以降も集落は継続しているものの、時代によって遺構の分布濃度は異なる。近世に入ると、御影石を切り出した採石遺構が見つかっている。

今回の調査は、大学施設建設に伴う発掘調査である。調査地点に近接する第36・39・43次調査では、弥生時代終末期～古墳時代前期前半の溝（第43次）と古墳時代中期～後期の竪穴建物、掘立柱建物など（第36・39・43次）が検出されており、古墳時代後半期の集落が当遺跡の南側に拡がる傾向が明らかとなっている。

2. 調査の概要

発掘調査は、建物建設範囲を A ~ G 区に分け、調査を実施した。



fig.36 調査位置図 1:2,500

基本層序

調査以前の当地は、駐車場であったため、標高 17.3 ~ 17.4 m とほぼ平坦な地形となっていた。第 36・39・43 次調査地を含めた調査地周辺の現地表面の標高は、東側が標高 17.5 m、西側が標高 16.8 m、北側が標高 18.4 m、南側が標高 16.5 m であり、南北方向に傾斜し、また住吉川に向かって高くなる。

層序は、現地表面から標高 16.7 ~ 16.9 m までが造成土・盛土などを含む土層で、標高 16.5 ~ 16.6 m までが青灰色中砂の土層、標高 16.2 ~ 16.5 m まで中世～近世の耕作土（灰色中砂）である。遺構面は、灰色中砂の下位に堆積する褐色粗砂上面で検出した。検出標高は、A 区北西隅で標高 16.5 ~ 16.6 m、B 区南西隅で標高 16.3 m、G 区北東隅で 16.5 ~ 16.6 m、G 区南東隅で 16.2 ~ 16.3 m である。遺構面に伴う遺物包含層は、暗青灰色粗砂混じり粘質土と灰褐色粗砂が互層堆積し、層厚は、いずれも 0.1 ~ 0.2 m ほどである。

検出遺構

竪穴建物 13 棟、掘立柱建物 1 棟、柱穴 63 基、土坑 3 基、溝 2 条、性格不明遺構 1 基を検出した。遺構面は、いずれも削平を受けていたため、当遺構面が形成された時期の高さは不明である。各遺構の時期は、一部 5 世紀中ごろの TK208 型式と 6 世紀前半の MT15 型式を含むが、中心となる時期は、TK23 型式～TK47 型式の 5 世紀後半である。

竪穴建物 全容の判明していない SB111 を除けば、

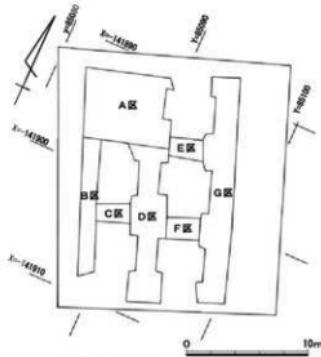
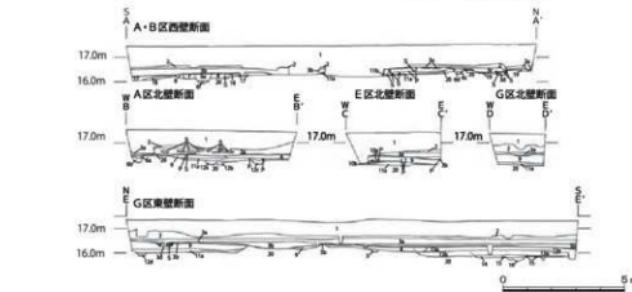


fig.37 調査区配置図



1. 土壌・造成土等
2. 青灰色中砂 (水田層・耕作土)
3. マンガノ含む灰色中砂 (耕作土)
- 3 b. マンガノ含むオーリーブ灰色中砂 (耕作土)
- 3 c. マンガノ含む灰褐色中砂 (近世東西溝埋土)
- 3 d. マンガノ含む灰色粘土 (近世石灰処理土)
4. 褐色中砂 (SB109・113 墓土 / 3 ~ 5mm 大の粒を含む)
5. 暗青灰色中砂 (SP155 墓土)
- 6 a. 墓底土 (SP112 墓土)
- 6 b. 墓底土 (プロック埋め込み青灰色中砂 (SP112 墓土))
- 6 c. 墓底土 (SP114 墓土)
- 6 d. 墓底土 (SP114 墓土)
- 6 e. 黒灰褐色中砂 (SP137 墓土)
- 6 f. マンガノ含む灰褐色 (SP137 墓土)
7. 細粒褐色中砂 (SK101 墓土)
8. マンガノ含む灰褐色プロック埋め込み灰褐色中砂 (SK101 墓土 / 第 9 層と類似)
9. マンガノ含む黒色中砂 (SB102・103・108・SK102 墓土)
- 10 a. 黄色粘土 (SB102 カマド崩落埋土)
- 10 b. 赤褐色粘土 (SB102 カマド崩落埋土)
- 11 a. 底色粘質プロック含む青灰色中砂 (SB102・108・埋土)
- 11 b. 底色粘質プロック含む青灰色中砂 (SB102 墓土)
- 12 a. 暗青灰色中砂 (SP132 墓土)
- 12 b. 暗青灰色中砂 (SP133 墓土)
- 12 c. 暗青灰色中砂 (SP134 墓土)
- 12 d. 暗青灰色中砂 (SP156 墓土)
- 13 a. 暗青灰色中砂 (SP110 墓土)
- 13 b. 暗青灰色中砂 (SB111 墓土 / 第 9 層と類似)
14. 灰青色中砂 (SB111 墓土 / 第 9 層と類似)
15. 黑色粘土 (SB111 床底壁出現)
16. 黑灰褐色中砂 (SK103 墓土)
17. 暗灰褐色中砂 (遺物包含層)
18. マンガノ含む灰褐色中砂 (遺物包含層)
19. マンガノ含む灰褐色粗砂 (遺物包含層)
20. 褐色粗砂 (地山 / 調査範囲限界面)

*S: 石
*P: 土器

fig.38 土層断面図

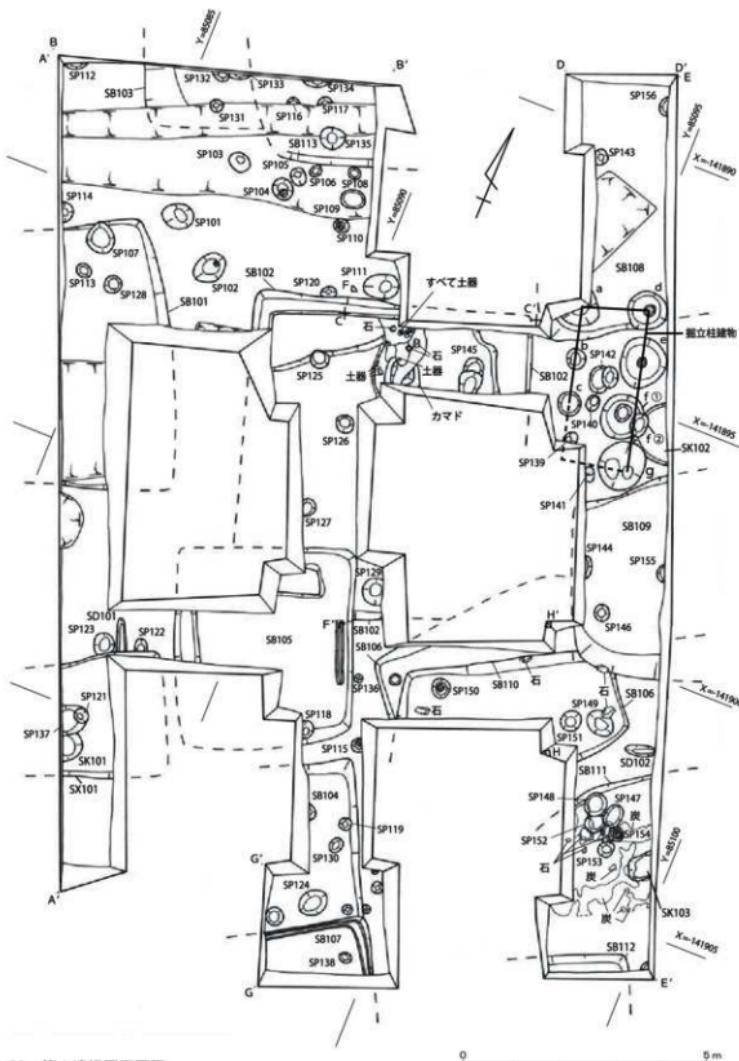


fig.39 第1遺構面平面図

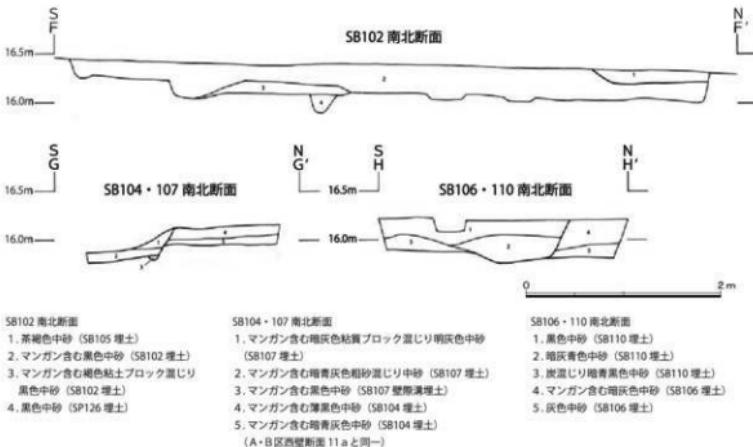


fig.40 堪穴建物断面図

いずれも隅円方形である。建物規模の平均値は、東西 4.7 m、南北 4.9 m、深さ 0.2 ~ 0.4 m ほどで、建物内には柱穴があり、周壁溝を有する建物の存在から、建物構造は伏屋式であったとみられる。埋土は、1 ~ 3 層程度の堆積であり、その埋土中には、土師器・須恵器などとともに炭が混入していた。特に SB112 には、床一面に炭が拡がっていた。堪穴建物の時期は、TK23 型式～ TK47 型式の 5 世紀後半に比定できる。

堪穴建物の切り合い関係をみると、SB102 ~ 104・106・108 の状況から、少なくとも 3 回の建て直しが行なわれており、古墳時代中期後半の間に度重なる建て替えが行われていたことがうかがえる。検出した建物間の距離も近く、埋土中に炭を多く含むことに加えて、過去に近隣で調査された地点からも同時期の堪穴建物が検出されていることを踏まえると、古墳時代中期後半～後期前半の建物が集中していた地域と考えられる。

遺物は、土師器の甕・高环・壺・鉢・ミニチュア土器・移動式竈・甑・蛸壺・製塙土器・土鍾・須恵器の环・环蓋・高环・甕・韓式系土器が出土している。

出土遺物の時期的な様相は、遺構の切り合い関係とおおよそ符号する。土師器は、球胴甕が主体とみられ、須恵器には、高环などの供膳具がそろっており、韓式系土器も含む。須恵器は TK23 型式・TK47 型式に比定でき、5 世紀後半の建物群といえる。遺構の切り合い関係と出土遺物の様相から建物の時期を細分すると、TK23 型式に相当する建物は SB102・104・106・108・110 で、TK47 型式に相当する建物は、SB105・107・109・111・112 であり、SB101・103・113 は、細分する材料が少ない。

掘立柱建物 2 間 × 3 間の建物である。柱穴は素掘りで、礎板・礎石は敷かれてない。芯芯間距離は、桁行間で 1.4 ~ 1.5 m、梁行間で約 1.0 ~ 1.1 m である。一部柱の抜き取り痕跡も認められた。柱穴内からは、土師器の甕・製塙土器・須恵器の环・高环・环蓋・甕が出土している。なお、SB108 を一部の柱穴が切ることから、柱穴の埋土中から出土した遺物は、SB108 の遺物が流入している可能性がある。この点を考慮しつつ、遺構の切り合い関係からみていくと、この掘立柱建物の時期は、TK47 型式～ MT15 型式の 5 世紀後半から 6 世紀前半に比定できる。

柱穴 直径 0.2 ~ 0.7 m、深さ 0.1 ~ 0.4 m であり、柱材が一部残っているものもあったが、多くが抜き取られていた。竪穴建物内の柱穴となるものが多数を占め、掘立柱建物と認識できた事例は、前出の 1 棟のみであった。遺物は、土師器の甕・高环・須恵器の环・高环・环蓋・甕が出土している。

土坑 直径 0.6 ~ 1.2 m、深さ 0.1 ~ 0.2 m である。SK101・SK102 は、円形を呈するが、SK103 は、SB111 床面の炭を掘削した後に検出したもので、不整形な平面形を呈している。遺物は、土師器の甕・製塩土器・須恵器の环蓋・甕が出土しているが、いずれも破片である。

溝 SD101 が幅 0.2 m、長さ 0.7 m 以上、SD102 が幅 0.2 m、長さ 0.6 m である。SD101 から土師器の甕の口縁部片が出土している。

性格不明遺構（SX101） 東西 2.0 m、南北 2.6 m 以上、深さ 0.2 m の方形を呈する。遺物は、土師器の甕・高环・須恵器の环・环蓋・高环・甕が出土しているが、いずれも破片である。

出土遺物

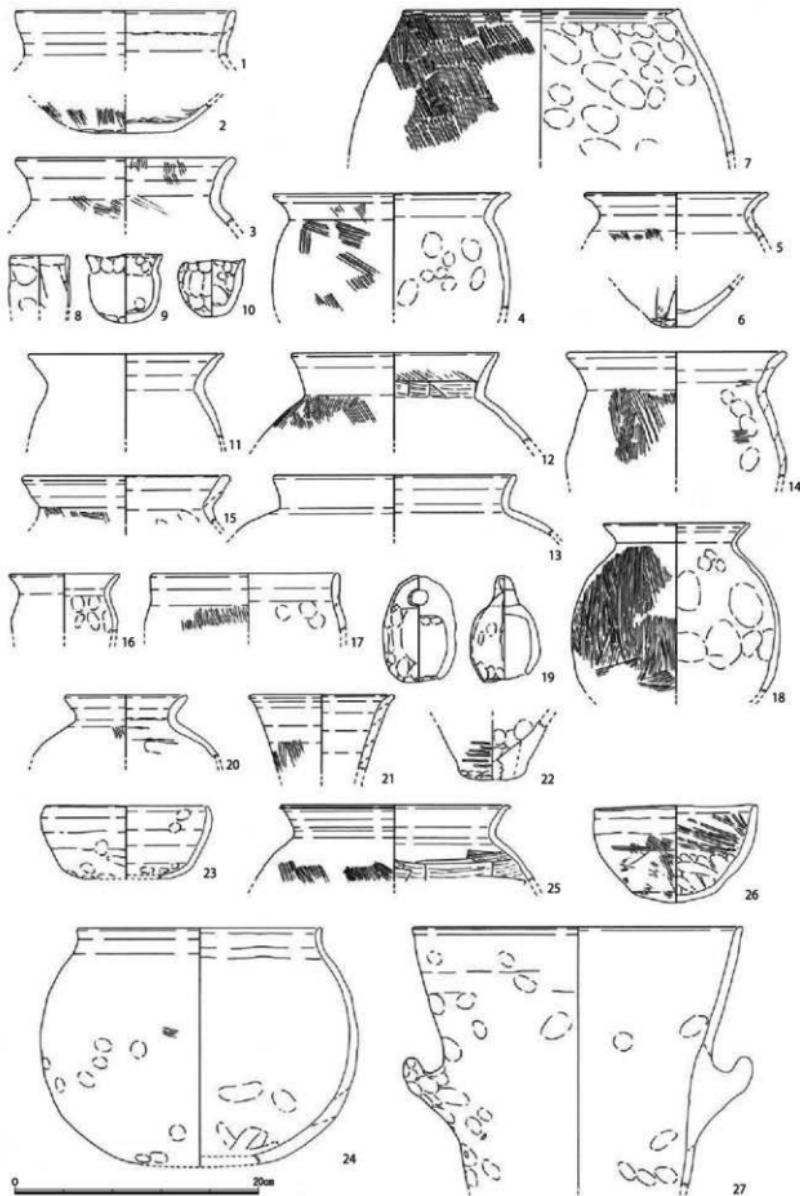
今回の調査で出土した遺物の種類は、土師器・須恵器・陶磁器・瓦・製塩土器・漁労具・石製品・竈・甕がある。古墳時代の遺物については前述したので、以下、弥生土器・石製品について述べる。

弥生土器 (fig.42 - 48・49) は、第V様式前半の甕と高环の脚部が出土している。図化できた 2 点以外にも破片は出土しているが、いずれも遺物包含層中からの出土である。甕 (fig.42 - 48) は、外面にハケ調整、内面胴部にヘラケズリと底部にナデ調整が施され、頸部から外面頸部にかけてナデ調整をしたのち、口縁部に凹線が施されている。黒田恭正氏の編年 (2005 『森南町遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会) でいう第V-2 様式に該当する。高环 (fig.42 - 49) は、脚部が裾広がりになる形状で、脚柱部と裾部の境界が明瞭でない。环部が欠落しているものの、环部と脚部が別作りのものであり、挿入・接合技法で成形されたとみられる。外面は磨耗が著しく調整の確認はできないが、内面はナデ調整で、环部との接続部には、ミガキ状の細かな調整が認められる。黒田編年の第V-2 様式に位置づけられる。

石製品は、いずれも古墳時代の遺構面を覆う造成土・盛土内から出土している。縄文時代の石刀 (fig.42 - 51) である可能性があるものと石斧 (fig.42 - 52) の可能性があるものが出土している。石刀の可能性があるものは、両端が欠損しているため全容は不明だが、断面が倒卵形を呈し、表面を磨いているように観察できる。形態的には、縄文時代後晩期にみられる石刀で、より写実性が高くなる段階のものと位置づけられる。当遺跡でも縄文時代晩期中葉～後葉の土器が出土していることから、これが石刀であるとすれば、その時期に属するものとみられる。砂岩製とみられる。石斧の可能性があるものは、全長 12.7cm、最大幅 7.2cm、刃部側の厚さ 2.2cm である。刃部が磨耗しているのか、あるいは未製品の可能性がある。頁岩製とみられる。

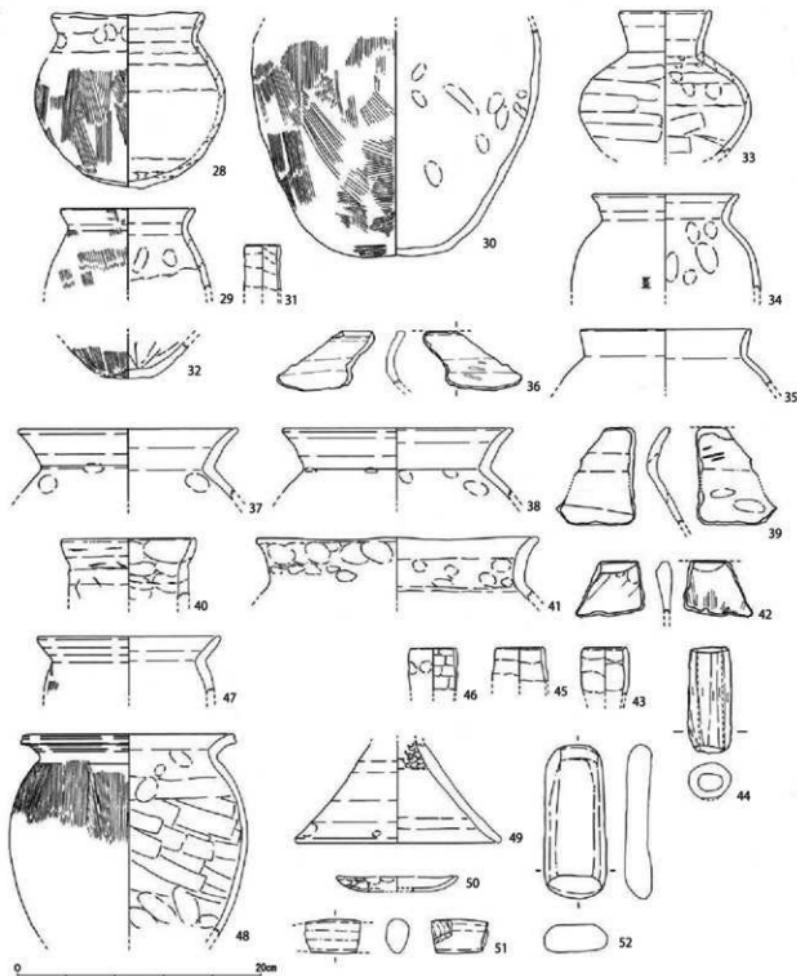
3.まとめ

古墳時代の遺構面では、竪穴建物 13 棟、掘立柱建物 1 棟、柱穴 63 基、土坑 3 基、溝 2 条、性格不明遺構 1 基を検出した。遺構の切り合い関係から竪穴建物が掘立柱建物に先行することが判明している。竪穴建物は、TK23 型式～TK47 型式の 5 世紀後半に比定でき、掘立柱建物は、SB108 を切ることから 5 世紀後半から 6 世紀前半に比定することができる。他の遺構もこれらの建物と同時期にあたるとみられる。竪穴建物は、一辺の平均が約 4.7 ~ 4.9 m の隅円方形を呈する構造で、住吉宮町遺跡で過去に調査された同時期の竪穴建物とほぼ類似した構造・サイズの建物といえる。今回検出した建物のうち、SB102 は、東西 5.7 m、南北 6.6 m と最も規



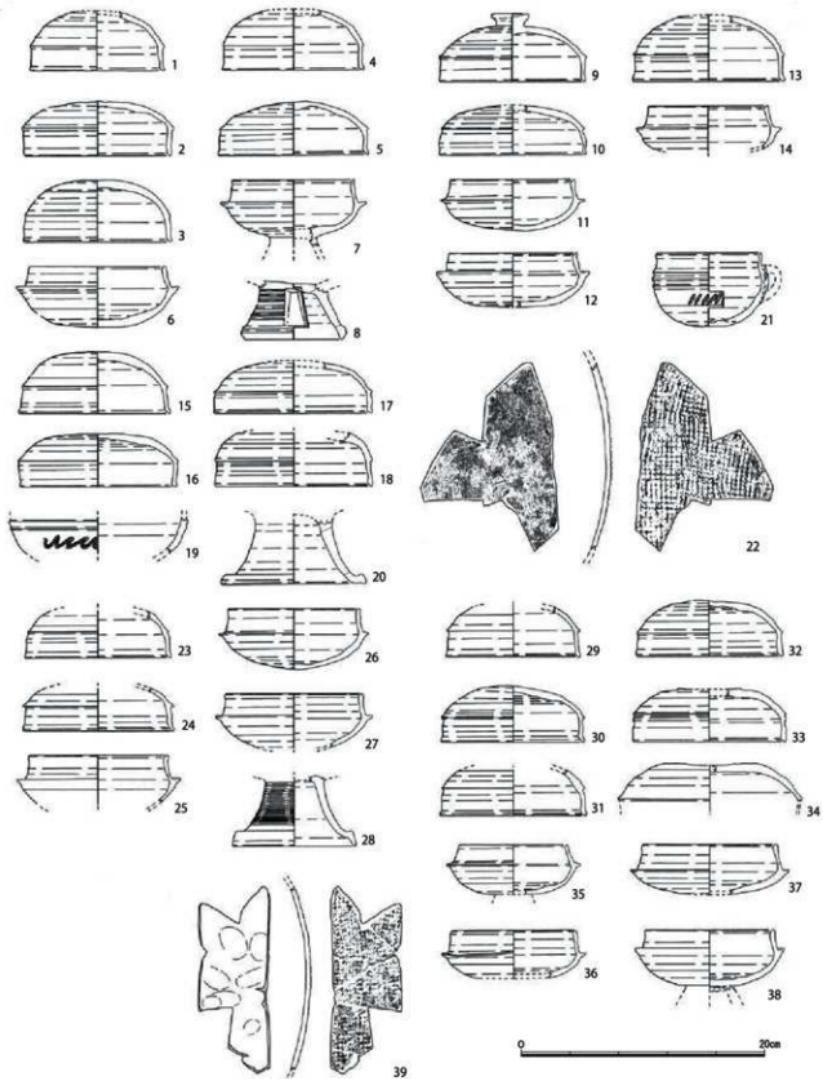
1・2 : SB101、3～10 : SB102 蔥内、11～14 : SB102 上層、15～19 : SB102 下層、
20 : SB103、21・22 : SB104、23・24 : SB105、25～27 : SB106
裏 : 1～5・11～16・18・20・25、移動式甕 : 7、ミニチュア甕 : 9・10、甕 : 6・
17・21・22、製甕土器 : 8・26、鉢 : 19、鉢 : 23、甕 : 24、瓶 : 27

fig.41 出土遺物実測図 (1)



28～31：SB108、32：SB109、33～36：SB110上層、37～44：SB110下層、45：SB113、46：掘立柱建物、47：SP113、
48・49：包含層中、50：石組溝、51・52：擾乱内
甕：28・29・32・34～39・41・47・48、長胴甕：30、壺：33・40、瓶：42、高环：49、製塩土器：31・43・45・46、
土鍬：44、灯明皿：50、石刀か：51、石斧か：52

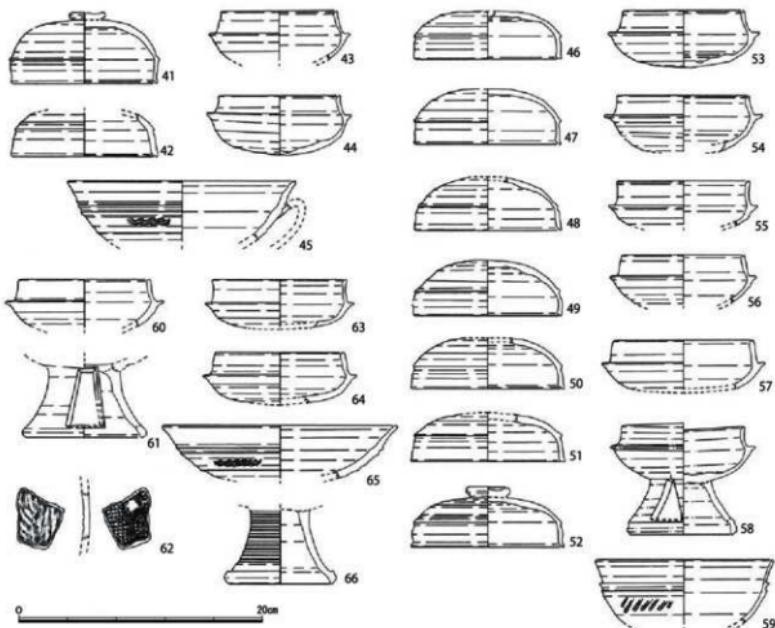
fig.42 出土遺物実測図（2）



1~8 : SB102 上層、9~12 : SB102 下層、13・14 : 近世溝内 (SB103 か)、15~22 : SB104、23~25 : SB105 上層、
26~28 : SB105 下層、29~39 : SB106

环鍑 : 1~5・9・10・13・15~18・23・24・29~34、环 : 6・11・12・14・25~27・35~37、高坏 : 7・8・19・
20・28・38、椀 : 21、韓式系軟質土器 : 39、韓式系硬質土器 : 22

fig.43 出土遺物実測図 (3)



41～45：SB108、46～59：SB110、60・61：SB111、62：掘立柱建物柱穴B (SB108か)、63：SP115、64：SP119、65：SP126、
66：SP139

坏蓋：41・42・46～52、坏：43・44・53～57・60・63・64、高坏：45・58・59・61・65・66、甕か：62

fig.44 出土遺物実測図（4）

模が大きく、周壁溝を有し、カマドは天井部の粘土が崩落していたものの、粘土の痕跡は残存していた。この粘土中からは、ミニチュアの壺形土器が出土しているのも特筆すべき点である。なお、SB102以外からも周壁溝を有する建物や移動式竈が出土していることから、居住構造は伏屋式の建物が採用されていたと考えられる。また、建物は、切り合い関係と遺物の検討から、少なくとも3回の建て直しが行われている。SB106やSB111などの埋土に焼土や炭を含むことも踏まえると、古墳時代後半期に建物が焼失しており、その度に建て直しが行われていることがうかがえる。限られた範囲の調査ではあるが、完形品に復元できる土器も含まれることから、このような出土状況を示す土器は、焼失時に持ち出す暇がなかったものと指摘されている。

遺物に関しても特記する事項がいくつかある。まず、明石市赤根川流域をはじめとした播磨地域に多く認められる赤褐色の胎土を用いた須恵器や格子目タタキをもつ韓式系硬質土器など、他地域との交流を示す遺物が出土している。韓式系土器は、神戸市内でも当遺跡の近隣に立地する郡家遺跡や小路大町遺跡、長田区神楽遺跡・上沢遺跡、西区出合遺跡などで報告されており、今回の調査によって類例が増加した。また、焼成不良の須恵器も少なからず出土して

いることから、近隣に未知の窯址が存在する可能性も想定される。この他にも、製塙土器や鉢壺などの生業関連遺物も出土しており、住吉宮町古墳群を造営した集団の暮らしぶりをうかがえる成果が多面的に得られた。

これまでの調査で検出された古墳時代後半期の集落域は、従来、西側集落と東側集落に分けられてきたが、今回の調査地点はその中間地点に当たる。この集落は、西側集落の領域に含まれると考えられてきたが、第7次調査地点を境に西側集落は、扇状地に立地する集落と谷底平野に立地する集落の二つに細分できるとみられる。集落は、墓域に隣接して形成されるのが当遺跡の特徴であることから、中央集落の墓域は、谷底平野を伝て拡がる可能性がある。

本調査地からは、甑と移動式竈に土師器長胴壺を伴い、高环などの供膳具や韓式系土器、布留式系球胸壺が出土している。これらの器種構成を踏まえると、この集落は、韓式系土器を受容した調理・煮沸方法が導入された初期段階の集落にあたり、住吉宮町遺跡がこの地域における集落の中核となる前夜の集落構造を示す事例として位置づけられる。



fig.45 A区第1遺構面（東から）



fig.46 D区第1遺構面（北西から）

6. 住吉宮町遺跡 第54次調査

1. はじめに

住吉宮町遺跡はJR住吉駅周辺に広がる弥生時代～中世におよぶ複合遺跡である。住吉川右岸の標高20m前後の扇状地に立地しており、これまでの調査では弥生時代の竪穴建物や周溝墓が確認され、古墳時代には前方後円墳と考えられている坊ヶ塚古墳や帆立貝形古墳である住吉東古墳を中心とする中期～後期の古墳群が形成され、今までのところ70基以上の古墳が確認されており、同時期の竪穴建物や掘立柱建物などの集落域も確認されている。また奈良時代にも多数の掘立柱建物などが検出され、出土遺物には官衙遺跡の様相がみられる。

2. 調査の概要

今回の調査地は、現在の住吉宮町遺跡の範囲の西端に近い住吉宮町7丁目の街区、JR神戸線の線路と道路1本を隔てたすぐ南に位置する場所である。付近では平成7年度に南東約50mの地点において第17・18次調査が実施され、第17次調査では中世の掘立柱建物や平安時代・奈良時代の道路状遺構、飛鳥時代の掘立柱建物や竪穴建物、古墳時代中期の方墳が8基検出されており、住吉宮町遺跡の西端に近いものの、重要な成果が得られていた。調査地の西側50mに位置する南北道路付近は、谷状地形の可能性があるが、この道を挟んだ西側は、同じく弥生時代～中世の集落遺跡である郡家遺跡の東端にある。

調査は、工事により埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲について、東西に二分割して実施した。I区で古墳を検出したことから、攪乱により遺構面が失われているものと想定されていた当初の掘削予定範囲より北側部分についても、調査作業スペースを確保しながら、一部拡張を行い、工事影響範囲内で古墳の残存状況の確認を実施した。

調査では古墳時代中期の古墳1基、奈良時代前半と考えられる落ち込み1基を検出した。調査地内の基本層序は、盛土の下に近世以降の耕土層が2層堆積し、その下に平安時代の洪水層と考えられる黄褐色粗砂や灰白色粗砂などが堆積しており、人頭大以上の大きさの石が含まれ、部分的に集中して出土する箇所がある。その下に古墳時代～奈良時代の土器を含む遺物包



fig.47 調査地位置図 1:2,500

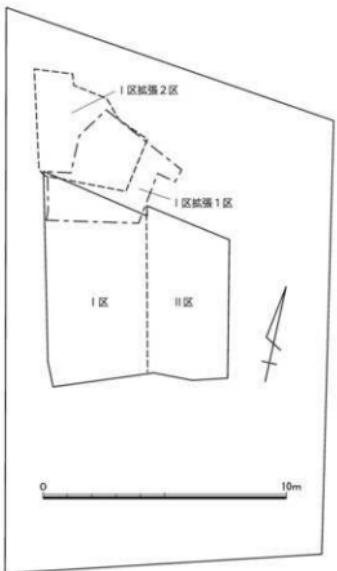


fig.48 調査区配置図

層上面、II区東壁際で落ち込みを1基検出した。葺石検出面から東側へは、やや下がり地形となる。

古墳の基盤層となるのは褐色粗砂や黄褐色粗砂で、間に暗褐色小礫混じりの砂質土が水平に堆積するなど洪水と澱み状態を繰り返した様子が確認され、東側でも同様の堆積層の広がりが確認された。

また古墳時代～奈良時代の遺物包含層である灰色砂質土からは、土器に混じり、比較的多くの埴輪片が出土し、墳丘盛土と考えられる黒褐色砂質土や上層の平安時代の洪水層と考えられる砂層からも埴輪片が出土している。

検出遺構

古墳 I区において古墳を検出した。東辺は周溝東肩が明確でなく、南辺も周溝南肩部が調査範囲内では確認できていない。北辺は周溝北肩の立ち上がりがおよそ確認できた。調査区の北端から南端までで、現在確認できる南北の規模は約13mで、周溝も含めた古墳全体の規模はこれよりやや大きくなる。東西は調査区内で約4mの範囲を検出した。

墳丘の規模は、墳頂部での南北長が約10m、墳丘裾部で約11.5mを測る。段築の有無は不明であるが、遺存する一段分の墳丘斜面全面に葺石が施される。拳大～人頭大的石が葺かれ、基底石の底部から残存する墳丘頂部までの高さは約0.6mである。

葺石は、北東の隅では長辺40～50cmほどの石を縱方向に3段、2列に並べて積んでおり、葺石施工の基準、あるいは隅石列として四隅が意識された32-3号墳などの例に類するものと考えられる。この部分の石がもっとも大きく、同等の石が古墳各辺の基底石の一部に用いられるが、その数はわずかである。基本となる石のサイズは20～30cm大のもので、基本的に4段、

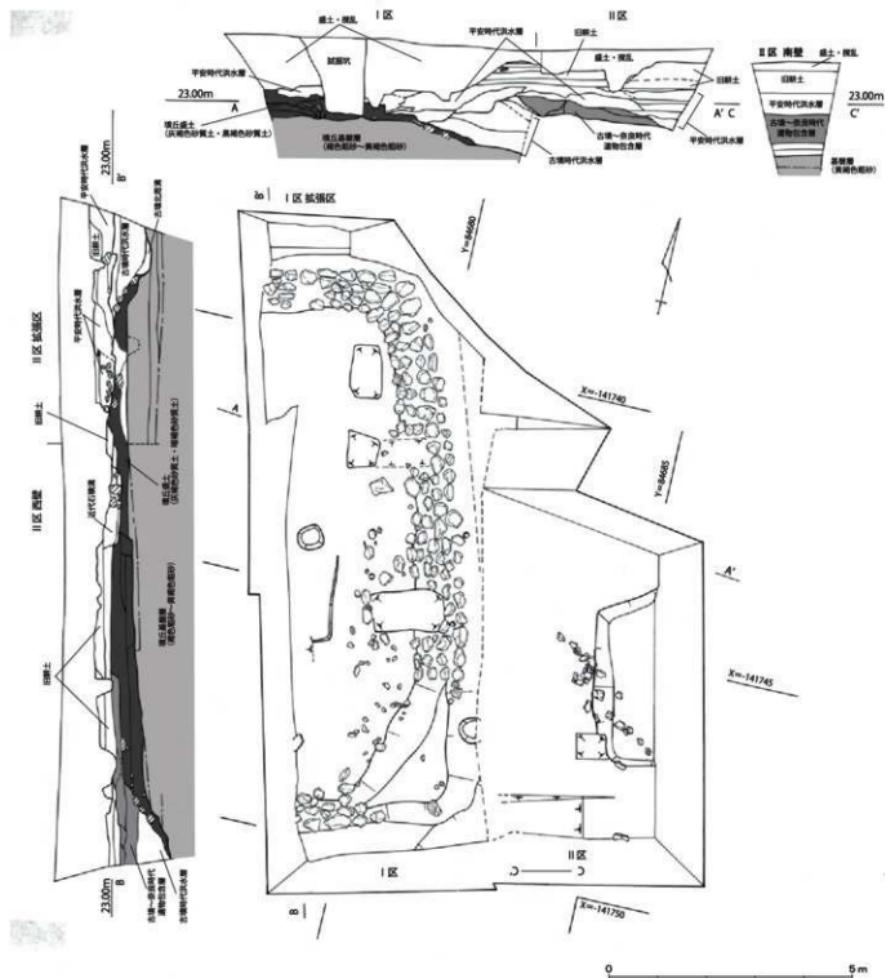


fig.49 調査区平・断面図

石の長手を横方向に並べている。東辺の中央北寄りで一部、5段となる部分があるが、ここ
の墳丘基底には20cm大の角石を1列、丁寧に並べている。葺石は墳丘盛土の傾斜面に並べられ
た状態で、北斜面と南斜面では比較的密に置かれるものの、東斜面の葺石は石と石との間に隙
間が多く、全体的印象としては疎らである。石材は付近で産する花崗岩の転石である。

南東隅の葺石と盛土の一部が失われているが、この部分は上層の奈良時代の遺物包含層の堆積が南から東方向へ厚く、埴丘部を削るように堆積しており、流失した可能性が高い。東半、

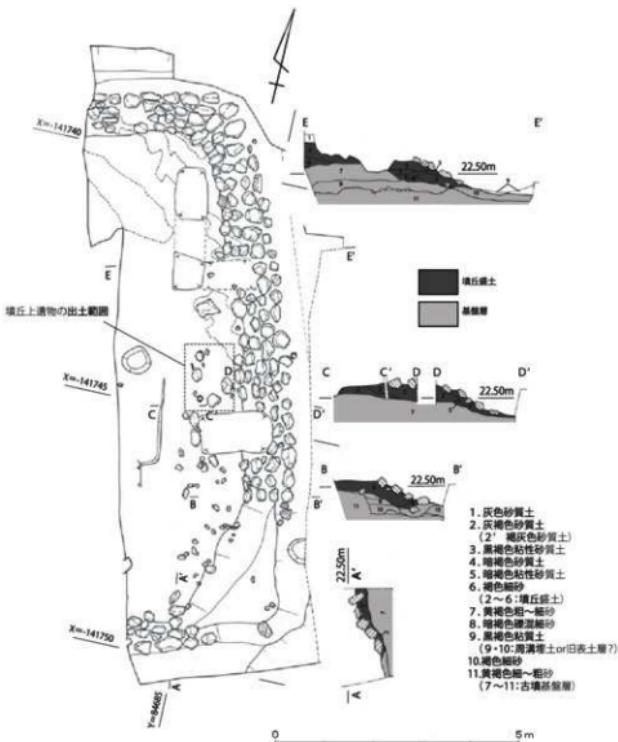


fig.50 1区古墳検出状況平・断面図

II区での調査時に遺物包含層を掘削中に石列を検出していった。使用された石はやや小振りで、これは西側の墳丘上にあった石が動いたか、二次利用されたものと考えられているが、隅石のような大きな石はこの部分に存在していなかった。箱式石棺などの遺構の可能性を想定し、断割りを行ったが、とくに遺構に伴うものではなかった。上層に堆積する平安時代の洪水層は砂の粒子も粗く、古墳の葺石に用いられる石よりも大きな石を激しく流すような堆積の状況であったが、遺物包含層である灰色砂質土は、急激に堆積した上層の堆積とは異なり、徐々に堆積したものと推測される。

古墳に伴う遺物は、墳丘上、東辺中央に堆積する黒褐色砂質土から須恵器壺蓋と短頸壺がそれぞれ1点、また刀子と釘と考えられる鉄製品の一部が出土した。埋葬施設の可能性を考えたが、平面精査、断割り調査の結果では、積極的にこれを肯定できる状況は確認できなかった。また墳丘上祭祀や墓前祭祀の可能性であるが、周辺の調査例では、供獻土器の出土は周溝内が多く、墳丘上の場合でも土器が破碎された状況での出土が多い。金属器が共伴する状況も今までとはやや異なる。墳丘端部に位置すること、短頸壺が正面に据えられること、金属器が共伴するなどの状況に対して、埋葬施設、墓上祭祀、墳丘構築の際の混入など、現状で様々な状況

の推測が可能であるが、逆に決定しづらい状況であるともいえる。さらに埋葬施設に関しては、西壁際で南北約2.2m、東西の検出幅0.8mほどの落ち込みを検出したが、調査の結果、明確な落ち込みとはならず、遺物も棺などの痕跡も確認できなかった。墓坑掘形の痕跡の可能性もあるが、明らかでない。

このほかには東辺の葺石下、周溝底で須恵器坏蓋1点が出土し、上部から転落したものと思われる。葺石を覆う洪水層からの遺物の出土はほとんどない。周溝内出土の須恵器はTK23型式、墳丘上出土の須恵器坏蓋はTK47型式で、短頸壺は同時期か、やや新しいMT15型式の可能性があり、古墳の築造は5世紀後半で、祭祀は6世紀前半まで継続する可能性がある。住吉宮町遺跡ではTK47型式からMT15型式にかけての時期に、付近一帯で大規模な洪水の堆積が確認されている。これらの状況を考えると埋葬施設に伴うものとするよりは墓上祭祀の要素が強いものと考えられる。

南東部では墳丘が崩れ、葺石が流された部分の周溝付近から出土した須恵器坏身はTK217型式か、それ以降のものと考えられ、古墳を埋めた洪水層の形成時期と隔たりがある。古墳時代～奈良時代の遺物包含層の堆積と重なり、周溝内に堆積した洪水層からの出土を考えるよりは、上層遺物包含層の堆積に伴うもので、II区で確認された石列や、竪穴状の落ち込みが形成された時期である7世紀代のものと考えられる。

落ち込み II区の調査区東壁際で検出した落ち込みは、南北の検出長3m、深さ20cmほどで、明確な遺物の出土はなかった。竪穴建物の可能性を考えたが、落ち込みの底では周壁溝や柱穴などは確認していない。落ち込みの西辺のラインは比較的明瞭であるが、南側の立ち上がりは辛うじて調査区東壁の断面で立ち上がりらしきものが確認できる程度であった。落ち込み南辺とII区南壁際で40cm大の石が2個検出された点が気になるが、西側の古墳の葺石の転石なのか、また遺構に伴うものであるのかは明らかでない。この落ち込みは古墳を埋没させた洪水層の上面で検出したが、縞状に堆積する様子や、II区北壁では地震に伴う噴砂で生じた土層のズレを確認しており、これら堆積層の境目の痕跡を落ち込みとしている可能性も考えられる。

3.まとめ

本調査で検出した古墳は、葺石をもつなどの古墳群内における優位性が認められる。ただ、住吉宮町古墳群（第32次調査時に提唱、遺跡名は住吉宮町遺跡である）においては、規模を中心としてみた場合に、規模が大きいものに必ずしも段築や葺石・埴輪などの外装施設が伴うものでなく、また築造時期の問題もあるが埴輪が樹立するものでもない。グループ内でも個々の古墳のあり方には様々な様相があるものと考えられる。

洪水の影響により当初の墳丘の高さや段築の状況などは明らかでなく、また墳頂部東辺で出土した須恵器の坏や短頸壺には刀子と釘と考えられる金属製品が共伴していた。墳頂の縁辺部で、埋葬施設というよりは出土土器の型式からも墓上祭祀の痕跡と捉えるのがよいかと考えているが、住吉宮町古墳群では供獻土器と考えられる土器の出土

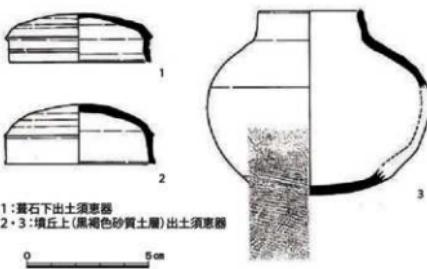


fig.51 墳丘上・葺石下 出土遺物実測図

は主に周溝内で確認されており、金属器を伴う場合もU字形鋤先やヤスで、埋葬施設からは鉄剣・鉄刀・鉄鎌などが出土している。共伴する金属器の状況は今後、検討が必要と考える。

また平安時代の洪水層をはじめ、古墳時代～奈良時代の遺物包含層、埴丘盛土と考えられる黒褐色砂質土には、破片の状態ではあるが埴輪片が多く含まれていた。今回検出の古墳には埴輪の樹立が認められないことから、洪水層の堆積状況を考えると、北側から北西側の直近に埴輪を樹立した古墳の存在が推測される。

おそらくは北側直近の高位の場所に埴輪を設置する、やや古相の古墳が存在し、今回検出した古墳はそれに従属するクラスの墓や、また第17次調査で検出された8基（以上）の古墳などとグループを形成する可能性のある古墳と想像される。周辺にどれほどの広がりがあるのか明らかでないが、古墳群の広がりが比較的明らかであった第32次調査の状況などからは、周辺に古墳とともに箱式石棺などの埋葬施設が存在することが予測される。

今回の調査で住吉宮町古墳群の広がりが確認された点は非常に意義があり、さらに古墳の規模、外表施設の状況、埴輪の有無など、古墳群の群構成、序列関係などを考える上で新たに重要なデータが得られたものと考えられる。今後の周辺での調査の進展に期待したい。



fig.52 I区拡張2区古墳検出状況（南東から）



fig.53 I区古墳検出状況（北から）

7. 郡家遺跡 第94次調査

1. はじめに

郡家遺跡は、六甲山系より大阪湾へと流れる住吉川や天神川などにより形成された、扇状地の標高約13～47mの扇央部～扇端部に立地する、弥生時代～中世の遺跡である。昭和54年度の第1次調査以来、これまでに90回以上の発掘調査が実施されている。

昭和54年度に宅地造成に伴い実施された、第1次（旧大蔵地区第1次）調査では、一辺1m前後の方形掘形の柱穴で構成された、奈良時代～平安時代頃の掘立柱建物数棟が確認された。検出された掘立柱建物の中で最大のものは、3間×4間で西側に庇をもつ構造である。この調査成果と郡家遺跡が所在する一帯に、「郡家」の地名や字名「大蔵」などが存在することを合わせて、郡家遺跡は「兎原郡衙」の有力な候補地とされている。

昭和58年度より開始された、都市計画道路山手幹線および弓場線建設に伴う発掘調査では、弥生時代後期の円形周溝墓、古墳時代中期～後期の竪穴建物、平安時代～鎌倉時代頃の掘立柱建物などが確認されている。また、城ノ前交差点北西側における第17次（旧城ノ前地区第24次）調査では弥生時代後期の集石墓、第14・6次（旧城ノ前地区第23次）調査や第17次（旧城ノ前地区第24次）調査では、L字型に屈曲する煙道を設けた竈を有する、古墳時代後期の竪穴建物などの特徴的な遺構の存在が確認されている。今回の調査地から約180m北側における第45次（旧下山田地区第4次）調査では、古墳時代後期の横穴式石室を埋葬施設とする古墳2基が確認されている。

2. 調査の概要

今回の調査は店舗建設に伴うものである。調査地は第1次調査地の北東側に近接する。工事計画により、埋蔵文化財へ建物基礎の掘削が及ぶ範囲について1～15区の調査区を設定し、発掘調査を実施した。

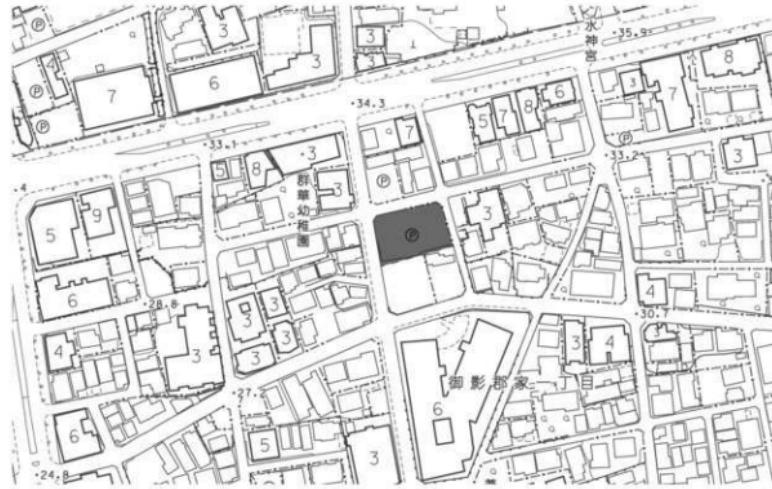


fig.54 調査地位置図 1:2,500

基本層序

調査地は、現況で北東から南西へと下がる緩斜面地である。

基本層序は盛土層および整地層下に、複数の耕土・床土層が存在し、その下層に飛鳥時代～平安時代の遺物包含層である、暗褐色細砂および暗褐色シルト質細砂を検出した。遺物包含層は、調査区の北半を中心にして0.3m前後の厚さである。この下層の茶褐色細砂や暗黄灰色シルト質細砂、暗黄灰色シルト、暗黄灰色細砂などの上面に遺構面を検出した。現地表面から遺物包含層上面までの深さは、調査地北側で1.1～1.3m、調査地南側では1.4～1.75mであり、遺物包含層・遺構面も現況と同じく、北東から南西へと下がる状況であることが確認された。

1～6区 調査地の南半部に位置し、建物基礎部分の調査区である。

2区は攪乱の影響を大きく受けたが、1・3～6区では遺物包含層・遺構面を確認した。3・4区は遺物包含層より下層の暗褐色細砂に転石を多く含み、谷状地形である可能性がある。各調査区からは明確な遺構を検出することはできなかったが、6区では南側への落ち込みが確認され、溝状の遺構である可能性が考えられる。1・3～6区からは弥生土器と考えられる土器片や土師器、須恵器片などがわずかに出土した。

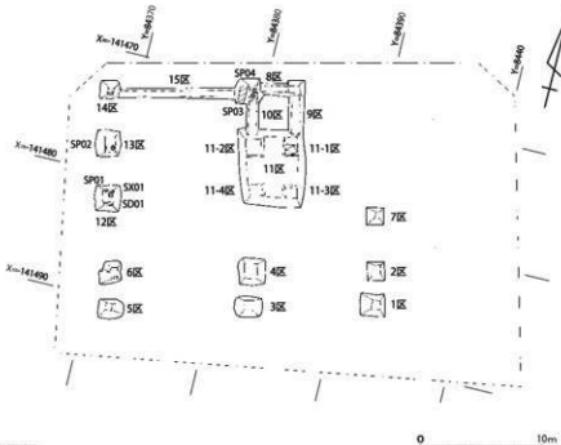


fig.55 調査区平面図

7区 調査地中央部東側に位置する、建物基礎部分の調査区である。攪乱の影響を大きく受けしており、遺物包含層・遺構面を確認することはできなかった。

8区 調査地中央部北側に位置する、地中梁および建物基礎部分の調査区である。

調査は、地中梁設置の工事影響深度（設計GL - 1.2m）まで掘削し、地中梁部分は遺物包含層が工事影響深度内に留まるため、調査区両端の建物基礎部分について遺構面まで、掘り下げた。西側の基礎部分でピット2基を検出した。いずれも建物等を構成するものであるかは不明である。SP03から土師器、須恵器片が出土したが、細片であり時期の特定はできない。

9・10区 調査地中央部北側に位置する、地中梁部分の調査区である。遺物包含層を確認し、工事掘削範囲内での調査を実施した。

遺物包含層から飛鳥～平安時代頃と考えられる土師器、須恵器片が出土した。

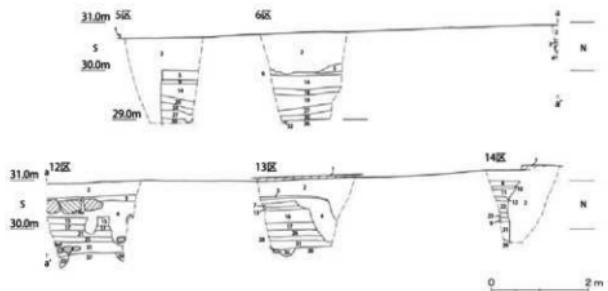


fig.56 土層断面図（1）

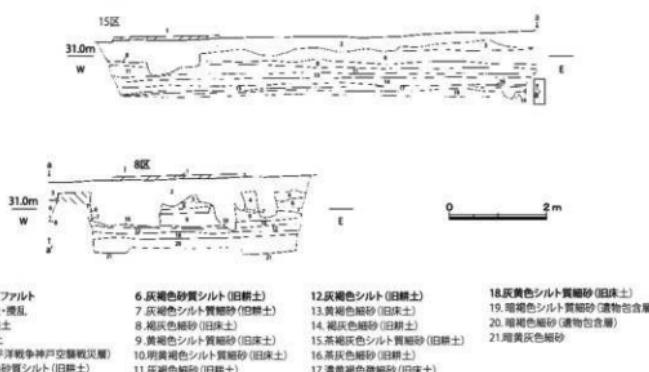


fig.57 土層断面図（2）

11区 調査地中央部北側に位置し、地中梁・建物基礎およびエレベーターピット部分の調査区である。地中梁設置の工事影響深度（設計GL - 1.2 m）まで掘削後、建物基礎部分（11 - 1～4区）の調査を実施したが、いずれも遺物包含層・遺構面は確認できなかった。11 - 1・2区付近では、南側へ落ちる旧耕土層の段差が確認されており、柵田状の耕地造成であると考えられる。盛土・旧耕土層下は細砂層であり、谷状地形に流入した洪水砂である可能性がある。なお、エレベーターピット部分は、工事影響深度が旧耕土層内に留まるため、それ以上の掘削は実施しなかった。

12～14区 調査地北西部西側に位置する、建物基礎部分の調査区である。

12区で東西方向の溝1条、ピット1基、落ち込み状遺構1ヶ所を検出し、13区でピット1基を検出した。14区は擾乱の影響を大きく受けしており、調査区南側にわずかに遺物包含層・

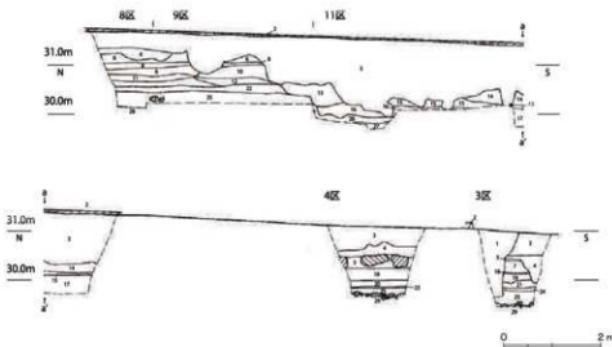


fig.58 土層断面図（3）

遺構面が遺存している状況であった。検出したピットは建物等を構成するものであるかは不明である。12区の溝（SD01）から土師器片が出土した。

15区 調査地北半部西側に位置する、地中梁部分の調査区である。遺物包含層を確認し、工事掘削範囲内の調査を実施した。

遺物包含層から土師器、須恵器片が出土したが、細片であり時期の特定はできない。

3.まとめ

今回の調査では、主に飛鳥時代～平安時代頃の遺物を含む遺物包含層と遺構面を検出した。8区西端、12・13区では溝、ピットなどの遺構を検出した。

調査地の中央は11区における細砂層の存在、3・4区に転石が多く認められる状況から、北東～南西方向の谷状地形で、転石や洪水砂などが流入している状況である。この谷状地形の北西側である、5・6・8～10・12～15区では遺物包含層からの出土遺物も比較的多く、遺構の存在も確認されたことから、第1・20・28・61次調査地など、調査地西側に存在する奈良時代～平安時代頃の遺構が分布する範囲の縁辺部なのであろう。



fig.59 11区全景（北西から）

8. 都賀遺跡 第21次調査

1 はじめに

都賀遺跡は六甲山の南麓、石屋川と六甲川の間に形成された扇状地上に位置しており、現標高は45m～38mで、北から南への傾斜地に立地している。

既往の20回の調査では縄文時代早期から中世にいたる遺構・遺物が確認されているが、縄文時代早期、弥生時代中期～後期、弥生時代末～古墳時代初頭の各時期に、検出遺構や遺物にまとまりが認められ、それぞれの時期で集落形成があったと推察される。

今回の調査は山手幹線拡幅工事に伴う調査で、調査地付近における下水管・ガス管などライフラインの移設工事に伴う立ち会い調査において、遺物包含層および遺構面が遺存することが確認された範囲で、現状で開口より一段高く残る駐車場部分において調査を実施した。

2 調査の概要

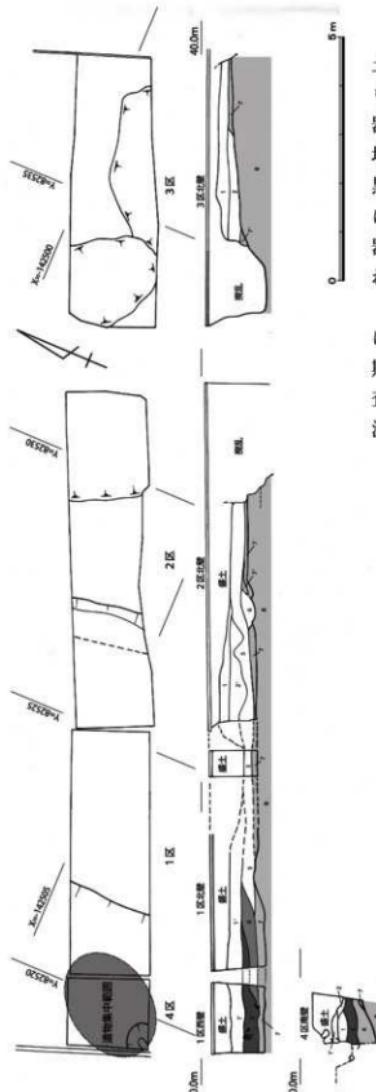
調査は5～7m単位で調査区を設定して実施した。アスファルトを除去すると、調査区内には盛土層の下に灰色および褐灰色を呈する砂質土の旧耕土層が堆積し、耕作に伴う落ち込みなどを確認した。3区の東半では旧耕土層下で近世の陶磁器、瓦等を含む浅い落ち込みを検出し、東端では現地表下0.5mで地山面となる。一部、礫の露頭がみられるなど、すでに削平が進んだ状況と考えられ、地山面の標高は39.4mである。

地山面は南西方向へ緩やかに傾斜し、1区の西半で1箇所の段と、2区の中央付近では溝、あるいは小規模な段を形成しながら下がる。検出範囲で最も低い地山面は4区の南西隅で、標高は38.5 mである。断面で確認した2区検出の溝状の落ち込みは、幅0.6 m、深さ0.3 mで、弥生土器片が出土した。旧耕土層の堆積を確認すると、1・2区の境付近でレベルが異なることから、近世においても段地形が踏襲されていたようである。

旧耕土層と地山面との間には灰褐色粘質土が堆積し、この層には弥生土器がわずかに含まれる。調査区の西端近くである1・4区では、灰褐色粘質土の上に暗黒灰色粘質土、黒灰色粘質土が堆積し、弥生時代後期を中心とする多量の土器が出土した。これらの層は4区ではおよそ0.4mの厚さで堆積していた。上層の暗黒灰色砂質土から出土した土器は、大きめの破片を含み、



fig.60 調査地位置図 1:2,500



1. 灰色砂質土〔近世耕作土〕
- 1' : 褐色砂質土
2. 濁灰褐色砂質土〔黒灰色粘質土ブロック層〕〔近世落ち込み〕
- 2' : 褐黄色粘質土〔黒灰色粘質土ブロック層〕
3. 増厚灰色粘質土〔遺物多い〕
4. 黒灰色粘質土〔遺物古む〕
5. 暗灰褐色粘質土〔遺物少量含む〕
- * 3～5層: 遺物包含層
6. 黒灰色砂質土〔溝状の落ち込み〕
7. 黒灰色砂質土〔礫層の覆面あり〕
- 7' : 深黄褐色砂質土
8. 黄灰色砂質土～標準じり褐色砂質土
- * 7, 8層: 地山

fig.61 調査区平・断面図

土器の表面の摩耗も少なく、直近から流れ込んだものと考えられる。下層の黒灰色砂質土からも土器が出土したが、上層に比べるとその量は少ない。堆積層の広がりと遺物の出土状況からは、下層の黒灰色粘質土出土の土器は緩やかに堆積した時期に流れ込んだもので、上層の暗黒灰色粘質土の土器は一括性が高い埋没状況にあったものと推測される。

出土土器は弥生時代後期前半にあたる、V様式に属するものが大半を占め、わずかに弥生時代中期にあたる、IV様式の土器が含まれる。今回の調査地北東側に位置する、既往の調査地と同様の状況である。



fig.62 1区全景（東から）

3. まとめ

調査範囲が限られていたが、弥生時代中期～後期の土器が出土し、調査区周辺の微地形を観察すると、わずかに窪地となった部分に、北西側、あるいは北側から土器が流れ込み堆積したものと推測される。調査区周辺では市街地化の影響が大きく、中世以前の頗著な遺構・遺物の検出はなかったが、今回の調査結果により付近に同時期の遺構・遺物が存在した可能性を想定することができる。少量ながら出土した弥生時代中期の土器に装飾性の高い壺の口縁部の破片などが含まれる点は、北東側の調査地でかつて検出されている方形周溝墓群との関係や墓域の範囲を考える上で重要なものとなろう。また六甲川左岸に展開する篠原遺跡などの関連性を考える上でも同様に重要な成果であった。

また今回の調査区とは山手幹線を挟んだ南側で行なわれた、第9次調査地でも弥生時代後期の土器の出土した溝が検出されており、削平が大きいものと考えられる山手幹線付近においても集落域の広がる可能性を考えることができる。

今後は北西側の六甲（都賀）川左岸の、自然堤防上と考えられる街区部など、都賀遺跡西半部での調査の進捗による遺跡の様相の解明が期待される。

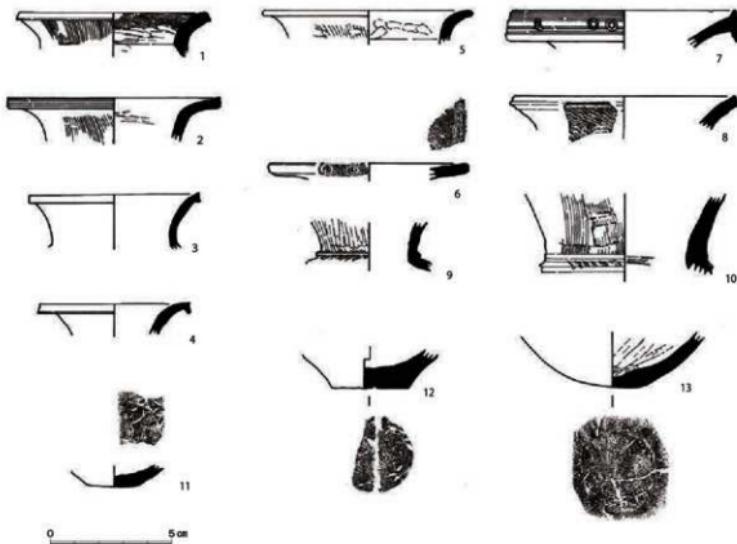


fig.63 出土遺物実測図（1）

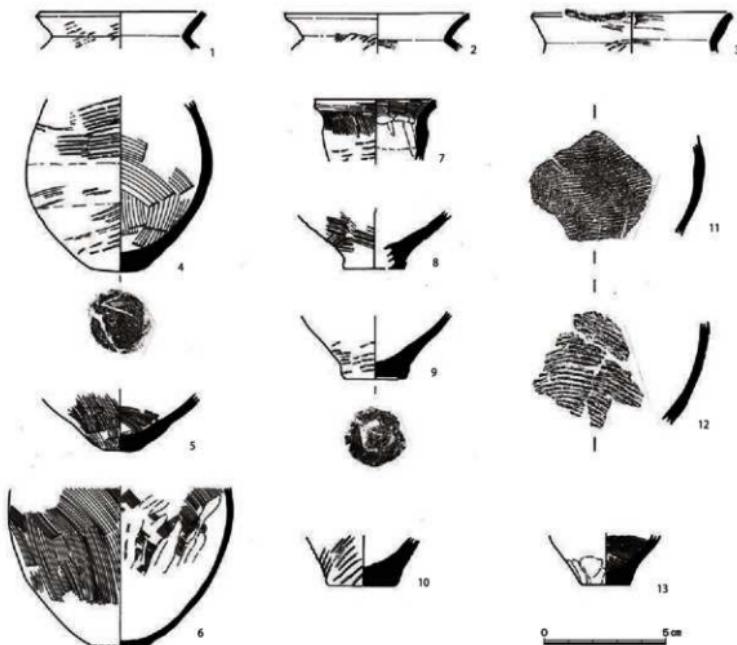


fig.64 出土遺物実測図（2）

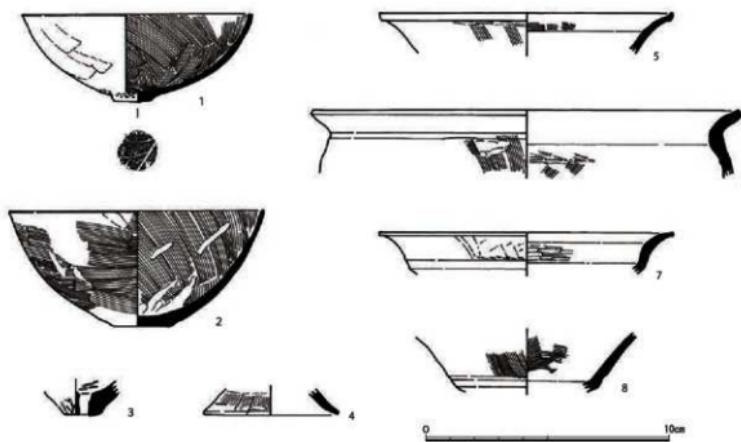


fig.65 出土遺物実測図（3）

9. 篠原遺跡 第38次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲川と袖谷川の合流地点付近を中心として立地する縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。標高40～105mの地点にあり、両河川によって形成された扇状地上に位置する。

当遺跡では、縄文時代中期末に集落の形成がはじまり、弥生時代前期初頭まで断続的に継続したとみられる。集落は弥生時代前期初頭以降に一度途絶するが、弥生時代中期後半に再び集落が形成されはじめ、後期に最盛期を迎えて、古墳時代初頭まで継続する。その後、古墳時代前期～中期に篠原南遺跡へ集落が移動し、飛鳥～平安時代の遺構は、散発的に見つかっている程度である。再び集落が形成されるようになるのは鎌倉時代からであり、その後は、近代まで河川の氾濫や土石流の被害を受けつつ、小規模な集落が継続していく。今回の調査地点に近接する調査では、縄文時代晩期中葉の土器（第13次）、弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴建物（第13・29次）、中世の土坑や溝等（第22次）が検出されている。また、当調査地の南西側に位置する第28次調査では、弥生時代後期の竪穴建物、中世の犁溝や石垣等が検出されており、当地を含む周囲一帯に弥生時代後期と中世の遺構面の拡がりが把握してきた。

2. 調査の概要

基本層序

発掘調査は、調査範囲を4区に分けて実施した。調査地は駐車場となっていたため、標高67.4～67.6mとほぼ平坦な地形となっていた。調査地周辺の地形は、東側が標高66.4m、西側が標高65.7m、南側が標高66.0m、北側が標高69.7mである。



fig.66 調査地位置図 1:2,500

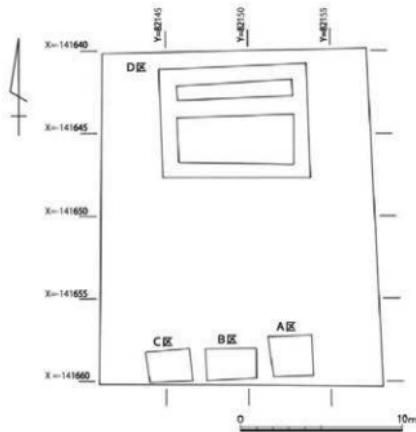


fig.67 調査区配置図

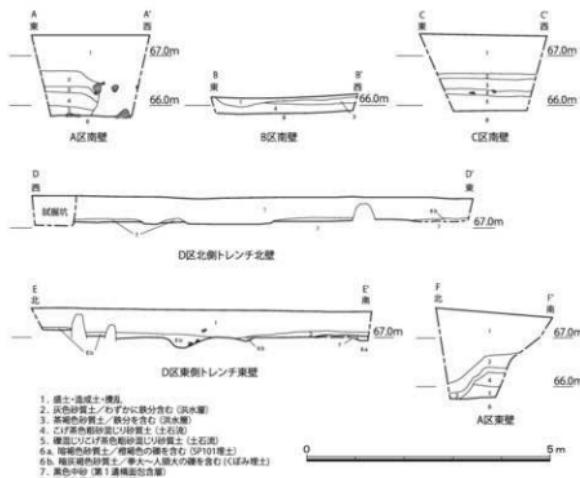


fig.68 土層断面図

層序は、現地表面から標高 66.6 ~ 67.2 m までが造成土・盛土等を含む土層であり、その下位に江戸～近代までの洪水・土石流を含む土層がある。遺構面は、黒色中砂層下で検出されたが、黒色中砂層はD区側のみに拡がる。A～C区は、洪水・土石流を含む層を除去すると、黄色砂質粘土の基盤層が検出されたため、A～C区とD区の間で黒色中砂が途切れるとみられる。

黒色中砂の検出標高は、D区南側で標高 66.9 m、北側で標高 67.1 m であり、弥生時代の第

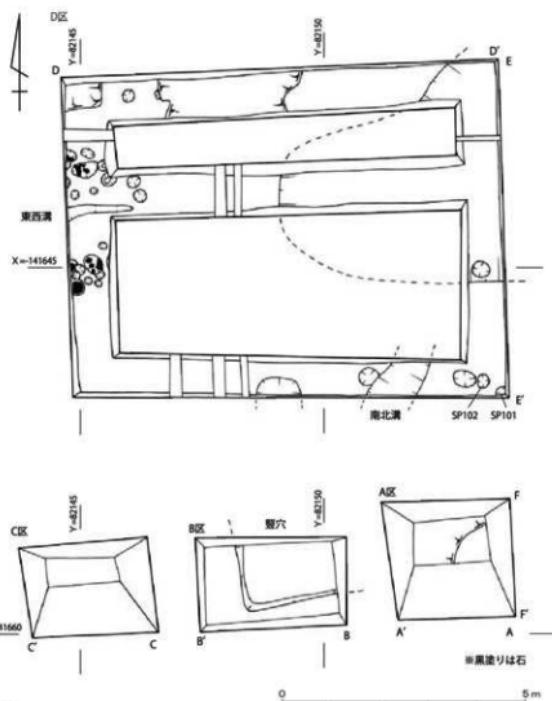


fig.69 調査区平面図

V様式後半の土器片や鎌倉時代、江戸時代の土器片をまばらに含んでいた。

検出遺構 工事の影響深度により、検出した遺構を掘削することができなかつたため、不正確な面もあるが、検出した遺構は、B区から竪穴建物とみられる遺構1基、D区から土坑7基、ピット24基、東西方向の溝1条、南北方向の溝1条である。D区で検出した遺構面は、安土・桃山時代後半にあたるが、A～C区では、D区と同じ遺構面に相当する面は検出されなかつた。

竪穴建物とみられる遺構 方形プランとなり得る遺構で、東西2.0m以上、南北1.4m以上を測る。土師器、弥生土器が出土しており、弥生時代終末期の竪穴建物の可能性がある。

土坑 幅0.3～0.9mの円形、楕円形がある。遺構を若干掘り下げた際にも遺物は出土していないため、詳しい時期は不明だが、およそ江戸時代以降とみられる。

ピット 直径0.3m前後の円形である。SP101から土師器片、SP102から須恵器片が出土している。いずれも中世のものとみられる。他のピットに関しては時期が不明だが、およそ江戸時代以降にあたるとみられる。

東西方向の溝 D区西側トレンチで検出した。幅0.3m、長さ1.4m以上を測る。遺物が出土していないため、時期は不明である。

南北方向の溝 D区南側トレンチで検出した。幅0.9m、長さ0.9m以上で、埋土には、人頭

大ほどの礫が詰まっていた。遺物が出土していないため、時期は不明である。

3.まとめ

各区で検出した遺構は、様々な時期のものが含まれる。A区は、遺物包含層の削平が著しいため、詳しい時期は不明である。B区は、弥生時代終末期の竪穴建物とみられる遺構を検出しているが、上層の土石流によって、本来の遺構面は削平されているとみられる。C区も、洪水によって遺物包含層がほぼ削平されていたが、洪水砂中から安土・桃山時代後半の備前焼大甕や須恵器壺が出土している。D区の北西で検出した遺構は江戸時代以降のものとみられ、南東で検出したピットは中世のものとみられる。これらの成果をまとめると、遺構を部分的にしか検出できなかったものの、今回の調査地点では、弥生時代と中世の遺構面が本来あったと考えられる。いずれの調査区からも洪水砂を検出しているため、今回の調査地点が自然災害による影響を受けてきた様相が明らかとなった。

D区で検出した遺物包含層（黒色中砂）は、西側のみに拡がり、一部では、黒色中砂の下位層にあたる褐色中砂も露見していた。この褐色中砂には、炭や人頭大ほどの礫が含まれていた。近隣での過去の調査成果を踏まえると、この層中から弥生時代の遺構が検出されているため、B区で検出した弥生時代終末期の竪穴建物とみられる遺構も本来は、この褐色中砂が遺構面であった可能性がある。

以上をまとめると、今回の調査地点には、弥生時代の集落が拡がるエリアの一角にあたり、中世以降に六甲山麓から派生する河川等の氾濫によって、遺構面を削平するほどの自然災害を受けていたことが明らかとなった。



fig.70 D区北側トレンチ第1遺構面（西から）

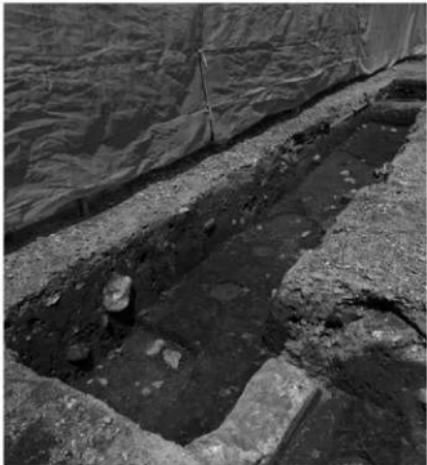


fig.71 D区北側トレンチ北壁断面（南西から）

10. 篠原遺跡 第39次調査

1. はじめに

篠原遺跡は、六甲川と袖谷川の合流地点を中心に立地する縄文時代から安土・桃山時代までの複合遺跡である。標高40～105mの地点にあり、両河川によって形成された扇状地上に位置する。今回の調査は個人住宅建設に伴う発掘調査である。

当遺跡は、縄文時代草創期の有舌尖頭器が出土した事例を嚆矢とし、縄文時代中期末に集落が形成され、その後は、安土・桃山時代まで幾度かの間断を挟みながらも継続していく。集落の盛期は、大きく分けると2つある。1度目は縄文時代晩期中頃であり、この時期に東北地方で製作されたと考えられる大洞式の注口土器や遮光器土偶、石器製作に関する遺構・遺物が検出されており、篠原遺跡が拠点集落であったことがうかがえる。2度目は、弥生時代後期中葉～古墳時代初頭であり、磨製石剣や小形彷彿鏡、鉄鏃の他、河内系の有文土器、瀬戸内系土器などといった他地域系土器の存在から、拠点集落として機能していた様子がうかがえる。古墳～飛鳥時代にかけては、篠原南遺跡・都賀遺跡へ集落の中心が移動したとみられ、奈良～平安時代は、散発的に遺構が報告される程度である。再び集落が形成されるようになるのは鎌倉時代以降であり、その後は、近代まで土石流や河川の氾濫を受けつつも、小規模な集落が継続していく。

今回の調査地点に近接する調査では、縄文時代晩期の土坑（第8・12次）、弥生時代中期後半の竪穴建物・石器製作跡（第31次）と後期後半の竪穴建物（第8次）、柵列もしくは掘立柱建物（第10・19・33・36次）、奈良時代の土坑・製塙土器（第25次）、鎌倉時代前半の掘立柱建物（第12次）などが検出されており、調査地の周囲一帯に拡がる遺構面の存在が把握してきた。



fig.72 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

発掘調査は、調査範囲を2分割して実施した。

基本層序

調査地の現地表面は、北側約2/3は標高86.2～86.3mの平坦面で、南側約1/3は大きく削平されていた。層序は、現地表面から標高85.8m前後まで造成土・盛土が堆積し、その下位に第1遺構面のこげ茶色中砂が部分的に残存していた。検出標高は、85.7～85.8mである。第2遺構面は、こげ茶色中砂と黒色粗砂混じり中砂を除去した黄褐色粗砂混じり粘質土上で検出した。標高は、85.6～85.7mである。

第1遺構面 土坑2基、ピット9基を検出した。

土坑 SK101は、SP107・108に切られた状態で検出した。長軸0.6m、短軸0.45m、深さ0.1mである。埋土は、黄灰色粘質土であった。遺物は出土していない。SK102は、攢乱によって半分ほど削平を受けていたため、現状の規模は、長軸0.9m、短軸0.35m、深さ0.1mほどである。弥生土器もしくは土師器が出土している。

ピット 直径0.15～0.6m前後、深さ0.1m前後の円形もしくは楕円形を呈するものが多い。埋土は、黒灰色粘質土である。SP101・103・108から弥生土器もしくは土師器とみられる土器片、SP105から弥生土器もしくは土師器とみられる土器片とサスカイト製剥片、SP107から須恵器片が出土している。

第2遺構面 土坑5基、ピット29基、性格不明遺構1基を検出した。

土坑 SK201・202は一辺約0.8m前後の方形を呈するもので、深さは0.15mほどである。SK201からは、縄文時代晩期の土器片が出土している。SK203は、長軸2.7m、短軸1.6m、深さ0.2mほどの長方形形状を呈するもので、埋土中から人頭大の石が多数出土した。これらの石は人為的なものではなく、土石流により転落してきたものとみられる。

ピット 直径0.15～0.8m前後、深さ0.3～0.75m前後の円形もしくは楕円形を呈する。SP201～203・216・217・219・224とSP221～223・227は、柵列もしくは掘立柱建物を構成する可能性がある。SP205・206・215・220・222・224・225・228から弥生土器片が出土している。**性格不明遺構** SX201とした遺構は3.4m×3.1m以上の方形状を呈するものである。SP205・215・225・226・228がこの遺構に伴う柱穴とみられ、SP215・225の南側からは、壁土とみられる土塊も出土している。遺構の深さは、0.1～0.25mほどと浅く、埋土中から人頭大ほどの石が多数出土しているため、この遺構もSK203と同様、土石流による石が窪地にたまつものである可能性も残るが、柱穴の配置と壁土とみられる土塊が出土していることから判断して、竪穴建物である可能性がある。遺物は出土していない。

3.まとめ

第1遺構面上で検出した遺構の埋土は、黒灰色粘質土が堆積しているものと、黄灰色粘質土が堆積しているものがあり、複数の時期の遺構が第1遺構面上に残存したものとみられる。弥生時代後期～終末期の遺構は黒灰色粘質土が埋土中に含まれるものとみられ、遺構埋土に黄灰色粘質土が堆積するものは、平安～鎌倉時代ごろの遺構とみられる。

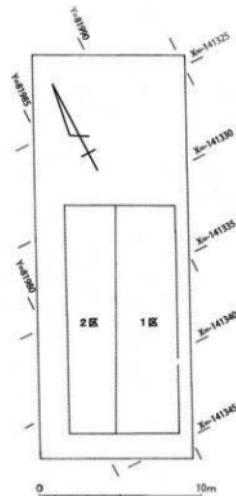


fig.73 調査区配置図

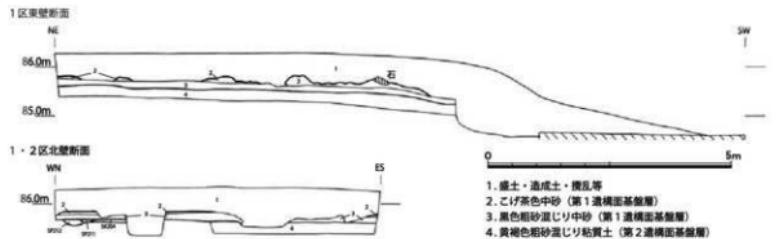


fig.74 土層断面図

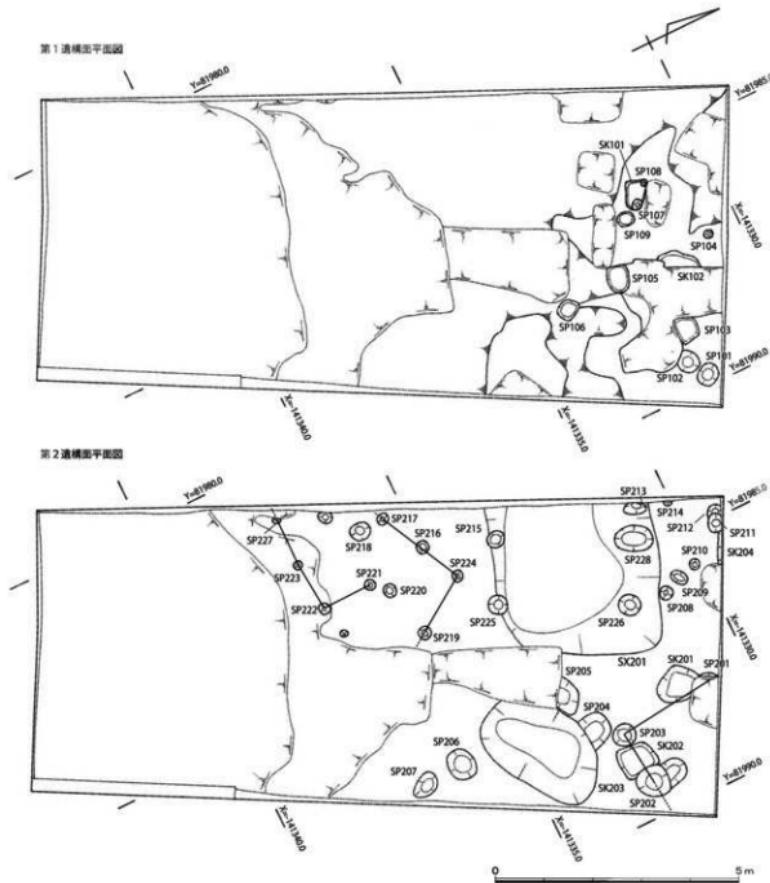


fig.75 調査区平面図

第2遺構面は、狭小な調査範囲ながらもピットを多数検出し、その中のいくつかは、掘立柱建物もしくは柵列の可能性があるものも含まれていた。また、竪穴建物の可能性がある遺構も1基検出した。この遺構内からは、柱穴とみられる遺構と、SP215・225の南側から第2遺構面上に張り付いた状態で壁土とみられる土塊が出土している。

第2遺構面で検出した遺構から出土した遺物は、いずれも細片で、時期を特定できるものは、縄文時代晩期の土器が出土したSK201だけである。第2遺構面に伴う遺物包含層（第2・3層）からは、大形有孔器台の破片や列点文を器壁に施した土器片、脚部に3孔1単位の列孔を等間隔に穿孔した台付甕など、畿内第IV様式の特徴を具備する弥生土器が含まれている。これらの点から第2遺構面は、一部、縄文時代晩期の遺構が含まれるもの、中心となるのは弥生時代中期後半である。近隣では、縄文時代後期～晩期の土坑（第8・12次）と弥生時代中期後半の竪穴建物（第31次）が検出されているが、今回の発掘調査では、過去の調査成果と符合する結果が得られた。



fig.76 1区第2遺構面全景（北東から）

11. 大石東遺跡 第5次調査

1. はじめに

大石東遺跡は過去4度の調査が行われているが、不明な点が多い。平成18年に今回調査地の北隣で行われた第4次調査では、8世紀から10世紀頃の掘立柱建物、竪穴建物、耕作地などが確認されており、一帯が奈良時代から平安時代にかけての集落であったことを示している。

今回の調査は市立西郷小学校内におけるエレベーター棟建設工事に伴うものである。



fig.77 調査地位置図 1:2,500

2 調査の概要

今回調査地は、表土直下 150cm までが現代の盛土、その直下に第1遺物包含層、その直下に第2遺物包含層と続き、遺構面を形成する層は第2遺物包含層直下層であった。遺構面基盤層上面の標高は 8.2m 前後である。

第1遺物包含層の直上に一部洪水砂状の粗砂層が認められたが、堆積時期は不明、第1遺物包含層、第2遺物包含層の時期はそれぞれ14～15世紀頃、平安時代後期と推測される。

徐山遺稿

南北方向の移溝 5 号と移溝上回方向の溝 (SD01) を 1 号検出した。

溝 SD01 は幅 60cm 程度、深さ 30cm 程度で、調査区外に続く。溝底には掘削時の工具痕があり、人工的に掘られたものとわかる。周辺に犁溝が残されていることから、当該地は耕作地で、SD01 も農業用水路の機能を有した可能性が考えられるが、詳細は不明である。出土土器が細片のため遺構の時期確定は困難であり、直上の遺物包含層からは黒色土器 A 類を含む土師器片が出土しているが束縛系須恵器は出土しない。このことから消極的ながら、10 世紀から 11 世紀前半までの間におさまると考えたい。

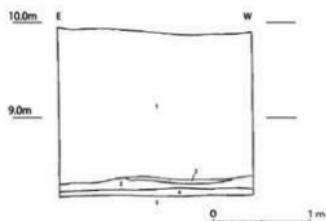


图 3-32 剖面图

3. まとめ

今回の調査は、既往の調査で確認された遺構群の延長にあり、第4次調査検出の遺構とも年代的に大きな齟齬はない。ただし今回の調査地で建物跡が検出されなかつた理由については、調査地が狭小なためか、居住域の範囲から外れたからか、理由の確定は困難である。

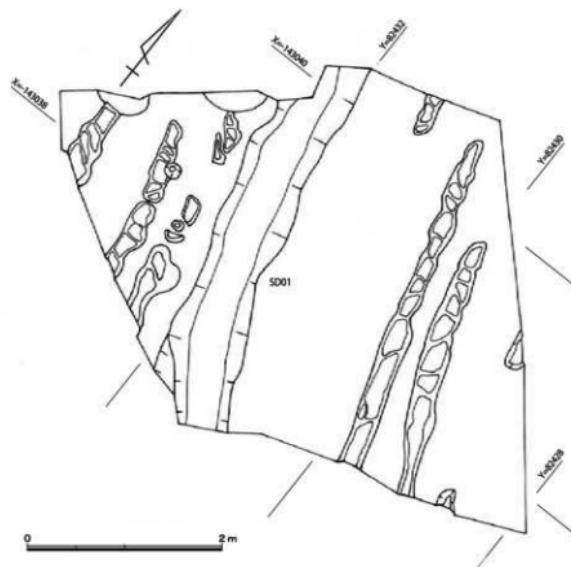


fig.79 調査区平面図



fig.80 西半遺構面全景（北から）

12. 日暮遺跡 第46次調査

1. はじめに

六甲山系から大阪湾にそそぐ生田川と都賀川に挟まれた扇状地の末端部に位置する日暮遺跡は、昭和61年度の第1次調査以降、数次にわたる調査が実施され、弥生時代から中世にかけての集落遺跡として周知されている。

今回の調査は共同住宅建設に伴うものであるが、敷地の大半が既存建物基礎による搅乱が著しく、調査対象区域は敷地の西端部のみとなった。

2. 調査の概要

調査地は、第1次調査（昭和61年度）地の南西側、第45次調査（平成27年度）地の北側に近接した箇所で、2面の遺構面が存在し、平安時代前期、古墳時代以前の遺構、中世、平安時代前期、古墳時代以前の遺物を確認した。

基本層序

盛土・搅乱土の下層に、数層の旧耕土状層位が存在し、遺物包含層と考えられる層位と続く。遺物包含層と考えられる層位は、上層より、濃褐色砂質土、暗灰褐色砂質土、暗褐色砂質土で、濃褐色砂質土、暗灰褐色砂質土が平安時代前期の遺物を含む層位、暗褐色砂質土が古墳時代以前の遺物を含み、第1遺構面の基盤層となる層位である。

暗褐色砂質土の下層については、直下の濃褐色粘土が第2遺構面基盤層で、調査区の一部においてさらに下層確認を実施したが、遺構面、遺物は確認されなかった。

第1遺構面

暗褐色砂質土上面において検出した遺構面〔標高12.2～12.3m〕で、小規模な土坑（SK101）〔径約60cm・深さ約20cm〕1基のみを確認した。上層の遺物包含層（濃褐色砂質土、暗灰褐色砂質土）の状況から、平安時代前期の遺構面と考えられるが、SK101埋土では遺物は確認されなかった。

第2遺構面

濃褐色粘土上面において検出した遺構面〔標高11.9～12.0m〕で、溝（SD201）〔幅約30cm・深さ約5cm〕、土坑（SK201）〔径約70cm・深さ約10cm〕落ち込み状遺構（SX201）〔深さ約20cm〕とピット6基〔径15～40cm・深さ5～25cm〕を確認した。

各遺構の埋土からは遺物が確認できず、遺物包含層にあたる暗褐色砂質土からも土師器と考



fig.81 調査地位置図 1:2,500

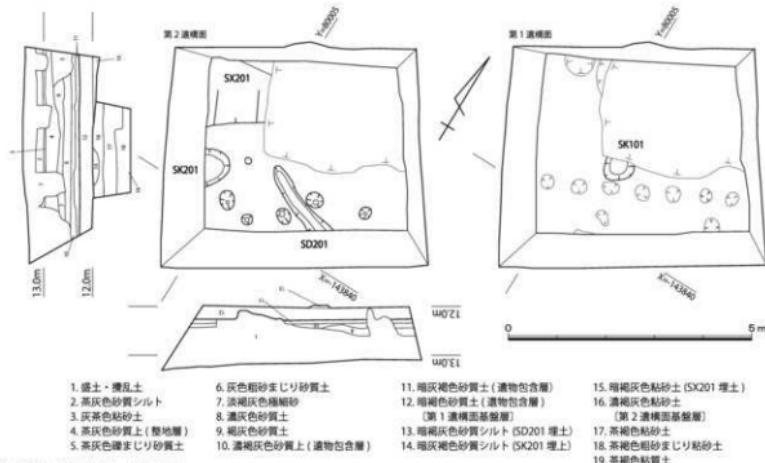


fig.82 調査区平・断面図

えられる土器小片を確認した程度で、時期の詳細は不明であるが、近接地調査の状況から、古墳時代もしくはそれ以前の遺構面の可能性が考えられる。

3.まとめ

東側近接地の第1次調査地においては、平安時代前期の掘立柱建物、古墳時代前期竪穴建物など、集落の中核部を確認できたが、その西側に位置する今回の調査地、南側に近接する第45次調査地については、調査規模も小さく、集落の一端を確認したにとどまる。しかし、集落のひろがりを明確にすることができたことは、日暮遺跡の全容解明に向けての一助となる成果と言えよう。



fig.83 第2遺構面全景（東から）

13. 熊内遺跡 第7次調査

1. はじめに

熊内遺跡は、JR新神戸駅の南東側に広がる扇状地の緩斜面上に位置する。これまでの調査で、特に弥生時代後期を中心とする遺構と遺物が確認されている。

今回の調査は、弥生時代後期の環濠集落が確認された第3次調査地の東側約150mの地点において、共同住宅建設に伴う工事によって埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を行った。

2. 調査の概要

基本層序

調査区をA～G区に分割し、工事影響深度まで掘削を行なった。F区西壁では、標高34.4m付近まで戦災焼土を含む擾乱および二次堆積層と考えられる灰色細砂が堆積する。それ以下は弥生土器と土師器を含む遺物包含層となり、暗灰色細砂、暗灰色細砂混シルト、暗灰色シルトと続く。

各層位において遺構検出を行ったところ、暗灰色シルト上面において落ち込み状遺構を2基検出した。暗灰色シルト中からも遺物が出土することから、さらに下層に遺構面が存在する可能性がある。



fig.84 調査地位置図 1:2,500

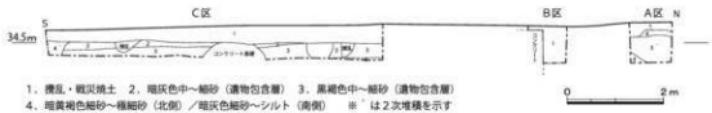


fig.85 土層断面図

検出遺構

落ち込み状遺構 2 基を検出した。

SX01 E 区中央で検出した落ち込みで、幅約 0.7m、深さ 0.1m を測る。検出面直上まで擾乱が及んでいたため、暗灰色シルトを 10 cm 程度削り込んだ段階で検出した。埋土は 1 ~ 3mm 大の風化花崗岩粒を多く含む暗灰色細砂と暗灰色細砂混シルトである。北西 - 南東方向に溝状に伸びるが、北西側は擾乱のため明確でない。

SX02 G 区西側で検出した落ち込みである。検出面直上まで擾乱が及んでおり、また工事影響深度内での掘削であるため、西側肩は確認できなかった。埋土は 1 ~ 3 mm 大の風化花崗岩粒を多く含む暗灰色細砂混シルトである。SX01 と SX02 は同一の遺構とも考えられるが、詳細は確認できなかった。

3.まとめ

今回の調査では、弥生時代後期の遺物包含層と落ち込み状遺構 2 基を検出した。また、工事影響深度である暗灰色シルト中にも遺物が含まれることから、さらに下層に遺構面が存在する可能性がある。今回の調査結果は、熊内遺跡の南東側への広がりを捉える上で重要といえよう。

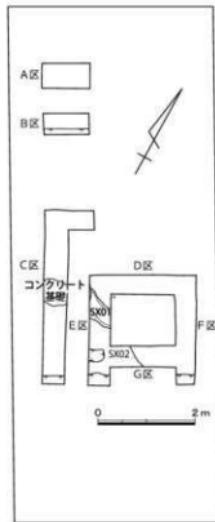


fig.86 調査区配置図



fig.87 F区全景 (南西から)

14. 旧ドレウェル邸（ラインの館） 第1次調査

1. はじめに

旧ドレウェル邸のある中央区北野町は神戸港を望む六甲山南麓の高位扇状地に位置し、明治期の開港以降、斜面地の田畠を造成し街区が形成され、多くの洋風建築（以下、異人館）が建てられた。旧ドレウェル邸は北野町のほぼ中央、敷地標高 56.0 m付近に立地する。

平成 28 年度から平成 30 年度にかけて主屋の解体修理および付属屋の改修工事が行われることになり、付属屋下層について発掘調査を実施することとなった。大幅な改修が必要となる付属屋では解体時に現基礎下で煉瓦積の構造物が確認され、古い段階の遺構の存在が想定された。

旧ドレウェル邸は大正 4（1915）年竣工の建物で、昭和 53 年に神戸市が購入、公開異人館として活用され今日に至る。フランス人のジョセフィーヌ・ローズ・ドレウェル（Josephine Rose Drewall）夫人（1857-1920）の住居として建築され、ドレウェル夫人の後は永らくドイツ人が居住し、昭和 53 年の購入時にはオーバーライン（兄）邸の名がみえる。

昭和 30 ~ 40 年代にかけて、北野町周辺の異人館には女性雑誌や NHK テレビドラマの影響により訪れる観光客が急増、これに対応するため当時の経済局観光課が「白い異人館」（現『萌黄の館』『小林家住宅 旧シャープ邸』）を借り上げて公開、その後、教育委員会も占有者の帰国により空き家となった旧ドレウェル邸を買い取り、改修を行い 11 月から公開を開始した。名称は公募により「ラインの館」となった。

旧ドレウェル邸は主屋と付属屋からなり、主屋は敷地のほぼ中央に南面し、1 階の解放されたベランダは異人館様式をよく残している。ベイ・ウインドは東側に 1 つと西側に 2 つあり、1 階に応接間、居間、食堂、2 階に寝室が配置されていた。同じく 2 階建ての付属屋は主屋の北東に取り付いており、主に使用人室として使われていた。

周辺は昭和 40 年代より市民が中心となって景観の保全が図られてきたが、昭和 55 年に文化財として「北野町山本通重要伝統的建造物群保存地区」に選定され、港町神戸を代表する景観とともに異人館の保全が図られている。現在は建築物のほか、門や塀・柵などの工作物、樹木など、伝建地区の構成要素は地区内で 140 件にのぼる。

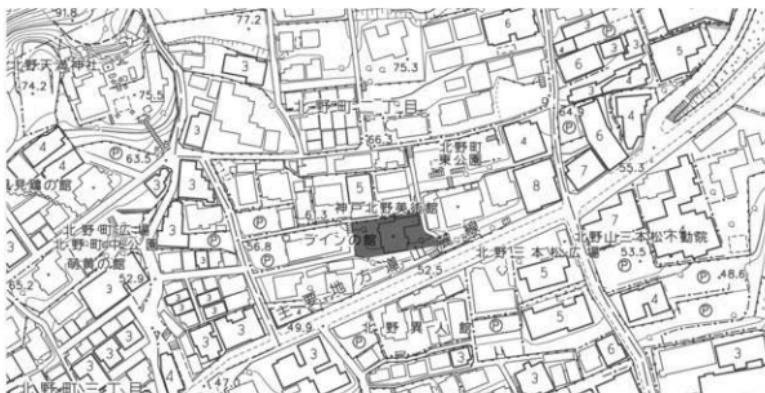


fig.88 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

旧ドレウェル邸に関する建築図面は昭和53年に神戸市が購入、公開に先立ち作成された現況図が最も古いものである。建築当初から購入に至るまでの建物の変遷が窺える資料は、図面をはじめ、写真や絵画なども知られていない。

公開時に市民トイレとなった付属屋は、主屋とは異なり大規模な補強工事は行われておらず、トイレの改修工事のほかは外構工事、上屋の外観維持が主な修理対象で、今までに地下の様子を確認できる状況には至らなかった。今回は上屋を解体して基礎改修が実施されることから、下層確認が必要となった。上屋を全解体し、床面スラブを除去した後、調査を実施した。

スラブを除去した床下には、基礎天端から約20cm下までは煉瓦、瓦、陶磁器類を含む灰色粘質土が堆積する。層面から層中に公開時に新設された市民トイレの配管類が据えられる。灰色粘質土の下層には、基礎天端から約40cm下に灰褐色粘質土が堆積し、上面で敷石や煉瓦敷き、カマドの痕跡などを検出した。これらは付属屋建築時の地表面と考えられる。層の厚さは約10cmで、その下層は黄褐色～黄色砂質土となり、付属屋部分の下は基本的に地山面と考えられる。旧使用人室から旧倉庫の範囲は地山面まで配管類による搅乱の影響が大きい。明治期の地図では、周辺は乾田や空地で表記されている。建築面は耕土の可能性を含む旧表土層面で、整地された様子は認められない。

以下、当初の付属屋建築面と考えられる灰褐色粘質土面で検出した遺構について記す。今回の調査では旧台所から旧階段室下層で敷石と煉瓦敷きを検出し、東端の旧倉庫下層ではカマドと便所と考えられる痕跡を検出した。建築当初の付属屋は主屋とは別棟であったと考えられる。旧通路下層では排水施設と考えられる煉瓦積の地下施設や上製・陶製の排水管を検出した。旧倉庫周りの現基礎の下位に粗い砂利混じりの脆弱なコンクリート基礎が見られた。当初の建物基礎と考えられるが、後補の基礎を除去することが難しく、詳細は把握できなかった。検出位置の表記は購入時に作成された現況図に記載された部屋の名称 (fig.90・92) を使用する (以下、「旧」省略)。

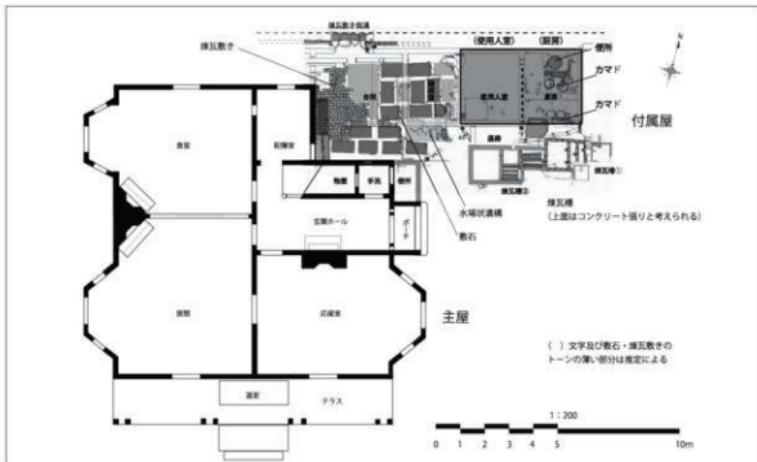


fig.89 建築当初の主屋と付属屋推定図

3. 検出遺構

敷石・煉瓦敷き遺構

台所東半から階段室の範囲で敷石・煉瓦敷きを検出した。敷石に使用された石は長辺約90cm、短辺約50cm、厚さ約10cmの花崗岩の平石である。現在も同サイズの石が主屋の南側の庭に敷かれている。調査では破片を含め14枚が出土した。使用人室の西端で筋状のモルタル痕を検出しており、この部分までが敷石の範囲と考えられる。後の基礎工事などで失われた部分があるが、破片の出土や目地の痕跡から当初は17枚の石が敷かれていたと推測される。

敷石は5列から成り、基本的に東西方向が長手となるが、北側から2列目のみ南北方向が長手である。東端の倉庫下層でカマド遺構を検出し、厨房があったと想定できることから主屋への通路を意識して敷かれたと考えられる。敷石の北側3列と南側2列では目地の仕様が異なり、北側は幅10~15cmの白色のコンクリート様の目地で、南側はモルタル下地の上に漆喰化粧を施している。敷石は北側から4列は主屋と並行して敷かれるが、主屋に最も近い敷石列のみ軸線が異なる。主屋の配膳室への通路の形状を強調したことなどが想像できる。この石列の東端の敷石の西側で目地に切れ目が生じている。後補とされる主屋の便所の北側に位置しており、石を敷き直したか、同じく後補の可能性がある。

台所の西半にあたる敷石と主屋基礎石との間は煉瓦敷きである。後の基礎工事や配管、会所を設ける際に失われた部分があるが、約100個の煉瓦が遺存していた。煉瓦は網代模様状に敷かれ、いずれも日本煉瓦株式会社製（以下、日本煉瓦製）と推定されるものである。

主屋配膳室への入口で長さ約1.0m、幅約30cm、厚さ約20cmの花崗岩の石を検出した。石の上面や主屋の基礎石にあたり痕があり、当初2段あった石段の下段踏石と考えられる。主屋の基礎石との間に土が詰められ、北側の側面にはモルタルが塗り込められる。石の北側の煉瓦敷きの上面3箇所に石を貼り付けたモルタル痕がある。検出した踏石の下には煉瓦敷きがなく、石が当初のままなら高低差が生じる。煉瓦敷きと主屋基礎石とのわずかな隙間に漆喰で凹みを付けて排水の便を図る、丁寧な細工が施されている。当初の踏石は長さが2.5mほどあり、検出した踏石は改変後の状態を示すものと推測される。

南から2列目の敷石列の西端で一辺25~30cmの石を検出した。配膳室入口に近く、屋根を架すための柱石と推測されるが、対応する石や主屋の柱材に痕跡は見出せない。この石から東に煉瓦が1列に並べられ、当初は敷石の東端まで並べられていたと推測される。柱石に近い部分は煉瓦が2段に重ねられていた。煉瓦列に使用された煉瓦は大阪窯業株式会社製（以下、大阪窯業製）で煉瓦敷きのものと異なり、敷石の目地の違いもここで区分される。階段室前の通路下層ではモルタル材や排水管の破片が出土し、鉛製の水道管が錯綜していた。モルタルが付着する石が出土しており、浅い流しか会所があり、煉瓦列が浅い溝で接続する水場のような設備があったと思われる。



fig.90 付属屋敷石・煉瓦敷き遺構と主屋の窓枠痕跡および基礎石の通気口（北から）

カマド遺構・便所遺構

東端の倉庫下層でカマド遺構、便所遺構を検出した。厨房や使用人部屋の一部と考えられる。倉庫西半と基礎を挟んだ西側の使用人室の下層は湧水がひどく、市民トイレの設置による搅乱の影響も大きく、床面の状況など不明な点が多い。

倉庫南壁に付随して、通路との境で2段積の煉瓦構造物を検出した。検出長は東西約70cmである。被熟痕、煤の付着があり、カマドの一部と考えられる。西側で長辺約1.0m、短辺約60cm、厚さ約10cmの花崗岩の平石1石を検出した。石の北辺に煉瓦7個が敷かれ、上に沓擦石がのる。煉瓦は日本煉瓦製である。平石は厨房入口の敷石と考えられるが、カマドの北側の床面に円形のモルタル痕が2基付随しており、そのうち西側の1基は敷石北側の煉瓦敷きの前で不明瞭になる。もともと2連の焚口をもつカマドが南壁に付隨し、入口の新設や基礎工事の際に改変されたと考えられる。カマドの周辺、北側の地面や通路下に炭の分布が認められたが、カマドからの掘き出しか、土間状の痕跡であるかは明らかでない。

倉庫の北端で径約60cm、深さ約40cmの丹波焼の鉢が出土した。当初は手水と考えていたが、

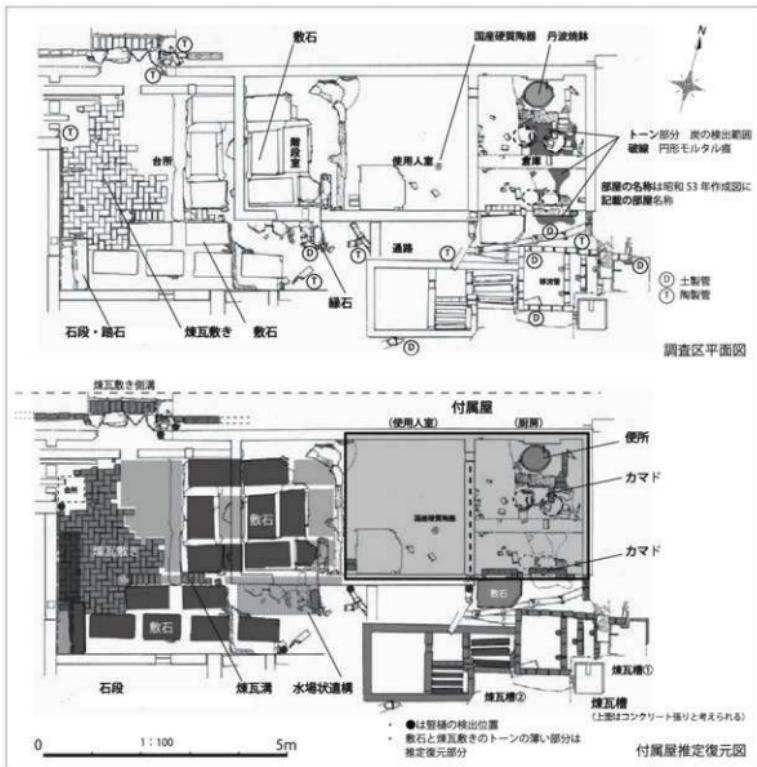


fig.91 調査区平面図および推定復元図

鉢の検出レベルを考えると便槽の可能性が高く、便槽に特有の白色の付着物もみられた。鉢の東側と南側に2~3段の煉瓦積があり、便所区画の基礎と考えられる。昭和53年段階の付属屋では建物外郭、東辺の外側に便所が設けられていた。

便所基礎と考えられる煉瓦積の南側でモルタル塊や煉瓦が出土し、下層で炭層を検出した。炭層は間層を挟み上下に2層あり、それぞれレンズ状に堆積している。炭層の中に径約40cmの円形の窪みを2箇所ずつ確認した。カマドの痕跡と考えられ、下層の窪みが埋没した後に煉瓦が積まれた箇所があり、改修された可能性がある。モルタルや煉瓦に顕著な被熱状況は認められない。下層の炭層は当初のカマドの火床の可能性のほか、防湿効果を得る目的も考えられる。南壁に付随したカマドが、入口の新設で中央に移動した可能性があるが明確ではない。

使用人室と倉庫下層の一部で炭層を確認したが、建築面は比較的軟弱である。煉瓦片が出土したが、床面を覆う量はない。主屋前の敷石・煉瓦敷き上面を基準とすると、倉庫南壁で検出した敷石とカマドの下段煉瓦の天端、中央で検出した上層炭層、北端で検出した鉢を囲む煉瓦下段が同じレベルである。周囲の古基礎、便所基礎天端、南カマド天端が煉瓦1枚分高く、床組の基礎と推測する。使用人室西端、敷石との境に煉瓦2個が並べられるが、東石などは確認していない。



fig.92 倉庫北半下層 遺構検出状況 (西から)



fig.93 通路下層 煉瓦槽①遺構検出状況 (西から)

排水施設（煉瓦槽）

付属屋南東隅の通路下層から現在の付属屋南辺の基礎下で煉瓦積の排水施設と考えられる地下施設（槽）を2基検出した。東側を煉瓦槽①、西側を煉瓦槽②とする。

煉瓦槽①は調査時に西側2/3を検出し、調査後の基礎解体時にさらに東側の状況が明らかになった。最終的に東西2.5m、南北1.3mを測る。深さ約0.9mまで掘削したが、底は検出していない。両端が幅0.8mの大きめの槽で、その間は幅0.2mの槽を2槽連ねた4槽構造で、中間槽2槽の煉瓦積の仕切り壁3基には陶製の移流（流入）管がある。仕切り壁の天端は七五、または半ますの煉瓦で溝を設け、余水吐のようになる。槽や仕切り壁の天端レベルは同じであるが、移流管底のレベルは西から東へ2cmずつ低くなっている。西の槽から東の槽に順に水を送り漏過を図る浄化槽と考えられる。西端の槽には西から内径18cmの土製の導水管が2本、南隅と北隅にそれぞれ差し込まれる。北端の管の流入元は階段室前あたり、南端の管は主屋のポーチ付近から伸びてくるようだが、主屋の基礎石周りのトレンチ調査部分でも確認しておらず、詳細は不明である。

西側の煉瓦槽②は東西3.1m、南北1.6mで、煉瓦天端から深さ1.2mまで掘削したが、底は検出していない。3槽構造で、東西の槽が大きく幅1.1m、中央の槽は幅60cmに仕切られる。中央の槽の南半、煉瓦天端から50cm下がったレベルに煉瓦で受けを設け、幅、厚さとも10cm

ほどの石を簀子状に架ける。東の槽にも同様の設備があり、石は天端から約1.0m下の深い位置にある。西側の大型の槽には見られなかった。仕切りの煉瓦壁に移流管ではなく、導水管についても不明である。煉瓦槽②は主屋から煉瓦槽①に伸びていたと考えられる土製管を壊して設置されており、煉瓦槽①に後出するものである。煉瓦槽①と同様、濾過槽と考えられるが、使用形態の詳細は不明である。付属屋の規模の拡大に伴い増設された可能性がある。屋敷地東側の路地の側溝底に建物からの排水口が1口確認できる。煉瓦槽からの排水があったと考えられる。

通路下層は盛土を除去した段階では鉄筋コンクリートで覆われていた。現在の付属屋の外郭が形成された時期が不明であるが、通路部分は屋内、あるいは屋外であってもコンクリート張りの土間状となっていた。東の煉瓦槽①の鉄蓋は検出時、すでにモルタルで埋められていたが、中央の煉瓦槽②には鉄蓋の枠が残り、蓋はモルタルで覆われていなかった。昭和53年段階には上部にコンクリート梁が架せられるが、鉄蓋を避けて煉瓦を嵌め込んで簡易な閉塞が行われていた。直近まで煉瓦槽②の幅で開口し、鉄蓋の開閉が行われていたと考えられる。

4. 出土遺物

出土遺物には皿や碗、タイルや排水溝蓋などの陶磁器類、瓦、その他に用途不明ながら金具などの金属製品があるが、床下の二次堆積や攪乱からの出土が多く、原位置を保つものは少ない。敷石と煉瓦、排水管に使用された土製・陶製管の一部が原位置を保つ状況であったが、使用人室下層の敷石下端レベルの建物建築面で硬質陶器が出土した。

国産硬質陶器 口径13.4cm、器高2.3cm、高台径2.0cmの皿で、白地に青色囲線のみが描かれる。囲線は内側口縁端部に太い囲線、その下にやや淡い色調の細囲線が描かれる。裏印は釉薬により鮮明でないが、中央にユニコーン、その上に「THE IRONSTONE CHINA」の文字、下に「ADSUMAYA (KI)」の文字が見える。明治末期、名古屋周辺で製作された初期の国産硬質陶器の可能性が高い。

煉瓦 煉瓦敷きに伴う煉瓦は日本煉瓦製と推定され、いずれも手抜き成形によるものである。刻印は社印を表す四弁花の中に責任印の数字が合わさったもので、傷みの激しいものも多かったが、検出面のほとんどの煉瓦に刻印を確認した。取り上げた煉瓦の裏面でも刻印を確認しており、基本的に両面に施しているのだろう。責任印はアラビア数字が多く、印を工具に釘止めした痕跡があり、「1・2・7・9・10・11・14・19・24・28」の刻印を確認した。押しの甘いもの、記号状のものがあるが、基本的に数字を正位に左右で釘で固定している。煉瓦の平、片面の縁に線状痕があり、成形時の下面と想定される。煉瓦敷き検出面でこの痕跡がみえるのは全体の1割に満たず、表面が意識され、敷き方には統一感が窺われる。

敷石に接する溝状の煉瓦列に使用された煉瓦は大阪窯業製、倉庫下層南壁際のカマドでは下段に日本煉瓦製、上段に大阪窯業製、排水施設の煉瓦槽に使用された煉瓦は観察できた範囲では日本煉瓦製、大阪窯業製のほか、岸和田煉瓦株式会社製のものがみられた。建築当初の遺構は基本的に日本煉瓦製を使用し、位置や改築の状況により後補として少量の大坂窯業製の煉瓦が使用されたと考えられる。現地で保存される煉瓦については調査中に十分な計測ができなかつたが、煉瓦サイズは長辺23.0cm、短辺11.0cm、厚さ6.0cmから大きく逸脱するものはない。

建築当初の遺構に使用される煉瓦の供給元の日本煉瓦株式会社は明治29年(1896)頃の創業で、工場は堺にあったとされる。神戸市内では御影郷古酒蔵群、神戸臨港鉄道架道橋台跡、旧神戸市電布引車庫跡などで出土例があり、明治末期から大正初期にかけてのものとされる。

5.まとめ

今回の調査での敷石・煉瓦敷き遺構の検出により、建築当初の主屋と付属屋は別棟であったことが判明した。敷地の北東部、主屋と付属屋の間に敷石・煉瓦敷きの通路を設け、同時に裏庭的な空間があったと想像できる。主屋の上屋解体の際、主屋の階段室付近の柱間に窓枠の痕跡が確認され、その下位の基礎石には通気口が確認されていた。棟続きの場合にその存在が疑問視されていたが、発掘調査により空間があったことが判明し、窓や通気口が存在する理由が解明できた点も大きな成果であった。

敷石や煉瓦敷きの範囲、現基礎下の脆弱な古いコンクリート基礎、会所や堅桶など建物の隅を示すもの、浄化槽の検出位置などから、建築当初の付属屋は使用人室と倉庫を合わせた東西5.0m、南北3.0m、広さ15mほどの規模であったと推測される。使用人室の下層では東石などの検出はなかったが、明治35年建築の「旧ハッサム家住宅」の2部屋からなる西付属屋の規模は東西7.2m、南北3.0m、21mほどで、西側が厨房、東側がコック部屋と称される。北野地区のほかの建物の付属屋についても面積20m²前後のものが多く、ほぼ同規模と考えられる。

付属屋がいつ頃主屋と一緒にいたのかは明らかでないが、当初の主屋と付属屋の配置が判明し、東端の厨房で調理を行い、敷石を通じて主屋に食事が運ばれたとイメージされることは、大正初期の異人館の配膳方法という当時の生活スタイルの一例を示しており、また浄化槽と考えられる煉瓦槽の検出は生活排水の処理方法という都市の衛生史を検討する上で重要な資料と考えられる。

調査で検出した敷石および煉瓦敷きは、工事に影響のない箇所は現状保存とし、復元可能なものについては工事後、旧に復し現地保存を図っている。煉瓦槽①と敷石・煉瓦敷き遺構の一部は床下点検坑からの見学が可能な状態としている。煉瓦や出土遺物は一部を「ラインの館展示室」で公開しているほか、調査・研究のため神戸市埋蔵文化財センターで保管している。

調査の結果から、今回の工事影響範囲外にも建築時の遺構が残るものと考えられ、屋敷地の範囲について埋蔵文化財の包蔵地指定を行なった。



fig.94 解体修理中の主屋と付属屋下層遺構検出状況
(北東から)

参考文献

- 『重要文化財旧トマス住宅保存修理工事報告書』神戸市 1985
- 『旧神戸外国人居留地道路発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2011
- 『御影難古酒藏群第4次発掘調査報告書』神戸市教育委員会 2007
- 『旧大阪府厅舎跡』公益財团法人大阪府文化財センター 2012

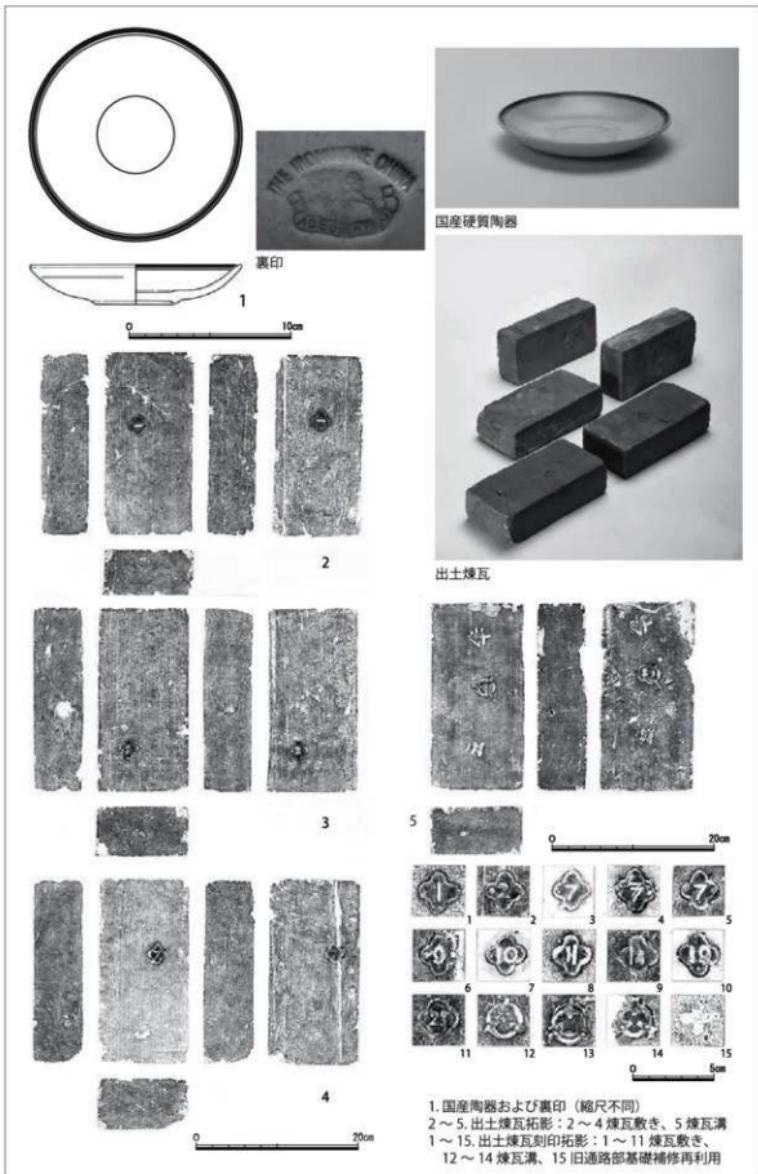


fig.95 出土遺物

15. 上沢遺跡 第61～64次調査

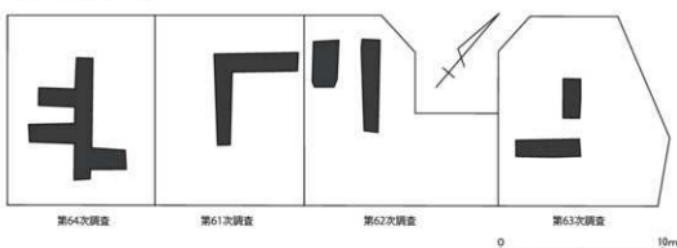
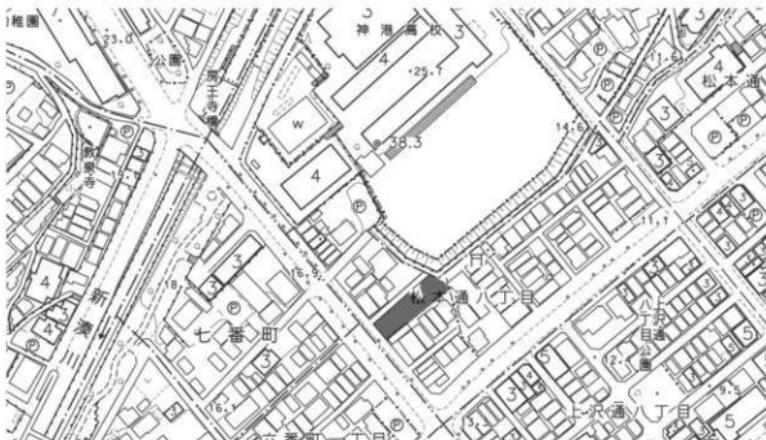
1. はじめに

上沢遺跡は兵庫区と長田区との区境付近の扇状地上に立地する集落遺跡である。これまでの調査では縄文時代晚期から中世の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査地周辺では、昭和63年度～平成元年度に、西側の市道房王寺線の街路築造工事に伴う調査において縄文時代晚期～弥生時代前期前半の土器の共伴やイネの花粉化石が検出され、神戸市内における稲作開始期に関連する重要な遺跡として認識されている。南東側では平成12年度の第37次調査や、平成14年度の市道松本線拡幅工事に伴う第50次調査で弥生時代後期、古墳時代中期、平安時代～中世の遺構・遺物が確認されている。また、山手幹線築造工事に伴う調査などで弥生時代後期から終末期にかけての多くの遺構・遺物の検出があり、当該期の地域の中心的な集落として位置づけられている。

今回の調査は個人住宅建設に伴い、埋蔵文化財に影響を及ぼす範囲についてトレンチによる調査を実施した。

本報告では、調査地の隣接する第61～64次調査についてまとめて掲載する。



2. 調査の概要

(第61次調査)

Iトレンチの西側に続く南北方向のIIトレンチでは、北側1.5m付近以南で南西方向へ落ち込む疊混じりの砂やシルト層の堆積を検出した。落ち際で幅0.25m、深さ0.1mの溝状遺構を1条検出した。埋土は暗灰色粘質土である。溝状遺構の西側の壁際でさらに西側に落ち込む様子を確認したが、遺物などは出土しておらず、全体の様相は明らかでない。西隣地の調査では、敷地の北側を中心に疊の堆積が確認されており、IIトレンチの南半を含む、幅5~6mほどの流路が北西から南東方向に貫流していた可能性がある。トレンチ南端に堆積する灰色砂疊から弥生土器の可能性のある破片が出土した。

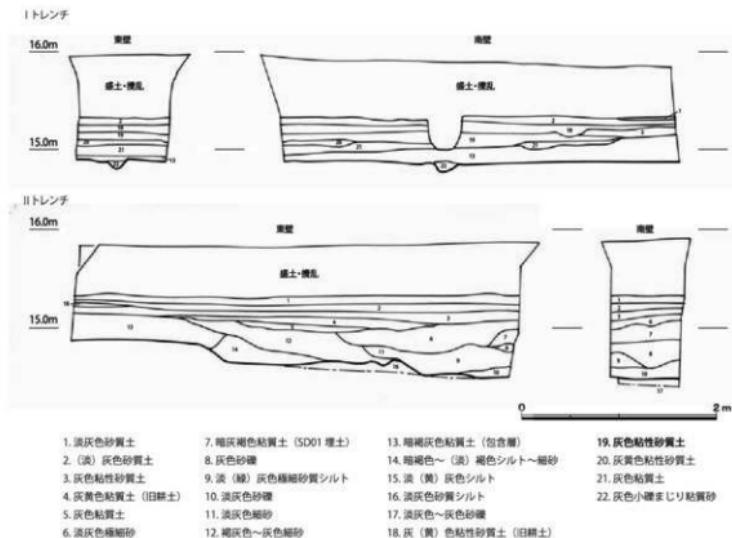


fig.98 土層断面図

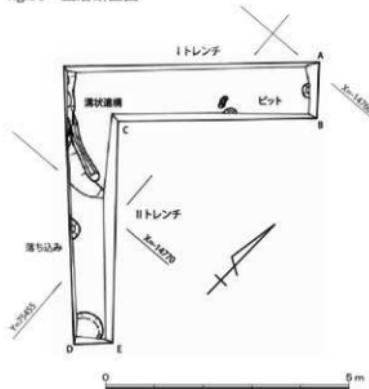


fig.99 調査区平面図



fig.100 IIトレンチ全景（北西から）

(第62次調査)

調査範囲内北側に2本のトレーニチを設定して調査を実施した。西側のIトレーニチで溝1条と土坑1基を検出した。

溝は南北方向のもので幅0.3m、深さは0.1mである。埋土は灰褐色砂質シルトで、遺物の出土はなかった。南東への下がり地形に沿う形となっているようである。

土坑は調査区の南側に続くが、径1.0mほどの円形を呈するものと考えられる。深さは約0.15mが遺存していた。埋土は暗灰褐色粘質土で、遺物の出土はなかったが、直上に堆積する灰褐色粘質土からの出土遺物はいずれも中世の須恵器片、土師器片である。

東のIIトレーニチでは盛土層以下に暗灰色粘質土、灰褐色砂質土、灰黄色砂質土、黄灰色砂質土、灰色砂質シルトが堆積し、いずれも中世～現代までの耕土層や床土化した土壤の堆積である。灰黄色砂質土～シルト層の地山面では遺構は確認できなかった。地山面直上の灰褐色粘質シルト層から中世の土師器と考えられる土器片がわずかに出土した。

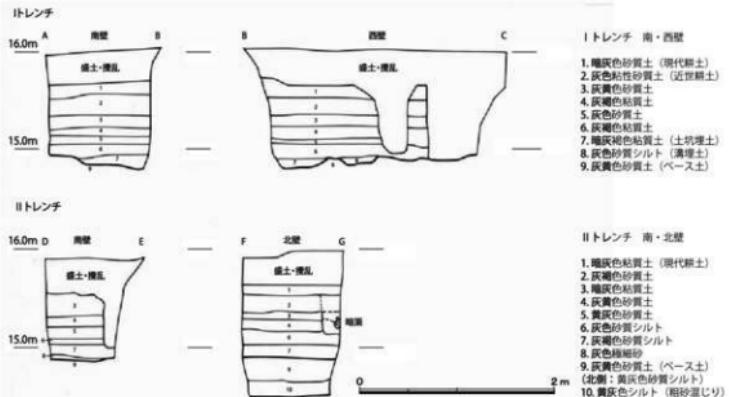


fig.101 土層断面図

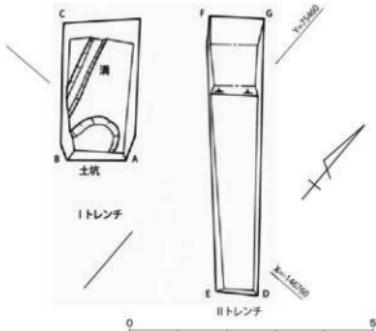


fig.102 調査区平面図



(第63次調査)

調査範囲内中央に2本のトレンチを設定して調査を実施した。

南のIトレンチでは、灰色砂質土～極細砂層の地山面が東向きに緩やかに下がる地形を確認し、直上の灰色砂質シルト層や上方の黄灰色砂質シルト層からは14～15世紀のものと考えられる土師器片、丹波焼片などが出土した。

北のIIトレンチでは顕著な遺構の検出はなかったが、南東方向へ下がる礫（灰褐色砂礫層：礫大3～5cm）の堆積を確認した。落ち込み埋没後に堆積した灰褐色極細砂や地山直上の土壤化層（淡灰色シルト質極細砂）より中世の土師器片などが出土した。

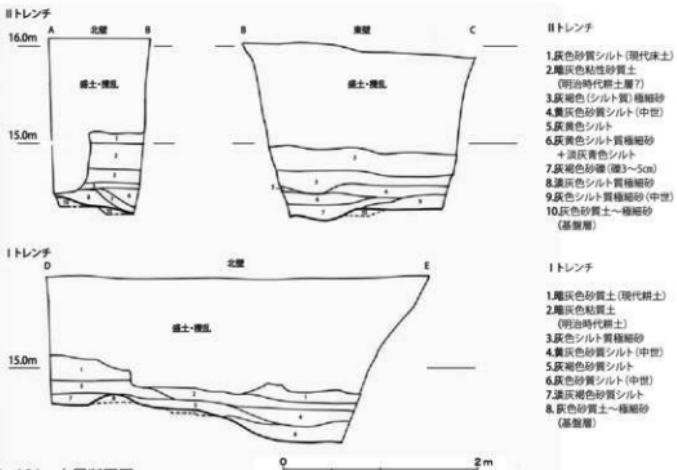


fig.104 土層断面図

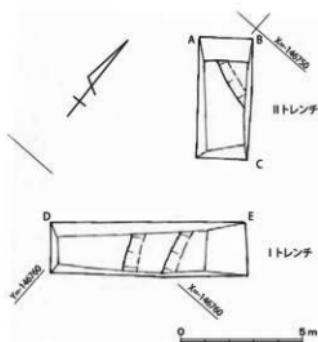


fig.105 調査区平面図



fig.106 Iトレンチ全景（南東から）

(第64次調査)

調査区内に4本のトレンチを設定した。盛土以下、3層の旧耕土層が堆積し、その下に暗褐色粘質土が堆積する。この上面が中世の遺構面のようだが、明確には遺構検出ができなかった。南東側に緩やかに傾斜する地形で、南端に堆積する暗灰色粘質土層からは中世の土器片が周囲よりややまとまって出土した。暗褐色粘質土の下層に土壤化した灰褐色シルト層が堆積し、その下の黄灰色砂質土の地山面で遺構を検出した。北側には灰色砂礫層が堆積しており、時期不明の洪水による堆積が露呈する状況である。

Iトレンチの中央でピット2基、南東部のIVトレンチで土坑状の落ち込み1基、西側の2つのトレンチで柱穴などピット11基を検出した。このうちSP01・03・06・09などは建物を構成する可能性のある柱穴と考えられるが、詳細は不明である。SP03は径約0.2m、深さ0.15mが遺存していた。柱材は残っていないが、土層断面の観察から径10cmほどの柱であったと推測される。柱穴の検出面で長さ20cmほどの扁平な石が出土した。掘形から土師器片が出土しており、中世の遺構と考えられる。

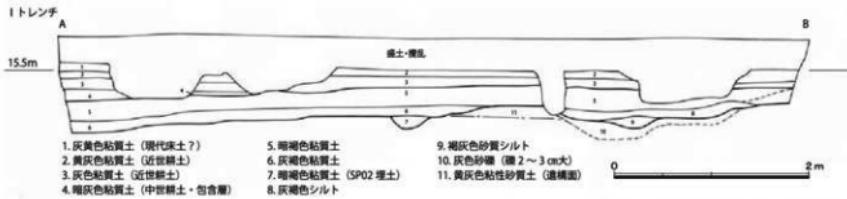


fig.107 土層断面図

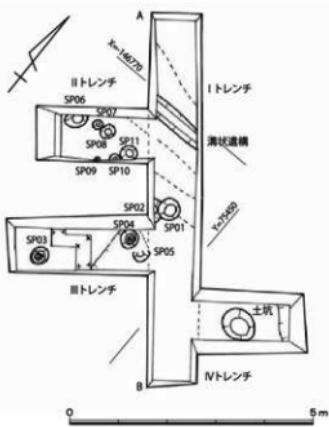


fig.108 調査区平面図



fig.109 Iトレンチ全景 (北から)

3. まとめ

第 61 次調査では、北側は地盤的にやや安定するものの、流路などの影響があったとみられ、遺構の残りはあまり良いものではなかった。洪水層、ならびに耕土層からは小片ではあるが中世の須恵器、土師器が出土しており、周辺に同時期の遺構が拓がっていたと推測される。

第 62 次調査では、調査地の北西側で比較的安定した地盤を確認し、溝や土坑を検出したが、その他の部分では遺構、遺物は確認できなかった。

第 63 次調査では、南東隣接地での第 37 次調査では 14 世紀後半～15 世紀前半期の遺構と考えられた SR01 および SR02 の落ち込みが検出されており、今回のトレンチはいずれも落ち込みの西側肩部付近に相当するものと考えられる。

第 64 次調査では、西側のトレンチを中心に柱穴などの遺構を検出した。市道房王寺線での調査成果と今回の 61～63 次の調査成果をあわせると、調査地西側に遺構や遺物の出土する範囲が拡がり、今回の調査地以東、また房王寺線以西はそれぞれ緩やかに下がる地形となるようで、徐々に遺構が希薄になる状況が追認できた。

16. 兵庫津遺跡 第72次調査

1. はじめに

兵庫津遺跡は、兵庫港一帯に広がる奈良時代から近世にかけての複合遺跡である。特に、神戸市中央卸売場跡地で実施された第62次調査では、兵庫城の石垣や堀、町屋群が検出され大きな注目を集めた。

今回の調査は、個人住宅建設により埋蔵文化財が影響を受ける範囲について発掘調査を行ったものである。調査地周辺では、南西約30mの地点で実施された第56次調査において、16世紀から19世紀にかけての遺構・遺物が確認されている。



fig.110 調査地位置図 1:2,500

2. 調査の概要

調査区を1・2区に分割して行なった。1区では遺構が確認されなかつたため、2区について詳述する。

基本層序

調査地の標高はおよそ 3.0m である。2 区南壁についてみると、深さ約 1m までは戦災焼土を含む擾乱である。それ以下では中世～近世の遺物包含層となり、遺構面を 3 面確認した。各遺構面の標高は、第 1 遺構面が 2.0m（黄白色シルト～濁灰色細砂互層上面）、第 2 遺構面が 1.8m（黄褐色極細砂上面）、第 3 遺構面が 1.5m（淡黄白色粗砂上面）を測る。

第1 頁

主として黄白色シルト～濁灰色細砂互層上面で検出した遺構面である。北東隅に焼土層が存在することから東半部は町屋にあたるものと考えられ、黄色系の整地層上面において長軸0.5～0.6m、深さ0.1～0.25mのビットを4基検出した。これに対し、西半部は灰色系のしまりのよい砂層が広がり、概ね北西～南東方向に溝状に伸びている(SD101として検出)。江戸時代後半頃の遺構面と考えられる。

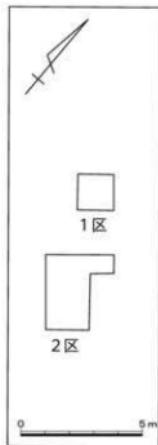


fig.111 調査区配置図

第2遺構面

主として黄褐色極細砂上面で検出した遺構面である。西半部で小規模なピット3基と土坑1基を検出した。第1遺構面と同様に東西で土層が異なり、西側の灰色砂の縁辺部にピットが分布するようである。江戸時代前半頃の遺構面と考えられる。

第3遺構面

淡黃白色粗砂上面で検出した遺構面で、直上には整地層と考えられる炭混じりの暗灰色中砂が堆積する。遺構は長軸0.5~1.0mの土坑や長軸0.2~0.4mのピット、礎石とみられる礫を検出した。出土遺物から中世末頃の遺構面と考えられる。

3.まとめ

今回の調査では、中世末～近世にかけての遺構面を3面検出した。調査地は元禄に描かれた兵庫津の絵図から復元される永沢町と三川口町の町境付近にあたり、今回検出した東西の土層の差異がこの町境を反映している可能性があるが、狭小な面積の調査であることから断定は避けたい。

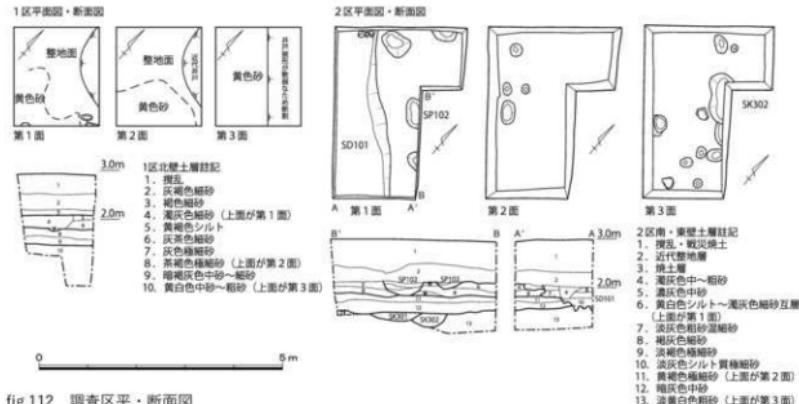


fig.112 調査区平・断面図



fig.113 第1遺構面全景（南から）

17. 兵庫津遺跡 第73次調査

1.はじめに

兵庫津遺跡は、風化の進んだ花崗岩により、崩落しやすい六甲山地から流出した土砂と海流によって大阪湾岸に発達した、湊岬と和田岬のふたつの砂嘴に挟まれた湾の臨海部に立地する、奈良時代～近世にかけての遺跡である。これまでに70回を超える発掘調査が実施されている。「兵庫津」は、古くは「大輪田泊」と呼ばれ、瀬戸内海航路の基幹港のひとつとして発展してきた。

平安時代末には平清盛による大修築を経て、日宋貿易の窓口として繁栄し、鎌倉時代には「兵庫（兵庫島）」と呼ばれるようになる。室町時代には日明貿易の窓口となるが、応仁・文明の乱（1467～1477年）により衰退し、国際港としての地位は堺に移ったとされる。

安土桃山時代に入り、池田恒興によって兵庫の町の中心に兵庫城が築かれた。平成24～26年度の第57・62次調査では、兵庫城の石垣・堀などが確認された。

元和元年（1615）5月大坂夏の陣で豊臣氏が滅亡後、「兵庫津」は江戸幕府領となる。西国街道は兵庫へと迂回するようになり、江戸時代初期には幕府の宿駅指定を受ける。その後「兵庫津」は尼崎藩領を経て、明和6年（1769）に再び幕府領となる。18世紀以降には、人口2万人を超える都市であり、幕末には、国内の他の重要港と共に兵庫（神戸）開港が行なわれた。明治時代に入ると兵庫勤番所（兵庫城跡）に初代の兵庫県庁が置かれた。

2. 調査の概要

今回の調査は事務所建設に伴うものである。調査地は東側が築島船入江、南側が兵庫城に近接する。南側に第35次調査地、新川運河を隔てた南東側の第57・62次調査地と近接する。工事計画により、埋蔵文化財へ建物基礎の掘削が及ぶ範囲について、発掘調査を実施した。調査は2分割して実施し、調査区は西半2/3を1区、東半3/1を2・3区とした。

基本土層

基本土層は、現地表下から0.8～1.1m前後の盛土層下に、第1遺構面が検出されるが、1区中央や2区中央などは、従前建物基礎などの攪乱の影響を大きく受けしており、一部に遺存する状況であった。第2遺構面は第1遺構面の0.2m前後に検出される。1区の北半と2区に



fig.114 調査地位置図 1:2,500

み検出され、調査区の南半には存在しなかった。一部に焼土や炭を伴う。第3遺構面は、現地表面から1.8 m前後で検出される。第3遺構面でも一部に焼土や炭が検出された。これより下層は工事に伴う土壤改良工事範囲より下位となるため、調査は実施していない。

第1遺構面

1区で土坑4基、ピット3基、北西～南東方向の疊敷を検出した。

土坑は1区の南半のみで検出した。直径0.7～1.0 m前後、検出面からの深さ0.25～0.4 mである。土師器、陶器、磁器、瓦などが出土している。

ピットは1区北半で2基、南半で1基を検出した。直径0.35～0.6 m、検出面からの深さ0.15 m前後であり、建物に伴うものであるかは不明である。1区北半のSP102からは、ほぼ完形の磁器皿、SP103からは京焼系陶器の急須が出土している。

1区南半および3区で疊敷を検出した。主軸はN77°Wで、2～5 cm前後の疊を敷いており、町割や町屋に伴うものである可能性があるが、詳細な性格は不明である。

第2遺構面

1区北半で石敷、遺構面の一部焼土や炭、礎石と考えられる石を検出した。

1区北半では、長さ1.25 m、幅0.6 mの長方形掘溝内に径0.1～0.15 m前後の石を充填した、石敷遺構を検出した。ただし、第2遺構面では焼土や炭を検出しているが、この石敷遺構は火を受けていないため、第2遺構面が火災を受けた後に、第1遺構面の形成までに時期差がある可能性がある。

第3遺構面

1区の北半で土師器皿が集中する地点と、1区南半では石の集積を検出した。また、全体に町屋などに伴うと考えられる整地面を検出した。



fig.115 調査区配置図

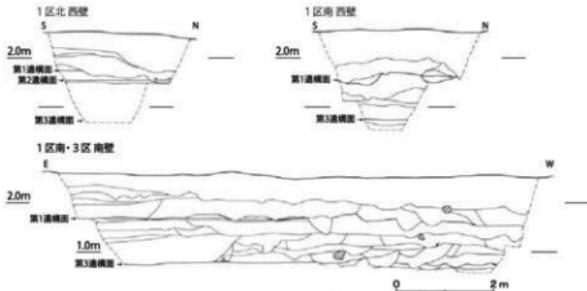


fig.116 土層断面図

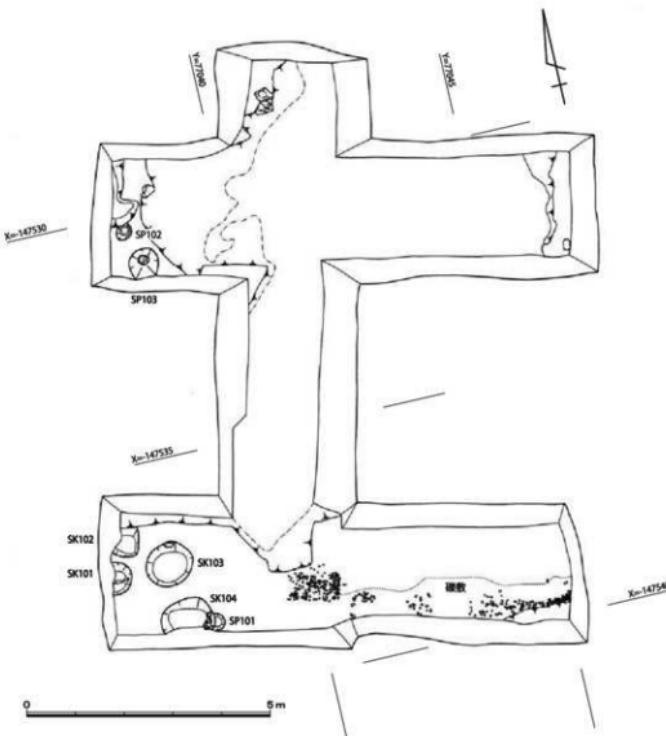


fig.117 第1遺構面平面図

3.まとめ

今回の調査では3面の遺構面を検出した。また、多くの遺物が出土したが、整理作業が完了していないため、詳細な時期の決定および遺構の性格については、これを持ちたい。

第1遺構面 後世の攪乱の影響を大きく受けしており、1区北端と南端、2区東端では、わずかに島状に遺存する状況であったため。しかし1区南半と3区における礫敷の検出は、調査地内における土地区分を示唆するものであると考えられる。また、1区南端は土坑を確認したが、整地面が確認されないため、町屋背後の空閑地である可能性がある。第1遺構面の時期については、SP102やSP103の出土遺物から概ね18世紀後半～19世紀初頭の時期が考えられる。

第2遺構面 第1遺構面と同様に、後世の攪乱の影響を大きく受けしており、1区北半と2区で検出することができた。焼土・炭を伴うため、火災を受けている可能性がある。第2遺構面は18世紀後半以前であると考えられる。

第3遺構面 調査区全体に整地面を検出したが、狭小な範囲であり、町割などを確認することはできなかった。第1・2遺構面との間に0.8m前後の盛土層があり、第3遺構面の廃絶後に大規模な造成が行なわれた可能性が考えられる。

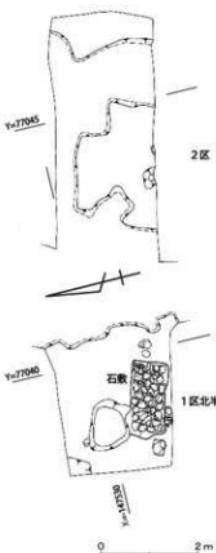


fig.118 第2遺構面平面図

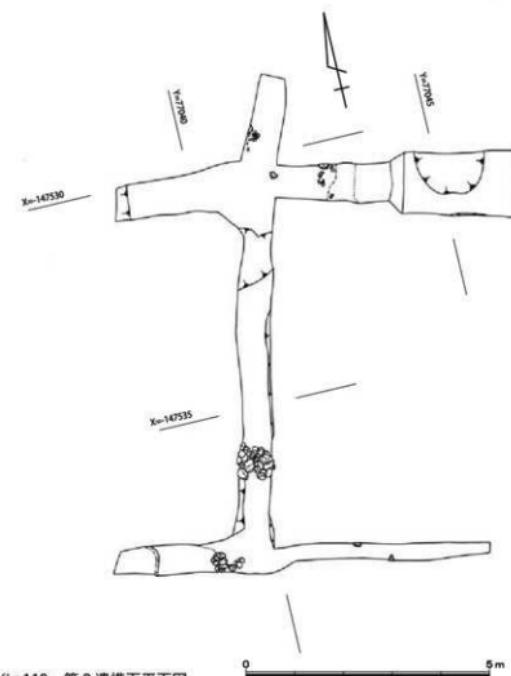


fig.119 第3遺構面平面図



fig.120 1区第3遺構面全景（南から）

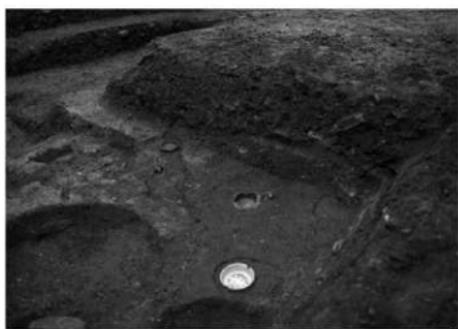


fig.121 1区北第1遺構面（北西から）

18. 岡場遺跡 第5次調査

1. はじめに

岡場遺跡は有野川左岸の低位河岸段丘上に位置している。過去に2度の発掘調査が実施されており、鎌倉時代頃の建物跡、溝跡などが確認されている。

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、調査は埋蔵文化財に影響のある、建物基礎部分について実施した。

2. 調査の概要

基本層序は表土層、平安時代中期から中世までの遺物を包含する、茶褐色砂質土、その下層が淡黄灰褐色シルト質極細砂層で、この上面で中世の遺構面を確認した。遺構面の標高は207.6m前後であり、東に向かってやや傾斜している。

調査区の北側約3分の1は近世以降の圃場造成で搅乱されていた。遺構面の残存する範囲において検出した遺構はピット4基であり、調査区の南西隅周辺に偏在していた。ピットは直径が12~20cm、遺構面からの深さ12~16cmを測る。ただしピット埋土からは遺物が出土していないため、時期について確実に言及し得ないが、遺物包含層から出土した遺物の時期である可能性が高い。



fig.122 調査地位置図 1:2,500

3.まとめ

今回の調査では平安時代中期から中世に属すると考えられる遺構・遺物が確認された。岡場遺跡では先述のとおり、既往の調査において中世の遺構・遺物が出土しているが、1次調査地は今回の調査地から見て南へ約800m、また2次調査地は北へ約600m離れており、居住域の分布は点的にしか判明していない。

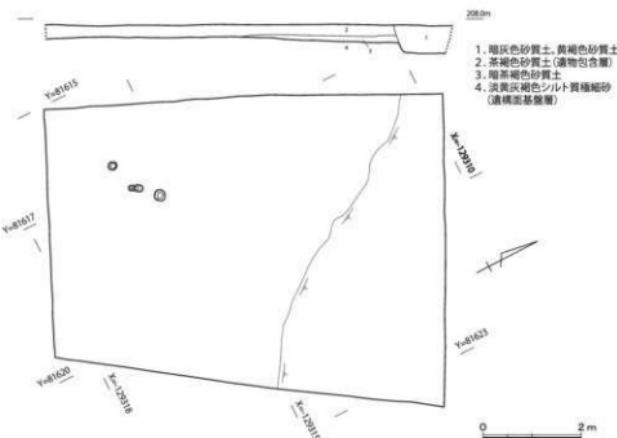


fig.123 調査区平・断面図



fig.124 完掘状況（北から）

19. 大田町遺跡 第20次・21次調査

1. はじめに

『延喜式』卷第二十八「諸国駅伝馬条」によれば、古代山陽道には 58 の駅家が設けられ、1,132 の駅馬が配されていたという。平城京から太宰府までを結ぶ高速路である古代山陽道は中国大陆の官道制に倣ったもので、30 里ごとに置かれる駅家が、城柵、山城と同様軍事的意味合いを持ち、朝廷による地方支配機関であることは、『延喜式』卷第二十八が兵部省関連の法令集であることからも明らかである。今回調査した大田町遺跡は、58 ある古代山陽道駅家のうちの「須磨駅家」と考えられている。また遺跡の南を通る主要地方道神戸明石線が、古代山陽道の経路をほぼ同じ位置で踏襲していると考えられている。須磨駅家は畿内最西端の駅家で、須磨駅家を過ぎると西行 15 キロ程度で播磨国明石駅家、すなわち畿外に到達する。平城京への復路は須磨から 16.5 キロ程度で芦屋駅家となり、それぞれ太寺庵寺付近、深江北町遺跡が比定地である。各々の駅間距離は式の定める 30 里にほぼのっとっており、これらの遺跡の分布からは、地勢に左右されて微差を含みながらも、大路にそって一定間隔に駅家が置かれていた様子がわかる。

なおかつ、駅家以外にも山陽道に面する官衙施設として、郡役所たる郡家が存在した。神戸市域では灘区郡家遺跡が菟原郡衙、兵庫区上沢遺跡、御蔵遺跡が雄伴郡衙、須磨区行幸町遺跡・天神町遺跡が須磨駅家あるいは「荒田」郡衙の可能性が指摘される官衙関連遺跡である。郡家と駅家は互いに指呼の距離にあり、相互補完的に結びつきながら、律令的支配を地方に浸透させる役割を担ったのである。

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建物基礎により遺跡が損壊する範囲を対象とした。

なお、本報告においては調査地の隣接する20次調査および21次調査をまとめて掲載する。



fig.125 調査地位置図 1:2,500

基本層序

今回の調査では、2時期2面の遺構を確認している。第1遺構面は、現況地盤より約80cm掘り下げた、標高10.8m前後地点で確認した。この第1遺構面を形成する黄灰色系粘土層は、奈良時代～平安時代および古墳時代の遺物を含む遺物包含層でもある。

この層の直下、標高10.8mで第2遺構面の基盤となる層を確認している。第2遺構面は無遺物の粘土層である。

第1遺構面以上の層は盛土および旧耕作土層だが、第1遺構面直上の耕作土については、奈良～平安時代の遺物を多く含み、それより新しい時代のものを含まない。

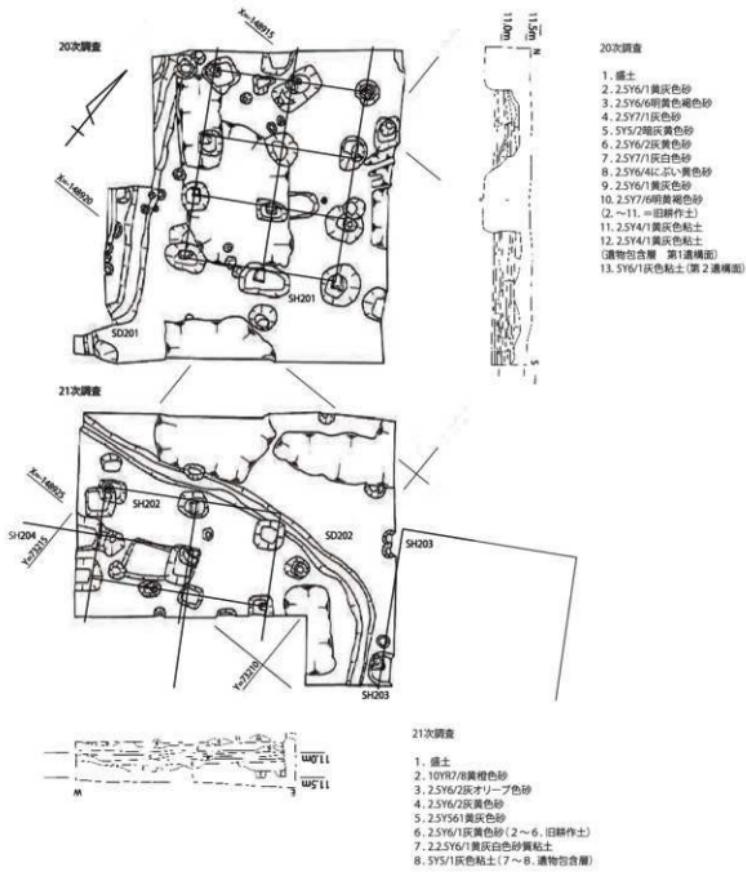


fig.126 調査区平・断面図

検出遺構

第1遺構面では、浅い耕作痕を数条検出したが、明瞭な遺構は存在しなかった。耕作された時期は第1遺構面直上層に含まれる土器に近いと推測され、古代の範疇に収まるものであろう。

第2遺構面では、掘立柱建物2棟(SH201・SH202)のほか、ピット、溝(SD201・SD202)を検出した。柱穴出土遺物から、掘立柱建物の時期は概ね奈良時代～平安時代と考えられるが、そのほかの遺構については出土遺物が細片のため時期の判断が困難である。ただし切り合ひ関係からSD202はSH202やそのほかのピットに先行するとわかる。

(第20次調査)

SH201 SH201は総柱掘立柱建物である。奈良文化財研究所による総柱建物分類のI類にある。建物の一部、東西2間(3.84m)、南北3間(3.2m)分を確認したもので、今回の検出範囲よりさらに東および北側にさらに広がると考えられるため、全体の規模、梁桁方向、正面などは不明である。今回検出したほぼすべての柱穴に礎板石が残されており、柱当りの検討に有効である。

①柱間寸法 柱間寸法は一部が等間隔でなく不規則である。以下便宜上東西方向の通りを北から「一」「二」「三」「四」通りとし、南北方向の通りを東から「い」「ろ」通りとして付した番付に従い記述する。「一」通りと「二」通り、「三」通りと「四」通りの柱間寸法は1.32m、「二」通りと「三」通りの間が1.20mとなる。1尺=30cmとした場合、「二」通りと「三」通りの間は4尺、その他は4.4尺となる。一方、「い」通りと「ろ」通り、「ろ」通りと「は」通りの間はともに1.6m=5.3尺と南北に比べ東西方向が広い柱間となっている。広い柱間を取る方向が桁行きである可能性も考えられるが、これについては建築学的の考察が必要である。

②柱掘形 12基検出した柱穴の掘形は、すべて壺掘り柱掘形である。平面形は隅丸方形のものと長方形のものが混在している。隅丸方形8基、長方形4基と、隅丸方形が主体的であることから見て、長方形掘形については、補修など何らかの要因で形状が崩れたものと推測される。隅丸方形の一辺は50cm～80cmと差はあるが、80cm規模のものが5基、50cm程度が3基で、ほぼ古代官衙における柱掘形の標準値に収まる。



fig.127 第20次調査 第2遺構面全景（北から）

検出面からの深さについても差はあるが概ね 50cm ~ 60cm に収まり、標高 10.40m 付近に掘形底面が来るよう意識して掘られたものとわかる。平面形の規模に比して深さはやや浅いが、これは検出面が造営当時の地表面より削平されている可能性が考えられる。掘形の断面形状は逆台形状の矩形のものと、そこからさらに柱位置だけを一段掘り下げたものとが混在する。

③基礎固め 12 基の柱穴のうち 7 基は、掘形基底部に沈下防止のための礎板石が確認された。石は一辺が 25cm ~ 30cm と大きく、柱はそれにみあう径であったと推測される。

④柱痕と柱筋 柱痕は掘形中央で確認できたものと、壁際によっているものと二種類がある。抜き取り痕状に見えるものはない。礎板石のあるもの、ないものを含め、柱のあたりが確認できるものはない。断面で観察できる柱痕および礎板石から復元できる柱筋は、ほぼ直線上に揃い、柱筋の通りは良い。柱痕の太さはほぼ 20cm で揃っており、礎板石の大きさも考慮すると、柱径は 20cm 前後で復元できると推測される。

⑤造営方位 真北位を採用しておらず、N30° W に振れる。

SD201 幅 50cm 深さ 10cm の南北方向の溝である。南端部で 90° に屈曲し、調査区外に続く。出土遺物が未検討のため詳細な時期は不明だが、ピットに切られており、建物より先行する可能性が高い。

(第 21 次調査)

SH202 SH202 は掘立柱建物である。建物の一部、東西 2 間 (3.6m)、南北 1 間 (1.85 m) 分を確認したものの、今回の検出範囲よりさらに西および南側にさらに広がると考えられるため、全体の規模、梁桁方向、正面などは不明である。

①柱間寸法 柱間寸法は等間隔でなく不規則である。以下便宜上南北列を東から「い」「ろ」「は」通、東西列を北から「1」「2」通りとして付した番付に従い記述する。「1」通りと「2」通りの柱間寸法は 1.8m、「い」通りと「ろ」通り、「ろ」通りと「は」通りの柱間寸法は 1.6m となる。1 尺 = 30cm とした場合、「1」通りと「2」通りの間は 6 尺、「い」通りと「ろ」通りの間は 5.3 尺となる。

広い柱間を取る方向が桁行きである可能性も考えられるが、これについては建築学的考察が



fig.128 第 21 次調査 第 2 遺構面全景 (北から)

必要である。

②柱掘形 検出した柱穴の掘形は、すべて壺掘り柱掘形である。平面形は隅丸方形で、一辺50cm程度と、古代官衙における柱掘形の標準より小ぶりである。検出面からの深さは概ね35cmに収まるが、これは検出面が造営当時の地表面より削平されている可能性が考えられる。また「1」の「ろ」柱は10cmと浅く束柱である可能性が高い。掘形の断面形状は逆台形状の矩形のものと、底からさらに柱位置だけが一段下がったものとが混在する。

③基礎固め 柱穴のうち、掘形基底部に沈下防止のための礎板石を据え置いたものは1基のみである。石は一辆が25cm～30cmである。

④柱痕と柱筋 柱痕は壁際に寄っているものを2基で確認した。抜き取り痕状に見えるものはない。礎板石のあるもの、ないものを含め柱のあたりが確認できるものはない。断面で観察できる柱痕および礎板石から復元できる柱筋は、やや不揃いで、柱筋の通りは悪い。

⑤造営方位 真北位を採用しておらず、N30°Wに振れる。

⑥補修跡 「1」の「は」の柱穴は、建て替えによる補修を行った痕跡があり、「1」の「は」－1を切る「1」の「は」－2の2基の柱穴が存在する。「1」の「は」－2は「1」の「は」－1よりやや浅く、南側に掘り直しを行ったものである。

SH203 調査区南東隅で、掘立柱建物の柱穴1基のみを確認した。遺構の構造上、建物の一部と判断して差し支えないと思われるが、組み合う柱穴は確認されていない。全体の規模、梁桁方向、正面などは不明である。図上ではSH202と同じ造営方位として想定したが、あくまで仮定である。今回の検出範囲より東および南側にさらに広がる。

①柱掘形 検出した柱穴の掘形は、壺掘り柱掘形である。平面形は隅丸方形で、一辆60cm以上である。検出面からの深さは概ね30cmに収まるが、これは検出面が造営当時の地表面より削平されている可能性が考えられる。掘形の断面形状は逆台形状の矩形である。

②基礎固めと柱痕 挖形基底部に沈下防止のため、一辆が25cm～30cmの礎板石を据え置いている。断面で柱痕は確認できなかった。

SD202 幅40cm深さ10cm程度の蛇行する東西方向の溝で、調査区外に続く。出土遺物が未検討のため詳細な時期は不明だが、SH202に切られており、建物に先行する。

3.まとめ

今回の調査で確認した掘立柱建物SH202は、①束柱構造の可能性がある②20次検出のSH201と同軸方向に並ぶが、柱筋は揃わない③出土遺物の示す時期は奈良時代～平安時代などの特徴がある。総柱でない構造をとり、建物の性格については絞りきれない。

古代官衙の多くのが真北方位をとることは周知であるが、SH201およびSH202は西に30°振れた斜め方位である。これは遺跡が古代山陽道の制約を受けているためである。

大田町遺跡における過去の調査によって、古代山陽道が主要地方道神戸明石線とほぼ同じ位置を同じ方向に走っていることはすでに明らかである。既往の調査で確認された山陽道側溝に対し直交する角度はN38°Wで、このことからN30°Wとは、古代官道に付随する施設としての造営方位であることがわかる。

野磨駅家、邑美駅家など、播磨国内で確認される駅家には、大路から迂回路を経て駅館院にアプローチする構造をとる例が複数報告されている。この場合、駅館院の造営方位は山陽道とは無関係になる。一方布施駅家駅館院は山陽道に対しほぼ直交する角度で築地屏を構え、門を開く。山崎駅家も同様である。このことから、駅家における造営方位は一定でなく、地勢に左

右され融通されることがわかる。平坦な地形上に位置する大田町遺跡では、とくに迂回路を設ける必要はなく、政庁施設が大路にほぼ直交する配置であったと推測される。

大田町遺跡では、過去の調査において、このN30°Wに軸を持つ掘立柱建物が複数確認されており、そのいずれもが9～10世紀の施設とされている。それに対し、8世紀以前の建物と判断されたものは、真北からN25°Wまで様々であり、唯一5次調査において、N30°W方向の掘立柱建物群に先行するN10°Wの掘立柱建物群が確認されている。このような建物時期と造営方位の関係は、駅家研究における駅館院の画期、藤原武智麻呂による外観整備以前と以後で駅家の造営方位が大きく異なるという指摘と整合する。また5次調査では、8世紀第2四半期末から第3四半期頃に製作年代を持つ重圓文軒平瓦が出土しており、これを神龜年間の正殿修造の当初瓦とすれば、N30°Wの建物群は瓦の時期を上限とし、9～10世紀に廃絶時期を持つと考えることも可能である。SH202の建造年代については、出土遺物が整理途上であるため、詳細な年代は今のところ不明であるが、造営方向から判断する限り、駅家としては8世紀前半の整備以降のものである可能性が高い。今後出土遺物の整理を進め、上記建物群との年代的整合性について注意深く調査する必要がある。

以上のような調査結果から文献史料を欠く現状においても、3次調査出土の「荒田郡」刻書と合わせて、大田町遺跡が古代山陽道関連官衙遺跡であるという判断は妥当であろう。さらに踏み込んで須磨駅家比定地としての妥当性については、出土瓦の示す時期と、文献の示す駅家の瓦葺化の時期に整合性があり、一定の妥当性を有すると思われる。ちなみに大田町遺跡と並んで須磨駅家候補とされる天神町遺跡で出土する瓦の製作年代は、8世紀第3四半期から第4四半期を示す。また芦屋駅家から16.5km程度という駅間距離も、地理学的に見て妥当であろう。

本遺跡における今後の課題は、造営方位、規模、土木工法といった視点から建物群を類型化し、官衙遺構の時期的変遷を把握することであろう。同時に出土遺物の示す時期により、類型化の妥当性をクロスチェックする作業も必要である。さらに同様の作業を行幸町・天神町両遺跡においても行い、両者を比較検討することによって、当該地域における官衙の構造、変遷、傾向といったものをより鮮明化していくことが求められる。

表13 大田町遺跡既往調査検出の建物造営方位

次数	掘立柱建物			瓦	古代 山陽道 側溝	その他溝	備考
	8c前半	8c-9c	9-10c				
1	1棟(36°)						
2		5棟(0°～30°)	8棟(30°)	●	●		
3	1棟(15°)	1棟(25°)			●		
5		5棟(10°)	3棟(30°)	●(8c前半)	●	●(10°)	山陽道側溝の埋没時期 = 9世紀後半 30°の総柱建物1棟・時期不明
15	※ 20・21次 = 30°が2棟 (角度は北から西へ振った角度)						

20. 南別府遺跡 第7次調査

1. はじめに

南別府遺跡は、神戸市西区を南西方向に流れる伊川の中流域東岸に所在する。これまでに6次にわたる発掘調査が実施されており、今回が第7次調査となる。当遺跡では平安時代・古墳時代中期・古墳時代初頭・弥生時代と多岐にわたる時代の遺構が確認されているが、今回調査地付近では古墳時時代以前の遺構や、3次調査で奈良時代～平安時代の遺構を中心に分布する傾向がある。

現時点では明確な建物遺構の確認には至っていないが、奈良時代～平安時代の墨書き土器や瓦といった官衙・寺院系遺跡に特有な遺物を伴う点に特徴がある。

一方古墳時代の遺構が確認された調査では、弥生時代後期後半～庄内式併行期にまたがる遺物を伴う例が多い。当遺跡の北方 1.5km 地点の伊川西岸には天王山古墳群が存在するが、そのうち天王山 4 号墳は明石川流域の堅田神社境内 1 号墳と並んで、明石川流域最古の古墳とされ、築造年代が南別府遺跡の集落活動時期とほぼ一致する。二つの古墳はともに 3 世紀前半の築造だが、古墳を構成する諸要素は在地的で、弥生墳丘墓の延長上に発展した点に特徴がある。同じ時期神戸市東部に造られる西求女塚古墳（灘区）が、大和に拠点を置く王権の墓制にのっとった中央型の古墳であることと比較すると、当該地域の発生期古墳の在地性はより鮮明であり、前代以来の土着集団が古墳時代的に転換し、造墓したと理解できる。

神戸市西部では、五色塚古墳築造以前の段階においては、明石川流域よりも、天王山古墳群から白水瓢塚古墳へと展開する伊川流域の古墳に、埴輪の突帯条数や墳形的に見て、より先進性で高度な政治性が認められるが、現時点でこれらの古墳の造墓集団の本貫地や権力範囲は特定されていない。古墳周辺の集落として挙げられる明石川流域の新方遺跡、玉津田中遺跡、伊川流域の白水遺跡などは、個別自立的に存在したわけではなく、相互に有機的に関係しつつ、4世紀後半に五色塚古墳の造墓主体の膝下で地縁帯としてひとつに集約され、やがて5世紀以降の中央による集団再編の枠組みに組み込まれて、吉田王塚古墳を生み出していくのであろう。南別府遺跡の集落も、そういう集団構成の一翼を担ったものと考えられる。



fig.129 調査地位置図 1:2 500

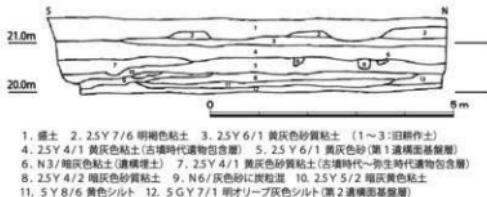


fig.130 土層断面図

2. 調査の概要

今回の調査は個人住宅建設に伴うもので、建物基礎により遺跡が損壊する範囲を対象とした。

基本層序

今回の調査では、2時期2面の遺構を確認している。第1遺構面は、弥生時代末から古墳時代初頭の遺構面で、現況地盤より約80cm掘り下がった、標高20.4m前後地点で確認した。この第1遺構面を形成する層には弥生時代中期の遺物が含まれる。

この層の下位、標高19.6m前後に第2遺構面の基盤となる層が存在する。無遺物の粘土層で、遺構面の時期は弥生時代中期である。

第1遺構面直上層は弥生時代末~古墳時代中期までの遺物包含層だが、直下の遺構面では古墳時代中期の遺構は認められず、すべて弥生時代後期後半(VI様式)から庄内併行期に収まる。

この第1遺構面基盤層は南に向かって緩やかに傾斜するほか、調査区南東側では、一部河川性の粗砂礫層があり、第1遺構面形成の前段階として、この場所を南流する河川が存在し、河川の埋没後に当該時期の集落化がなされたと分かる。

なお、第1、第2遺構面基盤層、および両者の間層をなす2~3層の堆積層は水成堆積物からなり、おそらくあたり一帯広範囲に、これと同様の伊川由来の沖積土壤が広がると推測される。第2遺構面の段階では、前述の旧河川は流れを維持していたとみられ、河道堆積物はこの沖積土壤を南北に貫いている。この旧河川付近で、急速に遺物出土量が少なくなることから、弥生時代の段階では、この旧河川が集落の東限であったと考えられる。

検出遺構

第1遺構面では、方形の竪穴建物1棟のほか、溝1条、土坑3基、ピット21基等を確認した。これらは弥生時代VI様式から庄内併行期の土器を伴う。

第1遺構面

方形竪穴建物(SB101) 南北6.3m、東西6.5mの、四周に周壁溝がめぐる方形竪穴建物である。一部未調査範囲を含むため正確な柱配置が不明だが、4ないし6本の主柱穴を持つ。炉跡は未確認である。西側周壁溝から建物内側へ約1mの位置に、周壁溝と併行する浅い溝が一部確認されているが、未調査範囲に統いており、壁の修築によるものか間仕切り的な施設であるのか、判然としない。

①周壁溝 周壁溝は幅約30cm程度で、北東角が一部途切れるものの、検出した範囲ではほぼ全周している。壁高は北側が35cmと高く、南、東西側は24cm程度とやや低い。南下りの緩斜面上に水平な床面を造成したため、北壁が高くなったものである。溝内からは弥生時代後期後半(VI様式)の土器とともに勾玉1点が北東角部分で出土した。

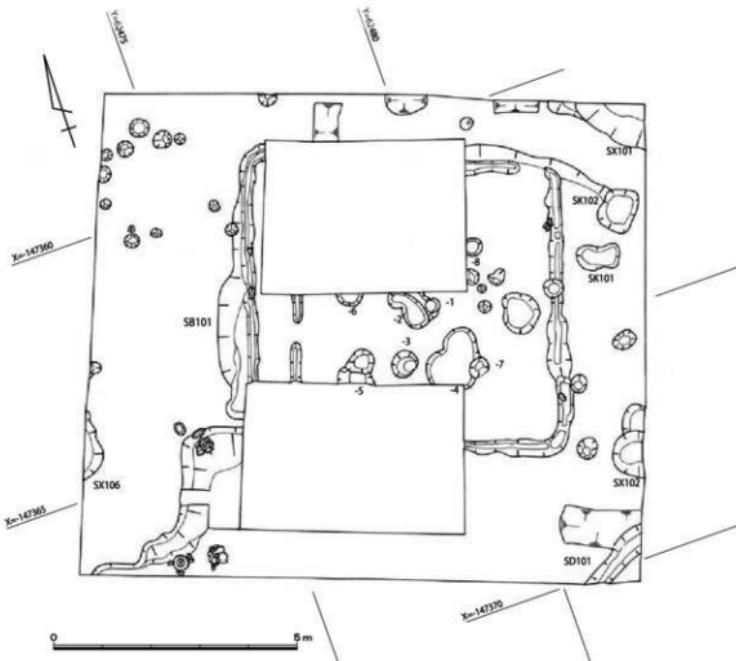


fig.131 第1遺構面平面図

②主柱穴 構造上主柱穴の可能性があるものは、図に示した3、5、7、8である。掘形の平面形はすべて円形である。直径は30cm～50cm、深さは25～70cmと個体差がある。断面から3、5は柱当りが判明しており、柱当り痕から推定される柱太さは25cm程度である。

これらから復元される主柱は、柱間寸法から判断して、すべてが同時に存在していたとは考えがたい。たとえば3と5間は1m程度と狭く、小屋組みの支持機能上併存する意味が見いだせない。4本の主柱を基本とする構造の家屋で、補修等によって、4基以上の主柱穴が見いだされたものと考えられる。

柱間寸法2.6mで7～8が対置すると仮定した場合、南の5～7通りに対応する柱列として、8の西側に同じ寸法で3、5と対置する柱通りの存在が予期されるが、調査区外のため不明である。

③基礎固め 柱穴は基礎固めを施さない。

溝(SD101) 調査区南東角で、幅50cm、深さ20cm程度の溝の一部を確認した。大半が調査区外のため詳細は不明である。

落ち込み 突穴建物の南西側に、落ち込み内に土器が集中して出土する部分が存在した。遺構として完結した平面形は見いだせず、南に下がる地形の転換点付近に土器だまり状に堆積したもので、人為的な遺構ではないと判断した。堆積していた土器は弥生時代後期後半(VI様式)～庄内式併行期のものである。SB101に伴う廃棄物の可能性がある。

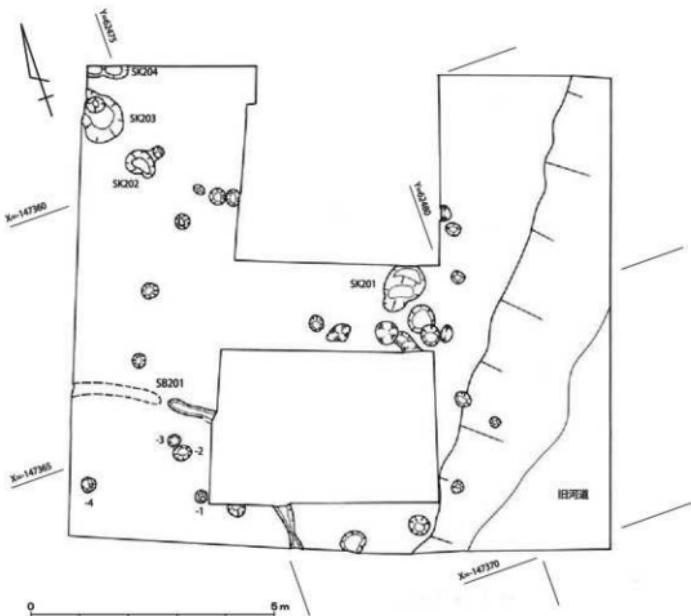


fig.132 第2遺構面平面図

土坑 複数の土坑を確認しているが、いずれも不定形で土器の出土量も少なく、機能は不明である。

第2遺構面

第1遺構面より約55cm下位で第2遺構面を確認した。この面では、円形竪穴建物の可能性がある遺構のほか、土坑4基、ピット14基と、集落の東限となる旧河道を一部検出している。

旧河道 調査区東側に、方眼北から東へ40度振れる方角で貫流する。埋土は粗い砂礫層からなり、急な水流による短時間の埋没状況を示すものの、工事影響深度の関係から、川底まで掘削は及んでいない。したがって幅、深さとも不明である。埋土から遺物は出土せず、埋没時期は不明だが、第2遺構面の基盤層の上に埋土が一部覆うように堆積しており、第2遺構面の時期には河川として開口していたと考える。

河岸にはピットが点在するが、断面観察では浅く単層の不定形なものと20cm程度の深さで複層の埋土堆積が認められるものとに分けられ、あるいは人為的なピットと自然作用によって形成されたものとの違いを示す可能性がある。

円形竪穴建物の可能性がある遺構（SB201）

①周壁溝 調査区南西角に、ゆるく円弧を描く溝が検出されている。西側の一部は不明瞭で検出し得なかったが、調査区壁面の土層断面観察により存在を確認している。破線で復元表記した。溝の規模は幅20cm程度、深さ10cm程度だが、この円弧以南で検出されたピット1、および4は、堅牢な基礎固めを持つ構造をとっている。これらを主柱穴と考えるならば、溝は周

壁溝と判断するのが妥当であろう。この溝以南で弥生時代中期の土器が集中的に出土していることとも合わせて、円形竪穴建物の可能性を指摘しておきたい。

②主柱穴と基礎固め 図に示した1、4を主柱穴と推定する。掘形はいずれも円形である。直径は30cm、深さは40cm程度である。5~10cm程度の栗石を用いた根石構造の基礎固めを施している。根石は厚さ15cm~20cmとかなり堅牢に敷き詰められている。1の根石天端高は標高19.7mに対し、4は19.85mと揃わず、掘形底面レベルの調整機能は持たないと考えられる。不等沈下防止を目的としたものであろう。

柱当りは不明だが、芯々の場合で1~4の柱間寸法は2.4m程度と推定される。主柱穴を4本で想定した場合、建物床面の直径は6m程度である。

3.まとめ

以上、今回の調査では、2時期2面の建物を伴う遺構面を確認した。遺構面は上位が弥生時代末から古墳時代初頭、下位が弥生時代中期の遺構面である。

本調査区の西で行われた、第5次調査において、弥生時代末から古墳時代初頭の遺構面と同一面上で、弥生時代中期の土器を出土した溝が1条確認された例があるが、今回初めて、南別府遺跡内で遺構面として弥生時代中期の層を把握した。

なおかつ、当該時期の集落が、河川によって範囲的な制限を受けている可能性の高いことも明らかとなった。周辺の試掘状況も鑑みた場合、今回検出した旧河道を境に以東では、弥生時代中期の遺構密度は極端に下がることが予見される。弥生時代中期の集落の範囲は、今回調査地を東限として、伊川寄りの方向に広がるのである。

南への広がりに関しては、最南端の3次調査で、標高19.2mで奈良時代~平安時代の遺構面が確認され、それより下層については無遺物層と報告されている。これを南限と仮定した場合、弥生時代中期における集落の範囲はかなり限定的と言える。

第4次および第5次調査では、いずれも標高20.5m前後で第1遺構面を検出している。一見今回調査の第1遺構面の標高と整合性があるが、これらの調査で第1遺構面として報告されているのは古墳時代中期の遺構面で、古墳時代初頭から弥生時代末の遺構面はその下位、標高19.5m前後で確認されており、今回調査の弥生中期遺構面の標高とほぼ同レベルなのである。単純に復元すれば、古墳時代の段階では、今回調査地が標高的に最も高く、西、南に向かって下がる微地形と捉えるべきであるが、調査例が少ないため、集落全体の地形に関しては、今後も継続調査が必要な段階である。

遺物については、今回の調査で弥生時代中期の土器は出土量全体の1割に満たないが、中期後半に特徴的な四線文土器を全く見ないことから、消極的ながら第2遺構面の時期は弥生中期前半の可能性が指摘できる。一方弥生時代末から古墳時代初頭の土器は残存状態も良好かつ多量で、弥生VI様式から庄内式併行期と明瞭に判定できる。

これらの調査成果に周辺調査の結果も含めて考えると、南別府における集落形成の始期は弥生中期に求められるが、未だ活動は限定的・小規模で、弥生時代末に至って集落が拡大、その後は安定的に古墳時代中期まで継続するという沿革が想定できる。この現象が、冒頭に述べた伊川流域の造墓活動と無縁であろうはずではなく、今後は弥生時代末から古墳時代初頭における集落拡大の規模がどの程度のものであったのか、直接的に造墓主体となり得る集団規模であったのかなどが、当該遺跡において明らかにすべき課題となろう。



fig.133 第1遺構面 SB101



fig.134 第1遺構面 竪穴建物南側土器溜まり土器検出状況

21. 出合遺跡（出合城跡） 第52次調査

1. はじめに

出合遺跡は、播磨灘へと流れる明石川と櫛谷川の合流地点付近の西岸、標高10～20mの沖積地および西方の印南野台地の縁辺部にあたる、標高30m前後の段丘上に立地する旧石器時代～中世の遺跡である。昭和52年度の第1次調査以来、これまでに50回を超す発掘調査が実施されている。

畿内と瀬戸内地域との結節点である明石川とその支流域には、中世～近世初頭に数多くの城郭が築かれ、玉津町出合に所在する宗賢神社付近には、下津橋城（出合城）が築かれたとされる。下津橋城は平野部に築かれた中世の居館と考えられる。この時代の史料が確認されておらず築城や廃城時期などは不明であるが、江戸時代の地誌『播磨鑑』からは戦国時代、明石氏との関連が窺われる。昭和20年代に撮影された航空写真や昭和30年代に測量の地形図には、宗賢神社の北側から南東側にかけて土塁が巡り、周囲の水田に堀状の地形が残されていることが見て取れる。現在、宗賢神社の北側から東側に、高さ約6mの土塁が残されているが、南東側は失われて出合市民公園となっている。

出合市民公園の南側で平成19年度に実施された第38次調査では、東西方向の堀2条が検出され、居館の南限が公園南側の道路であり、居館は一辺90mの方形を呈する可能性が判明した。ただし、その外側にさらに堀が巡ると推定される、南側の状況についての詳細は分かっていない。

2. 調査の概要

今回の調査は、宅地造成に伴うものである。調査地は平成16年度に実施した第32次調査地の北側、平成19年度の第38次調査地の北西側に接する。工事計画により掘削が及ぶ範囲について発掘調査を実施した。

調査は、西側の擁壁設置部分を1区、東側の管路敷設部分を2区として実施した。

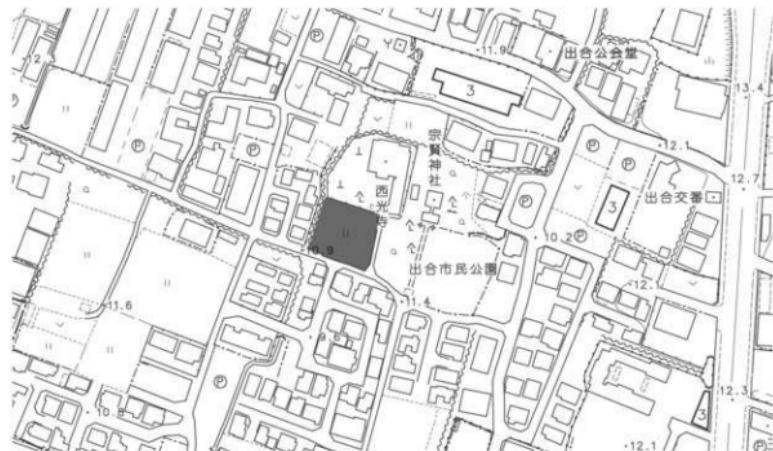


fig.135 調査位置図 1:2,500



fig.136 遺構平面図



fig.137 2-1区全景（南から）

基本層序

調査地は、近年まで耕地として利用されており、耕土・床土層の下に複数の旧耕土・旧床土層が存在し、その下層に基盤層である黄灰色粘質土などの土層が存在する。1区ではこれに切り込む近世の造成層があり、2区ではこの黄灰色粘質土上面で遺構が検出された。

現地表面から遺構面までの深さは、1区北側で0.7m前後、南側が0.8m前後である。また、2区北側では0.35m前後、南側で0.65m前後と、調査地の西側が低くなるものと考えられる。

1区検出遺構

調査区中央に幅18m前後の範囲で、落ち込みが確認され、埋土には近世の遺物が多く含まれていた。この落ち込みは深く続くため完掘することはできなかったが、断面の結果、現地表から1.3m以上の深度で下がることが判明した。

2区検出遺構

東西方向の溝2条、ピット7基を検出した。

2-1区南半で検出した溝(SD01)は、幅1.85m前後、検出面からの深さは0.3m前後を測る。また、2-6区北半で検出した溝(SD02)は、幅1.2m前後、検出面からの深さ0.2m前後である。共に埋土中から遺物は出土しなかった。

検出したピットは直径0.15～0.45m前後、検出面からの深さ0.08～0.15mである。共に建物を構成するものであるかは不明で、出土遺物はなかった。

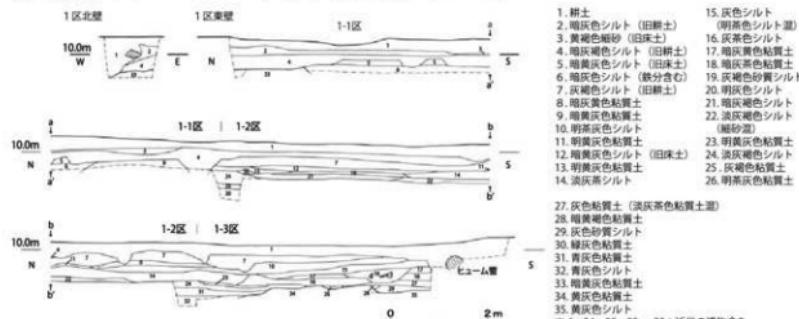


fig.138 1区遺構断面図

3.まとめ

今回の調査では、溝、ピットを検出した。整理作業が完了していないため、詳細な時期の決定および調査地の性格の検討はこれを待ちたい。

調査地は、昭和20年代に撮影の航空写真や昭和30年代の地形図から、下津橋城の範囲内に相当すると考えられてきた。昭和57年の兵庫県教育委員会による『兵庫県の中世城館・莊園遺跡』では、下津橋城は北東が鉤形に折れる、南北225m、東西125mの長方形の範囲に復元されており、居館の周囲に幅20~30mの堀が巡ると推定されている。その後、平成19年度に宗賢神社南西側（出合市民公園南側）隣接地で実施された第38次調査で、東西方向の2条の堀が確認されたことから、調査地と現在の西光寺、宗賢神社、出合市民公園の範囲が、南側の市道を南限とした、一辺90m前後の方形の居館である可能性があり、この南北2条の堀の存在から方形の居館の周囲には堀が巡り、全体がひとつの曲輪ではないことが判明した。今回の調査地はこの方形居館の南西角付近に相当するものとみられる。

今回の調査では、検出した遺構から出土遺物ではなく。これらの遺構が下津橋城に関連するものであるかは不明である。検出した遺構面は西側が低くなっているものと見られ、近世に大きな造成が行なわれていることが判明した。1区で確認した落ち込みには近世の遺物が多く含まれていた。この落ち込みが元来、下津橋城に関連したものであるかは不明であるが、調査地西側の水路方向には低い地形が存在しているとみられ、落ち込みが下津橋城の堀に関連する可能性も否定できない。また、宗賢神社の北側から東側に現存する土塁は、基底部幅10m、高さ約6mの規模であり、同規模の土塁が西側にも巡っていたとすれば、仮に西側水路境を堀とした場合には、1区や2・2・3区付近には遺構が存在しない可能性も想定でき、廃城以降において土塁の削平や耕地化など、付近には大規模な土地改変があったことが考えられる。



fig.139 2区遺構断面図

III. 保存科学調査・出土遺物の調査

保存科学調査・作業の概要

旧神戸外国人居留地下水管の保存と展示

経緯 平成 27 年 2 月、旧居留地内の京町筋中央分離帯下における埋設管設置工事中に煉瓦造下水管が発見された。日本最古の西洋式下水管であることから、緊急対応として出土状況の記録作成と、長さ約 1.5m の切取り保存を行った。その概要是平成 26 年度神戸市埋蔵文化財年報に記載している。平成 29 年度、神戸市埋蔵文化財センター秋季企画展での展示を行うために、補強および展示台の作製を行った。

旧神戸居留地の排水対策 神戸の居留地は海岸近くの砂地に計画されたこともあり、当初から雨水の排水対策が懸念されていた。そのため計画を担当した J.W. ハートは、煉瓦造の南北方向の下水管と、それに取り付く陶製土管を東西方向に配置した。幕末の混乱時にその材料となる煉瓦と西洋式陶製土管を発注し、街路の整備を含めて明治 5 年には竣工している。計画図によると、断面が円形の煉瓦造下水管が 2 条、卵形が 4 条、東は伊藤町筋、西は明石町筋までの各街路の下に計画されている。これらに取り付く西洋式土管の口径は 9 インチと 12 インチの 2 種類が計画図には記されている。

煉瓦造下水管 計画図では、京町筋は長径 24 インチ、短径 18 インチの卵形管とされており、実際に切取ったものも長径約 60cm、短径約 46cm と合致している。管は 42 個の煉瓦と漆喰で卵形断面を構成している。使われた煉瓦は、現在の JIS 規格 R2101 の耐火煉瓦「標準横ぜり形れんが」に類似することから、両長手の厚みが異なる今回の煉瓦もこれに準拠し、以下「横ぜり形煉瓦」と呼称する。

切取った煉瓦造下水管本体では、煉瓦個々の 4 面の観察はできないが、切取り時に採取した煉瓦 20 点について観察を行った。使用された煉瓦は手抜きの普通煉瓦と同様の特徴を持っている。平面の一方は表面に抜き砂が付着するためにざらつきがあり、型抜き成型後の調整がほとんど見られない。もう一方の平面には主に長手方向のナデなどの調整痕が残り、平滑性が反対面に比べると乱れている。抜き砂の付着する面が型成型時の下面であった可能性が高い。長手面 2 面のうち、厚みの薄い面（以下では JIS 規格での表現である C2 とし、反対面を C1 とする）は、下水管使用時の黒色付着物により確認できない場合も多いが、両小口、C1 は横方向のナデ調整が残っている場合が多い。

主に平面でへら描き記号「一」「二」「三」の三種を確認している。多くは、抜き砂の付着していない面に力強く、勢いよく描かれている。また、切取り

表 14 下水管に使用された横ぜり形煉瓦の厚み

神戸外国人居留地 下水管		内径断面寸法	計測対象点数	C1 平均	C2 平均	C2 / C1
1	京町切取り卵形管	長径約 60cm、 短径約 46cm	42 点 × 2 面 = 82 点	52mm	36mm	0.69
2	伊藤町復元卵形管	長径約 76cm、 短径約 53cm	38 点の内 27 点	53.7mm	40.3mm	0.74
3	湊花町復元二重管 円形管	直径約 90cm	指定オリジナル 40 点	57.1mm	47.6mm	0.83

1.、2 は神戸市建設局雨水排水センター、3 は神戸市埋蔵文化財センターに保管 (2020 年)。

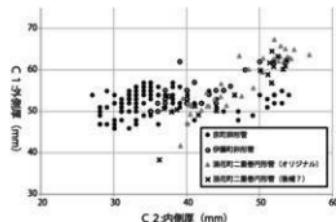


fig.140 横ぜり形煉瓦の C1・C2 散布図

遺構の管内面に「明石 増谷」の刻印を持つ煉瓦を1点確認した(巻頭写真2-5)。産地と屋号を示すと想定できるが、文献ではまだ確認できていない。

現在保存されている他の煉瓦造下水管の横ぜり型煉瓦のC1とC2の値の分布において大きく3つのグループにまとまりを見せる(表14・15、fig.141)。現在の耐火レンガのJIS規格はC1は65mmで一定で、C2はY1タイプで59mm、Y2タイプで50mm、Y3タイプで32mm、各タイプの比率(C2/C1)はそれぞれ0.9、0.76、0.49となっている。幕末において、すでに口径や湾曲に合わせた規格に基づき煉瓦が製作されていたことが窺える。

表15 京町筋下水管煉瓦観察表

煉瓦 番号	ヘラ 書き	ヘラ書き位置 (mm)	長さ平均 (mm)	幅平均 (mm)	厚さ C1 平均 (mm)	厚さ C2 平均 (mm)	重量 (kg)	調整・成形備考	付着物
1	「一」	上面 中央やや下	223	108.5	54	34.5	1.92	平下面に充填不良	C2に黒色付着物
2	「一」	上面 下端から約30	224	112	56	33	2.08	平上面に压痕2条	C2に黒色付着物
3	「一」	上面 下端から約20	224	110.5	53.5	33.5	2.05	平下面に充填不良	C2と両平面約半分に黒色付着物
4	「一」	上面 下端から約30	222	110.5	53	38	2.04	平下面長手方向半分の線状壓痕と C1に粗面压痕	C2に黒色付着物
5	「一」	上面 下端から約20	220.5	112.5	54	34	2.13		
6	「一」	上面 下端から約20	219.5	116	50	31.5	1.9		
7	「一」	下面 ? 下端から約20	225	111	53	35	2.09	上面、下面が不明確	C2とわずかに両平面に黒色付着物
8	「一」	上面 下端から約15	220.5	109.5	54.5	38	2.18	平上面4辺の角に緩やかな面取り	C2とわずかに両平面に黒色付着物
9	「三」	上面 下端から約25	223	115	55	31	1.92		C3に黒色付着物
10	「三」	下面 下端から約155	225.5	113	49	28.5	1.86		C2と黒色付着物
11	「一」?	上面 下端から約25	224.5	110	56.5	38.5	2.24	へら書きは浅く長い	C2と両平面に黒色付着物
12	「一」?	上面 下端から約30	223.5	112	55.5	33	2.03	へら書きは浅く長い	C2とわずかに両平面に黒色付着物
13	「二」	C1	226.5	113	52	37.5	2.14		黒色付着物なし、薄く漆喰付着
14	なし		230	114	55	2.53			平下面に漆喰

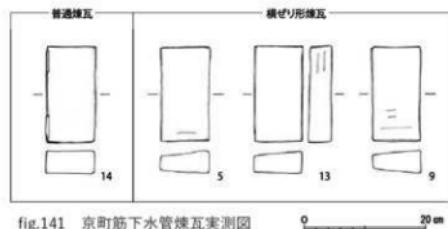


fig.141 京町筋下水管煉瓦実測図

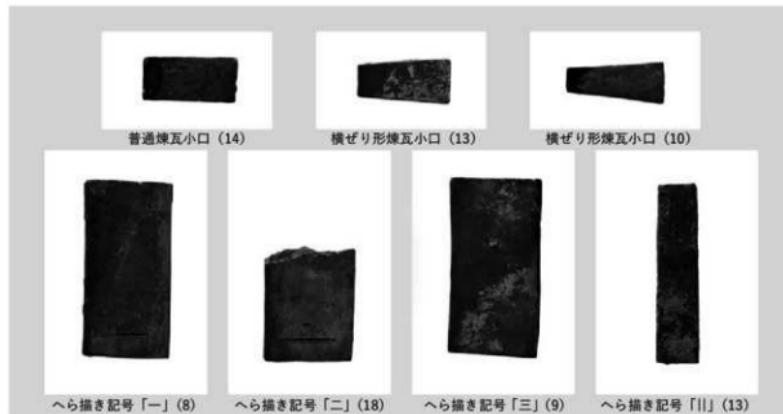


fig.142 出土煉瓦

取り上げ遺構の保存科学的処置

当市西区所在の神戸市埋蔵文化財センターにおいて仮保管していた切取り遺構は、このままの状態では調査・展示等の活用を行うことができないため、開梱し、利活用が可能な状態で保管できるよう措置することとした。

まずは発泡ウレタンフォームを開梱し、内部の状況を確認した。下水管は横断面が楔形を呈する横ゼリ形煉瓦と横断面が長方形の普通煉瓦を、倒卵形に組んだ状態で地下に埋設されている。この煉瓦を用いたアーチ構造を「迫持（せりもち）」と言い、周囲土壌からの外圧および自重によって形状を保っている。上半を開梱すると、煉瓦同士がずれて目地が開いている箇所が確認できた。これは切取りおよび搬送時の振動や、下水管内部に充填した発泡ウレタンフォームの膨圧によって煉瓦が動いたものと考えられる。

下水管は本来、四周からの圧力があつてアーチ形状を保つのであるが、全周を覆ってしまっては展示に供することができない。よって、上半は露出して観察できるようにし、下半は全体を包み込む支持台を設置することとした。支持台は下半に木枠を組み、煉瓦表面との間隙を発泡ウレタンフォームで充填して荷重を均等に受ける構造とした。また上半についても目地が開き、ずれている状況から、固着状態を保っている塊ごとに一旦取り外し、エポキシ系合成樹脂を用いて固定しなおすこととした。

上半の煉瓦は番号を付した上で順次取り外しつつ、内部に充填していた発泡ウレタンフォームを除去した。煉瓦は、構築時に漆喰と考えられる灰白色を呈する混和材を用いて煉瓦同士を固着させており、上半の外面にも同様の素材を塗りこめている。一方下半には内外面ともにこれを用いていない。

一旦取り外した煉瓦を再度組み上げる際には崩壊を防止するため、バテタイプのエポキシ系合成樹脂（コニシ K モルタル）を用いて固定した。使用した樹脂の量は再度取り外す可能性を考え、最小限度の使用に留めた。また、調査時に作成した断面図（fig.148）に合わせたアーチを組み上げるには型枠が必要であり、これには板状の発泡ポリエチレン緩衝材を内面形状に合わせてカットしたものを用いた。



fig.143 上半部煉瓦組み上げ作業

fig.144 発泡ウレタン開梱作業

上半を組み上げ終えると、発泡ウレタンフォームで再梱包して天地を反転させ、下半のウレタンを開梱した。先述のとおり下半には漆喰は施されていなかった。また予測された煉瓦のずれ等の破損は見られなかったため、下半は解体せずにそのまま支持台を設置することとした。支持台設置の前にはアルミホイルで離型養生を施したのちに先述したバテタイプのエポキシ系合成樹脂で全面を覆い、さらにガラスクロスを液状タイプのエポキシ系合成樹脂（EPICLON855）で塗りこめてバックアップとした。その上に角材で組んだ支持台を設置してEPICLON855で固定、間隙を発泡ウレタンフォームで充填した。

再度反転して正位に戻したところで設置作業は完了したが、埋設時の状況を分かりやすく展示するため、周囲土層の再現を行った。再現作業は調査時に持ち帰っていた現地の土壌を、変性ポリウレタン合成樹脂（トマック NS-10）を塗布した合板に散布して固着させることで表現した。完成した煉瓦下水管は埋蔵文化財センターにおいて保管し、企画展等において展示・公開している。



fig.145 下半部バックアップ設置作業



fig.146 支持台設置作業



fig.147 完成後展示状況

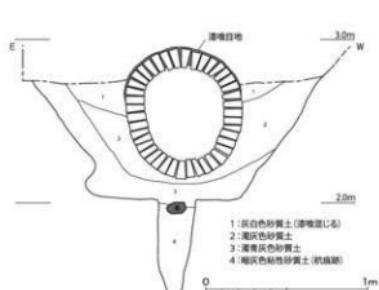


fig.148 煉瓦下水断面図

平成 29 年度 神戸市埋蔵文化財年報

令和 2 年 3 月 印刷
令和 2 年 3 月 発行

発 行 神戸市教育委員会文化財課
神戸市中央区東川崎町 1 丁目 3-3
TEL 078-984-0742
印 刷 デジタルグラフィック株式会社
神戸市中央区弁天町 1 番 1 号
TEL 078-371-7000

